

501
193



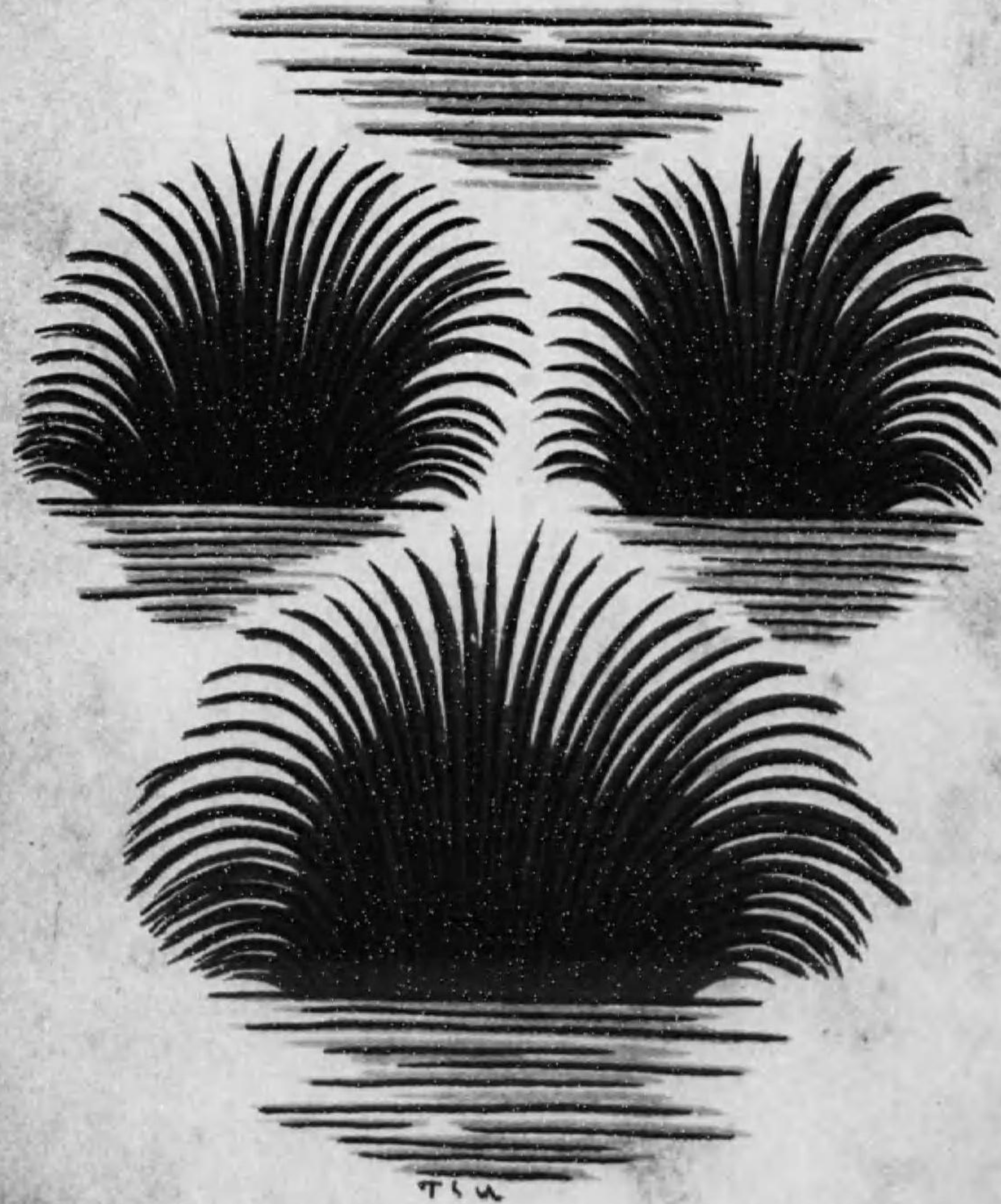
始



5441

淵 深

著 鳥 白 宗 正



版 出 堂 星 金



50/-193

深 淵

著 鳥 白 宗 正

1921



版 出 堂 星 金



深

淵

正宗白鳥作

501
193

手水鉢に薄氷が張つてゐるが、昨日一日吹通した空つ風は鎮まつて、朝日は春のやうに麗かに照つた。

日曜の休日であつても、山村英吉は平生通りに起て、庭掃除などして、例のやうにパンとコーヒートで軽い朝食を済ました後では、日當りのいゝ書齋へ入つて、好きな煙草を吸ひながら、玻璃越しに戸外を眺めて時を過してゐた。隣家の屋根に羽を光らせて囀つてゐる二三羽の雀や、向ひの崖上の一片の枯葉も留めてゐない高い銀杏の木などが、彼の目に映つたり消えたりしてゐたが、心の中ではやがて訪ねて来る筈の姪の仙子のことを瞬間も離してゐなかつた。

聰明な一人子の市太に死なれてから、半年ばかりの間にあつさり歳を取つた彼は、長い間消えかゝつたまゝであつた信仰心の餘燼を掻き起して、青年時代の手垢のついてゐる聖書を書棚の隅から捜し出して讀んだり、時々安息日を聖く守つて彼方此方の教會堂へも足を向けたりしてゐる

るのであつたが、今日はその氣保養がてらの教會行をも止して、一圖に仙子の到着を待設けてゐた。

二三年前に寄食させてゐた時には、さして寵愛もしなかつた彼女を、非常な珍客のやうに、あつては楽しい福音を持つて来る天の使ひでもあるやうに、熱心に待ち受けてゐるのは、英吉自身にも可笑く思はれたが、しかし彼女によつて陰鬱なこの家の空氣も清められて、隅々までも明るい光に照らされさうな氣がするのには、さういふ氣持だけでも、この頃の英吉夫婦に取つては、棄てがたい幸福になつてゐるのであつた。端ないから少し慎めよとがつて戒めたことのある仙子の高い笑ひ聲も云ひやうのない懐しきをもつて思ひだされた。

「あのくらゐな年頃だと、二年も見ない中には、見違へるやうに變つてゐますよ。顔ばかりぢやない、心持も以前のやうぢやありませんまいよ」

「變つてゐると云つても、あの女は性質が悪くなる氣遣ひはない。今度來たら長く居つくやうに親切にしてやれ。成べくならいゝ縁を見つけて東京に永住させるようにしたいものだ。あれの親爺が東京者にはやらないなんて、いくら頑固に云つても、おれ達が旨く當人を説伏せて、いゝ亭主を持たせてしまへば、それで收まりがつくんだ、田舎の田地持や商人の女房なんかになつ

て、薄汚なく燻ぶつて一生を暮すよりや、東京で縁付いた方が當人のためにも幸福なんだから。

おれはちやんとさう極めてる」

此方の勧告に快く應じて、仙子の上京の知らせのあつて以來、夫婦の間にこんな話が屢々返されてゐた。そして、英吉は都合によつたら、姪を養女として婿を取つて、自分の家を相続させてもいゝと考へてゐたが、そこまではまだ妻に打明けなかつた。

置時計が十一時を指すと、「もう來さうなものだが」と、英吉は靜座から動いて縁側へ出て、道の一角を見下した。出迎へに行つた明に連れられて、俣が徒歩かでそこへ姿を現す筈の仙子を一刻と待受けてゐるが、さうして見てゐると、往來の老若男女の姿が明瞭に心に留つた。そして、どれも皆苦のなさゝうな顔してゐるのが不思議に思はれた。少くも自分達のやうな失望や苦悶は経験してゐない人ばかりのやうに思はれた。

豫期が裏切られもしないで、間もなく若い二人の姿が目に映つた時には、彼れは、「來たく」と思はせ口に出して微笑した。古びた角帽を被つた元氣な明が、大きな合財袋を肩に掛けて、何かの模様の入つた派手なシヨールを着けた仙子と並んでサツサと歩いて道の角を曲つた。

英吉は急いで階下へ下りて妻に知らせた。

夫婦が玄關の障子を開けて待つてゐると、「只今」と聲を掛けて入つて来た明の後から、仙子が満面に微笑を漂はせて激しく息を吐きながら入つて来た。無雑作に束ねた髪が少し亂れてゐる外には、晝夜俵や汽車に乘通したらしい疲労の眼は何處にも見えなかつた。

「よく来て呉れましたね。途中で間遠ひが無ければいゝがと、昨日から心配してゐたんですよ」と、妻君のおとよが云ふと、

「汽車の中ではよく眠りましたの。だからさう退屈はいたしませんでした」と、仙子は答へたが、その音聲は夫婦が豫期してゐたやうに快活であつた。そして、「こころ綺麗に抜けてゐる田舎訛のまた加はつて来たのが、英吉の耳には却つて懐かしく聞かれた。

かねて用意してあつた妻君手製の西洋料理が持出されて、主客四人で賑かに食卓を圍んだが、仙子は明に注意されてゐたので、亡兒市太のことにはあまり話を觸れないやうにして、二年あまり海に沿つた故郷に閉籠つてゐた間の事を重なる話にした。明も英吉の周旋によつて一夏を其處で送つたので、田舎の話はますます賑はつたが、英吉に取つても、その後の自分の家の陰氣な生活振りを顧みたり口に出したりするよりも、すでに十幾年も寄付く機會のなかつた故郷の話を聞いてゐる方がどれほど氣持がいゝか知れなかつた。

「でも田舎は叔父さんが東京で考へて居りなされるやうなものぢやありませんぞな。この前仕方なしに彼方へ歸る時分に、両親に孝行せいと、叔父さんが仰有つたから、私一生懸命に孝行してお父さんの云ふ通りにしてゐたんですけど、些とも幸福なことはありませんでしたの。一年も経つとつくづく厭になつて、機會さへあつたら、何時でも家を出られるやうに、旅費を溜めてゐたんです。だから、叔父さんが手紙を下すつた時には、生返つたやうな氣がしましたがな。同じことならお父さんに無斷で家を出出すよりや、公然出て来た方がいゝに決つてゐますからね。今度こそお父さんがいくら私を呼戻さうとしたつて歸つて行きやしませんよ。」と、仙子は歓迎されたのを喜んで調子づいて云つた。

「お前がその氣なら、何時までも此處にゐて貰ひたいのだが、お前などは何處にゐたつて幸福でないつてことはないぢやないか。両親は揃つて丈夫であるし、兄や姉があるし、家の生活も富裕なのだから、言分はない譯だ。かうしてお前の顔を見てゐると、悦しい事ばかりして来た人間のやうだがね。」

「泣いた経験のない人間のやうに見えますの」と、仙子は英吉の目を外らして、「今東京へ着いたばかりで直ぐに六ヶ敷お話をする氣にはなれませんけれど、その中緩くり叔父さんに聞いて頂

きたいことがあるんですよ。その事についてちや叔父さんの外には私が信用を置いて判断して貰へ
さうな人は、日本中に一人もないやうに思はれるんですがね」

「暫く會はない間に、お前も六ヶ敷ことを云ふやうになつたね。どんな問題だか知らんが、お
れの頭も鈍になつて、お前達の得心の行くやうな解釋が出来るといふ自信がなくなつたよ。しか
し聞くだけは聞いて、おれの方で考へられる限りは考へてやるよ。どんなことだい」

「御飯を頂きながらお話出来るやうなことぢやないの。叔父さん一人にソツと聞いて貰ひたい
んですがな」

すると、先つきから火鉢の側に膝を崩して、今日以後の仙子に對する自分の態度について竊に
考へてゐた明は、ふと、

「さう勿體をつけても駄目ですよ。僕にはちやんと分つてゐるんだから」と、笑ひくく云つた。

仙子は思はず目を伏せていやな顔したが、たゞの擲擧に過ぎないのを直ぐに察して、「ちや、貴
下は分つてる氣でゐらつしやいな」と、安心して云つた。

「人間の運命といふやうなことを、貴女が今問題にしてると思つてりや大した間違ひはない
さ。だけど、そんな事は叔父さんでも誰でも判断すべきものぢやありませんよ。兎に角貴女がい

い運を持つて此家へ來たことだけは確なんだから、それで澤山ですよ」

明が獨り極めにして云つた言葉は、英吉を喜ばせた。

「お前達が側ゐて呉れれば、おれだつてまだ老朽ちる年齢ぢやなし、も一度元氣を出して研
究も著述も續けて見たいよ。おれには昔のやうな熱烈な信仰心が湧きさうぢやないが、お前達の
若い心や生々した肉體は信仰するよ。お前達のその丈夫な肉體は何よりも尊いものなんだから、
大切にしなければならんぞ。」

叔父に調子外れにチャホヤされるのが若い二人には標つたく思はれてゐた。ことに明は、田舎
娘の仙子に尊いところがあるのか知らんと、ソツと目を付けたが、停車場で會つた刹那に感じた
やうな物足らなさが再び感ぜられた。田舎に避暑してゐた時分にこそ周囲の者が薄汚くて田舎く
さいから、自然仙子だけが奇麗に見えて話も合つたのだつたが、都會の中に置いて見ると、さし
て心を寄せるに足る女とは思はれなかつた。叔父と一緒になつて「いゝ運」を迎へたのが、少し
當てが外れたやうでひとり可笑かつた。

食後紅茶を入れて取留めのない話がいよくはすんでゐるところへ、不時の來客があつて、英
吉夫婦が客室の方へ行つた後で、明は仙子に向つて、

「分つたでせう。叔父さんに以前のやうな元氣のないことが。傍の者にさう思はれるだけならいゝが、自分で自分の力を信じなくなつちや駄目ですからね。そのかはり此方でうまく機嫌を取つてさへるりや、大抵のことを聞いて呉れるから、僕等のためには却て都合がいゝ。貴女を此方へ呼ぶについても僕が餘程叔父さんを唆かしたんですよ」と、低い聲で云つた。「どうも有難う」と、仙子は愛嬌を見せて、「私を東京へ來させて呉れた人には誰れにでもお禮を云ひますわ。叔父さんは顔こそ萎びて老人くさくなつてゐるなざるけれど、心は元通りに立派な人に違ひありませんよ」

「まあこの家にゐて見てゐらつしやい。あの年齢で自信を失つちや回復の道はないんだから。……貴女がそれほど來たがつてゐた東京へ來て、第一に心掛けてゐることはどんなことなんですか。

この寂しい家庭を慰めるためなのですか。また學問でもはじめやうと云ふんですか」

「何をすることも叔父さんに相談した上でなければ……」仙子は相手が生真面目なので、云ひたいこともそのまゝには口へ出しかねて、「貴下はよく此家へ來てゐるなざるの？」

「ひと頃は三日御無沙汰してゐても呼寄せられるつていふ風だつたのです。御馳走して貰へるのは有難いが、愁歎のお相手には閉口して、成べく遠ざからうとしたのだけれど、しかし、これ

からはよく遊びに來ますよ」と、明は云つて、「これからは貴女が此家に女王のやうに優待されてゐる譯なのだから」と、平氣な顔して云はずともこのことを言添へた。

「だつて、私此家の女王になつたつて仕方がないわ。以前のやうに居づらいことでもあつたら、直に此家を出て、一人で東京で暮らす覺悟はちやんとしてゐるんですがな」

「叔母だつて今度は貴女に居づらる思ひをさせやしませんよ。だから、女王になつた氣で叔父さんを支配して見るのも面白いさ。僕も應援しますよ。叔父さんも我々に支配されるのを喜んでるんだから」

明は何かの株券を有つてゐるこの家では、戦争のために勞せずしていくらか財産の殖えてゐることをも話したが、さういふ話には仙子は殆ど興味を感じなかつた。

「貴下からたび／＼お手紙を頂いたりしたことなんか、叔父さんや叔母さんに云つても構はないでせうか」と、ふと意味ありげに訊いたが、

「いゝですとも。僕は何でも打明けてゐるんです。貴女もこの家では老人二人を遠慮したり恐れたりしない方がいゝでせう」と、明は無雜作に答へた。

本當にアケステと何もかも話されてゐるのか知らんと疑ひながら仙子は極りの悪い思ひをし

た。

明は溜かい日曜を此家でのみ過すのが惜かつたので、間もなく暇を告げたが、歸り際に開けられた仙子の合財袋の中から、一包の土産物が彼れの手渡された。

「何だか知らんが、下宿へ歸つてから開けて見ませうね」と言葉で、明は包みの中味を想像しながら表へ出たが、仙子はあんな物を遣らない方がよかつたか知らんと、遣つた後で直に後悔してゐた。

「何を考へてる？ 聞きたいことがあるから二階へお出でな」と叔父に云はれたので、仙子はかねて考へてゐることを、一時も早く聞いた方がいゝと決心して二階へ隨いて行つた。階下にも新しい家具や贅澤品が殖えてゐたが、書齋にも、以前の田村町の假宅には無かつた金屏風が立てあつたり、何の木だか自然木の火鉢が置いてあつたりして、質素だつた昔とは様子が些つと違つてゐた。廣いばかりで古びた薄汚ない家を見馴れてゐる彼女の目には、狭くてもキチンとした小綺麗な叔父の家がいかに住心地のよさうに思はれた。

「今度はお前を使ふために呼んだのぢやない。叔母さんが寂しがつてるから、話相手になつてゐて呉れれば、それ以外に用事はないやうなものだが、しかし、お前には何か習ひたいとか何と

か望みがあるのだらう。遠慮しないでおれに打明けなさいか。出来ることなら聞いてやるよ」

叔父にこんな有難いことを言はれると、仙子は是非これほどの學問をしたいとか、音楽を習ひたいとかいふやうな高尚な慾望を有つてゐないのが恥かしかつた。

「習はせて下されば何でも習ひたいんですけれど、そんなことはもつと先のことにして、當分は叔母さんのお手傳ひをさせて置いて下さい」と云つて、仙子は叔父の懐き易い目顔を見い、
「私叔父さんにお聞きしたいことがあるんですがね。それは私のことぢやないんですけれど……
…他人事のやうにして自分の身の上を云つてゐるんだと思はれちや困るんですけれど」と言込んだ。

「いやに六ヶ敷んだね」

「私のことぢやないし、私が懇意にしてゐる女のことでもないんですがね。ある女の人が一度も見たことのない男に思ひを懸られて、終ひには此方で拒絶したら自殺しなうなことでまで云つて來られるので、可愛さうにもなるし恐ろしくもなつて、家を逃出してその男に會ひに行つたんです。たび／＼男の送つて來る手紙を讀んでる中に、その男の顔が目で見てるやうにハッキリして來たんですつて。そして、どうしてもその男の人のところへ行かなければ、先方の思ひで一生祟りが免れられないやうに思はれたんですつて。……人間がそんな氣になるのは全く迷ひなんでせ

うか。」

「さうさ。迷ひと云へば迷ひだらうね……。それからどうしたのだ？」

「訪ねて行くと、男の人は案外冷淡で、女の方が騙されたやうだつたのですけど、一たん決心して家を出たのだから、どんな不幸な目に會つても離れない覺悟をしてゐるんですつて。そのために身内の者や知人に不檢束な女のやうに誤解されて爪弾きされてゐるんですが、その女のしたことは絶対に悪いことなんでせうか。初めから拒絶して取合はなければよかつたんでせうけど、さうしたら一生心残りがして目醒めが悪いだらうと思はれたと云ふんですから」

「さういふ女は世間によくあるぢやないか。」と、英吉はそんな事を殊更らしく訊ねてゐる仙子の顔を不思議さうに見て、「おれのやうに若い時代を愚圖々々で通つて来た人間は、若い者のすることを晒ふ資格はないよ。……だけど、お前はさうぢやあるまいね。その女のやうなことを思つてるんぢやあるまいね」

「私は叔父さんに呼ばれて兩親の許可を得て東京へ来たんぢやありませんか」と、仙子は言葉に力を入れて、「だから、他の人のゐる所では話さなかつたのですが、私のことのやうに思はれちや溜らないから」

「なに、おれはお前の身を引受けた以上、どんなことがあつても棄てやしないから、何事でもおれにだけは打明けけるがい」

仙子は目顔で叔父の言葉に感謝して、話を外へ轉じたが、廻り遠く他人の身に假托けて作り事をも加へて云つたことは、暫く頭の中にこだはつてゐた。

二

英吉は學生時代には哲學書類を讀耽つたこともあつて、世間へ出てからも、その方の研究を全く斷念したのではなかつたが、職業としては、英語の教師を續けて勤めて来た。育英の事業に興味を有つてゐるのではないし、俸給にさしたる執着があるのでもないから、暑いにつけ寒いにつけ、ともすると厭氣が差して、屢退職を思立つたのだが、老いたとは云へ、まだ五十を越したばかりで、無職で日を暮らすのは心苦しいので、學校の方から斷られるまではと、今もなほ築地のある學校で熱のない教鞭を取つてゐるのであつた。

そして、愛兒を失つた後の彼は、日々の職務を終へて家へ歸る間にも張合ひがなかつたが、仙子が來てからは、新たに力づいて、足の運びも早くなるやうであつた。毎日のやうに途中で菓子

だの果物だのを買つて歸つた。

「もう叔父さんの歸つていらつしやる時刻だ」と、仙子は毎日楽しんでその時刻を待った。以前寄食して女學校通ひをしてゐた時のやうな氣兼ねがなくつて、郷里の家にあるよりも、却て手足が伸々して氣持も自由であつた。天氣のいゝ日には叔母のお伴をして市太の墓へ参つたり三越や白木屋などへ遊びに行つたりして、暫く夢のやうに暮してゐたが、彼女が東京へ来て以來何よりも先づ果したいのは、Sといふ符牒で長い間自分の頭の中で勝手に描いてゐた青年に會つて見ることであつた。明と同じやうに此家の叔母のおとよの身内に當るのだが、彼女は明よりもこの未知のSの方へ心を惹かれてゐた。この夏故郷の海のほとりで、明の口から東京の事や歐洲戦争の事や明自身の將來の抱負なども聞かされてゐた時でも、此方を誘ふやうな口を利かれて、此方からも望みを寄せたやうな返事をしてゐた時でも、目顔の凛々しくて男らしい眼前の明よりも、未見のSの方が一層慕はしかつた。両親の勤める縁談を頑なに斥け斥けしてゐる間にも、東京へ行きさへすれば、自分を待つてゐる人があるといふ自信を絶えず抱いてゐた。「東京へ出て入らつしやい」「え、どうしても行きませすわ」と、明と堅く約束してゐた時でも、Sを念頭に置いてゐたのであつた。東京驛で、明に出迎へられた時にも、明の側にSの影法師を見てゐた。

仙子は両親や親類の人達に貰つた金は長いこと溜めてゐたのを、今度はソツクリ持つて來たのだが、Sから送られた數通の不思議な手紙をも同じ袋に入れて持つて來てゐた。彼女は自分の部屋に當てられた奥の室で、寢床に就く前などに、それ等の不思議な手紙を取出して讀取ることもあつたが、多少の不安な思ひを起さゝれると、このまゝ知らん顔してはゐられないやうに頻りに心が唆られた。

「自分は市太君の死亡當時に山村先生夫妻を慰めるためにしたこと云つたことが却て先生達の誤解を招いたので、この頃は遠慮して寄りつかないやうにしてゐるが、自分の方では些しも惡意を持つて居るのぢやないから、早晚誤解も消えて、改めて先生の書齋へ伺ふこともあらうと思ふ」といふやうなことが一つの手紙には書いてあつた。

「貴女が山村家に寄寓してゐられた時には、自分は馬關や福岡に奉職してゐたので先生のお宅でしみじみお目にかゝることは出来なかつたけれど、クリスマスに飯倉の教會へ、叔母さんと一緒に出席してゐられたのを見たことがあつて、自分の胸の中には貴女といふ人がよく印象されてゐるのです。貴女の氣質も叔母さんなどに聞いてよく知つてゐるのです。」と、最初の手紙には書かれてあつた。そして明のサツパリした手紙の文句とはまるで違つた、情愛を籠めた文字が繰返

されてあつたが、最初のから最近のまでの手紙にも、この事については先生夫妻や明君に一語も洩らして呉れるな。さうされたら自分の非常な不幸が湧いて来るからと力を入れて書添へてあつた。

飯倉の教會へ叔母さんに連れられて行つたことは確にあつたが、Sが其處へ行つてゐるのなら、叔母さんが何とか云ひさうなものだがと、仙子は不思議に思つた。

「私は近日東京へまゐります」と、仙子が寄らず觸らずの返事を出した時に、折返してSの寄越した手紙には、長々と歡喜の思ひや新たに相會ふの望みを、既に戀人になり了せたものゝやうに述べてあつたが、その終りには、例のやうに誰れにも洩らすなといふ文字を添へてゐる上に、「先生達にお會ひになる時に、私の名前をも成べく云はないやうにして下さい」と、書いてあつた。

仙子は自分の方からはSの名を口外しないやうに謹みながらも、叔母か誰れかの話の中には、自然Sの事が出て來さうなものだがと待設けてゐるが、三日経つても四日経つてもSに關係のあることは聞かれないので抵悟しかつた。そして毎日のやうに話の種になるのは明のことであつた。

仙子は就眠前に兩親へ宛てた長い手紙を書いた次手に、Sへ宛て、上京を知らせる簡単な手紙を書いたが、それは袋の底へしまつて置いて容易にポストへは入れなかつた。

「先日お前がおれに話してゐた女は今は何處にゐるんだね」と、ある夜、英吉はふと思ひ出して仙子に訊ねた。暗い雨が正午前から降續いてゐる寂しい夜で、例なら、夫婦が茶の間か二階かで火鉢を挟んで、目の前に浮んで來る亡兒の影に惱まされながら、亡兒の人並みすぐれて聰明であつたことなどを互ひに語合つて懶い時間を過ごすのであつたが、幸ひに仙子が側にゐるために、話が陰鬱にならないで濟んだ。

「大阪にゐるんです」仙子は叔父に問詰められて作り事のばれるのを氣遣ひながら、キツバリした返事をした。

「さうかい」英吉は自分に縁のないそんな女のことには興もないので、追窮はしなかつた。仙子のやうな若い女の口から、新しい面白い話を頻に聞きたかつたが、彼女の田舎の話も毎夜のことで略種が盡きてゐるので、「おれも明くらゐでも酒が飲めればいゝと今夜のやうな晩には思ふよ。お仙は三味線も弾けないし、唄も知らないんだらうね」と、突如に云ふと、

「どうしてそんなことを仰有るんですの？」と、仙子よりも妻君のおとよの方が驚いた。

「三味線を弾くのがお前の考へてるやうに悪いことぢやないよ。お前は信心深い両親に耶蘇教一方で育てられたから、若い時から酒を一杯飲んでも大變な悪事のやうに思込む癖がついてるが、お互ひに愚なことだつたのさ。考へて見ろ。若い間も年齢を取つてからも、謹直で通つて来たためにどれだけの幸福があつたと思ふ。お互ひに明や仙子くらゐな年輩にならうたつてなれやしないんだぜ。お前は讚美歌の他には唄一つ知らないで通つて来たんだからね」

「ぢや、吉元さんの家のやうに、御主人が酔拂つて唄を唄つて奥さんが三味線を弾いて騒ぐのが幸福なのですかね」とおとよは皮肉に云つて、「貴下の仰有ることは平生輕蔑してゐらつしやつた世間の俗人の云ひさうな平凡な説ぢやありませんか。」

「さう云へばさうだが……」英吉は不平であつたが、妻と言争ふ氣にはなれなかつた。

「お仙ちやんが来てから、貴下はそんなことを考へるやうにおなんなすつたのね」

「さうかも知れない」と、英吉は言濁したが、自分でもひそかにそれに氣づいてゐた。夫婦は口を噤んで座が白けかゝつて、仙子に窮屈な思ひをさせたが、

「とに角、この前のやうにお仙をおれ達の型に嵌めやうとしなくつてもいゝよ。お前もお仙を連れて芝居でも見に行つたらいゝだらう。世間の人が皆んな面白いと思つてる者は、お前達にも

面白いに違ひなからうから」と、英吉はやがて柔しい目をして云つた。

「お仙ちやんが見たいと云ふのなら、芝居へでも何處へでも一緒に行かないことはありませんけれど私そんな浮いた所へ強ひて行きたいとは思ひませんよ」おとよは稍心を動かして、「第一どういふ手順で見物するのも知らないんですもの」

「静夫は芝居にも明るいが……」ふと英吉の洩らした言葉は、おとよにも仙子にも異様な刺戟を與へたが、英吉はそのことはそれだけで打切つて、仙子に向つて、「お前は芝居を見たことがあるのかい」

「田舎の芝居なら二三度見て知つとります」

それが新しい話の種になつて、仙子は思出し／＼話して座を賑した。

舊曆の正月に村の若い衆の一群によつて演ぜられた素人芝居の滑稽などを話しながら、外では見られない淫靡な様が、その舞臺の上で現はされたことを、仙子はひそかに思ひ出したりしながら、

「色の黒いゴツ／＼した男が白粉を塗つて髪を被つて女の眞似をするんだから、可笑くつていやらしいんですよ。東京でもさうでせうか」

「東京の役者は綺麗なのさ」と云つて、英吉は再び静夫のことを不用意に口に出した。「白井は何とか云ふ舊芝居の役者に似てるつて云ふぢやないか。たしかお島がさう云つてた」と、流し目で妻君を見た。

「役者なんか似てるのが、静夫の名譽でも幸福でもないぢやありませんか」

「それは名譽でもあるまいが、おれは一概に静夫を排斥する氣にはなれないよ。男らしく過失を悔いておれ達に詫び状をも寄越してらんだから、出入りを許すことにしやうぢやないか。決して明の云ふやうな悪人ぢやないよ」

「だつて、あの時のことを考へて御覽なさい。私達が侮辱されてるんですからね。市太の速夜にあんな騒ぎを起したのですもの。たとへ静夫に暗いところが無いにしても、道に外れたことが皆なの噂に上つてる以上、あれを家へ近づけることは恐ろしい氣がしますよ。お仙ちゃんのやうな純潔な女を静夫とは懇意にさせたかありません」

「噂はどうだつても、女の方が悪いんさ。静夫もおきくなんかを相手にする男ぢやないのさ」英吉はさう云つて笑ひながら、「お前が静夫をいかにも油断のならない男のやうに思つて恐れてるのが、おれには腑に落ちないね」

「貴下にはあゝいふ若い男の氣持が分らないんです」

「お前にも分りやすまい」

英吉は妻君の氣色ばむのを不思議に思ひながらも、仙子の前で不快な言合ひをするでもない、話を轉じて、近日明をでも誘つて芝居見物に行けよと勧めた。そして、大儀に感じながらも明日の授業の下調べをしに二階へ上つて行つた。

仙子は先日間と違つた叔父叔母の調子外れの話つ振りに驚いてゐたが、Sの人となりについて、少しでも聞いたのは悦しかつた。

「折角叔父さんが勧めるんだから、貴女と芝居を見に行かうかね。とに角明を呼びませうよ。貴女が手紙でさう云つてお遣んなさいな」と、おとよは傍に仙子のゐるのを忘れたやうに、暫く何か考へ込んだ後で云つた。

「明さんはあの後ちつとも入つしやらないのね」

「先日間は始終來てるたんですがね。風邪でも引いたのか知らん」と、おとよは何氣なく云つたが、ふと思出したやうに、「お仙ちゃんはこの夏、静夫のことを明から何か聞かされなくつて？」
「いゝえ、なんにも」と、仙子は何氣なく答へたが、その瞬間叔母の目の懐きがいのにふと

氣づいて、「私静夫さんには、一度もお目にかゝつたことはありませんから」

「さうでしたかね。家へは偶にしか来なかつたから貴女は會つたことがないかも知れない。明とは以前は非常に親しい友人だつただけけれど、この頃は絶交同様になつてゐるんです。夫にはいろ／＼譯があるんでせうが」と、おとよはさう云つてゐる間に興奮して、身體をも稍仙子の方へ近づけて、「お仙ちゃん、明をどう思つてゐるかさ知らないが、あの子は善良な人間だから、好意を有つて交際して下さい。明に失望させないやうにして下さい。叔父さんは獨りで若い者の心をよく知つてゐるやうなことを云つてゐらつしやるけれど、叔父さんには何にも分つてやしません。静夫は精神的に女一人を殺したのだから、私はあの男を憎んだり恐れたりしてゐるんです。……明にはこれから世の中へ出ようといふ時になつて、失望させたくない、私は熱心に願つてゐるのだから、お仙ちゃんもその氣でゐて下さいよ。叔父さんは若い時にさういふつらい経験がないから察しがないの」

仙子は返事のしやうがなくなつて、無意味な笑ひを強ひて浮べて、間の悪いのを紛らせてゐた。

その夜「お休みなさい」を云つて自分の居室へ退いてから、仙子は叔父夫婦の間も睦まじく静かに

暮してゐるばかりではないやうに思はれてならなかつた。それに、まだ誰れからも明らさまには云はれないけれど、叔母の口裏を察すると、自分を明に嫁はせようと企てゐるのではないかと疑はれた。

で、仙子はこれまでのやうに叔父叔母に甘えて、いゝ氣になつてはゐられないと、今にこの家や自分の身の上に變つたことの起るのを豫想して心を引締めながら、叔母に命ぜられた明宛ての端書を書いたり、人の憎みを買つてゐるSの事を考へたりして、例よりも遅くまで机の前に坐つてゐるが、すると、夫婦の寢室の方から、棘々とした聲が寂とした夜の空氣を破つて聞えて來た。耳を澄ましてゐると、幽かに何か云つてゐる叔父の聲は、叔母の尖つた聲で壓迫されてゐた。

仙子は自分がまだ起きてゐて、夫婦の言合ひに聞耳立てゝゐると思はれるのが厭だつたので、ソツと燈火を消して冷たい寢床へ入つた。枕に就くと直ぐに前後不覺に寝入れたので後の事は分らなかつたが、翌朝叔父を送り出すまでの叔母の顔の絶えず鬱陶しいのが仙子の目にも留まつた。

昨日の雨は名残りなく霽れたけれど、朝から風が出て寒さは俄かに加はつた。おとよは氣晴らしに慕參りを思立つて、「貴女は今日はお留守番してゐて下さい」と、お伴しようといふ仙子を留

めて一人で出掛けた。

仙子は寒い日に機嫌の悪い叔母に随って行くよりも、家に残されてゐる方がどれほど幸福だか知れないと喜んで、下女のお安を話相手にして、鐵瓶の湯の滾つてゐる温かい長火鉢の側で、隣近所の噂を聞いて遠慮のない高笑ひをしたりしてゐたが、そこへ、明が先日と同じ服装で訪ねて来たので、仙子は笑ひを収めて堅くるしい顔した。

「叔母さんははるないの？」と、明は訊ねて、不在を却つていゝ事として、「叔母さんは何か不平がある、お墓参りに出掛けるんですよ。墓の前で涙でも落すより外には樂みがないんだからね。」

「でも、叔母さんは貴下を大變信用してゐらつしやるから、慰めてお上げなさいな」

「僕は老人を慰める術は知りませんよ。四十でも五十でも此家の二人のやうに血が涸れてゐるや駄目です。貴女は此家へ来てからもう十日にもなるから、今時分どうしてゐるかと思つて、今日は様子を見に来たんです」

「先日から貴方が暫く入つしやらないと云つて、皆なで待つてゐましたのに」

「あれからたび／＼来るつもりでゐたのですけれど、僕が餘計なまぜつ返しをしないで、當分貴女一人の考へでこの家の様子を有りのまゝに見てゐて貰ひたいと思つて、遊びに来たいのを暫

く控へてゐたのです。長く落着いてゐられさうですか」

「私、まだそんなことを考へても見ませんの。あまり大事にして貰へるので勿體ないやうな氣がしてゐるだけですの」

「僕も半年ばかり此家の居候になつてた經驗があるが、あまり大事にされるのもよし悪だらね。貴女は叔母の感化を受過ぎんやうになさいよ。稽古したいと望んでることがあれば、僕から頼んで學校へでも通へるやうにして上げますから、折角東京へ來てゐるながら無意味に日を送らんやうになさいよ」

明は臺所と茶の間とをうろ／＼してゐる下女が目觸りにもなるし、日の差さない陰氣くさい茶の間にあるのが自分の心に相應しないやうに思はれたので、躊躇する仙子を促して叔父の書齋へ上つて行くことにした。下女に火を運ばせて、茶や菓子を用意までさせて、主人顔して叔父の座蒲團に坐つた明の様子が仙子には可笑かつた。

「いゝね。かういふ部屋にゐたら少しは勉強が出來さうだ」と云つて、明は机の上の聖書を氣まぐれに披いて、二三行黙讀してから仙子の方へ向いた。十日間考へてゐた結果を今日こそ打明けけるつもりだから、顔は平氣を裝つてゐるに拘らず頭は興奮してゐた。しかし、この女は自分次

第どうにでもなるといふ確信は有つてゐた。

薄日の照つてゐる障子に寒さうな風が迫つてゐた。明は机の上の黒塗の煙草函から金口の西洋煙草を一本取つて、火を點けて、

「この夏貴女の郷家の泉水の傍で僕の云つたことを貴女は覚えてるでせうね。叔母には大抵打明けてゐるんですよ。そして、叔母は同意してゐるんですよ」と、一息に云つた。賣女に對して戯言を云馴れてゐる彼れも、處女に向つてこんなことを云ふのは面羞かつた。

「どんなことを仰有つたの？」と白ばくれてゐるとは思へないやうに無邪氣らしく訊返されたので、明の方で却つて目を外して、

「その中叔父さんか、あるひは叔母から貴女にお話するだらうと思ひますが……貴女は結婚しろと勧められたら承諾しますか」と、いやに堅くるしい口調で云つた。熱心な愛情を持つてゐるのではなくつて、田舎くさい娘でも自分の手に入るものは、とに角のがしたくないといふ遊び半分の芝居氣が此間から彼れの心に潜んでゐたのだが、假りにも口に出した上は、相手の冷淡な返事は聞きたくなかつた。

「早晚その話が出るに違ひないから、貴女を出迎に行つた日から、僕は毎日考へてゐるので

す。公然勧められる前に僕の考へも貴女の考へも極めて置きたいと思つてゐるんですよと、明は重ねて云つた。

「でも、結婚は詰らないと、貴下はこの夏云うてゐなすつたわね。詰るか詰らないか私にはよく分りませんけれど」仙子は照れる風もなく、平生の調子を失はなかつた。

「僕もまだ學校へ行つてゐるんだし、今直ぐ結婚が出来るとは言へませんよ。たゞ將來をかうと極めて置けば、僕も方針が立つし、叔父さん達も安心するだらうと思つて、僕もこんな言難いことを口に出したんです。無論貴女には両親もあるのだから、最後の決定はさう單純に運ばないでせうけれど、何よりも先に貴女の考へを明瞭に聞いて置きたいのです。それが一番根本の肝腎なことなのだから」

「私よく考へてから御返事しますわ。私に取つては重大なことなんですもの……そのかはり、叔母さん達にお答へする先に貴下に御返事しますから。」

仙子には明の言葉が理窟張つて懐しげのないやうに聞えて、それよりも自ら卑下つて愛を求めて來たSの手紙の文句が新たな魅力をもつて思出された。役者に似たといはれた未見のSの顔が、明の後の方にほんやり動いて此方を見てゐるやうに思はれた。

「無論急に返事を迫る譯ぢやないんですよ。だけど、この夏から貴方とはいろんな打明け話もしてゐるし、手紙の往復もたび／＼してゐるんだから、僕自身があるひは叔母か、誰れかの口から、この話を持出したらうとは、貴女だつて豫期してゐた筈ぢやありませんか。僕は長い間考へてゐたのに、貴女は些とも考へちやるなかつたのですかね。」

「それは私だつて考へてゐないことはありませんわ。……だけど、御返事だけは、もう少し待つて頂きたいの。……だつて直ぐ御返事するのは何だか怖いやうな気がするんですもの」

「一度承諾したら取返しがつかないから？」と、明は物思ふやうな目付を、これまでに美しく感じた。そして、處女としては結婚といふ言葉に恐れを抱くのは無理もないのだらうと、自ら慰めて、あまり執念く云つて、相手の感情を害ねるのを憚つて、話を外へ轉じた。

先つき何の氣なしに讀んで抛出した、叔父の若い頃の手垢のついてゐる聖書を、再び机の上から取上げて、同じところを披いて、「たとひわれ諸々の人の言葉及び天使の言葉を語るとも、若し愛なくば鳴銅や響鈸の如し……たとひわれ凡ての所有を施し、また焚かるためにわが身を與ふるとも若し愛なくばわれに益なし」と、數節を牧師染みた調子をつけて朗讀して、

「叔父さんはかういふものを毎日讀んでゐるんですよ。だけど、いくら聖書でも、死んだ書物か

らは慰めも力も得られないだらうからね」

明は仙子に訊かれて、聖書の文句の意味を説明して、

「叔父さんも、子供に死なれてから、一時來世や復活を信じようと骨を折つてゐたのだが、その方は駄目になつたらしい。そのかはりに僕が以前よりも叔父さんの信用を得るようになったんです。貴女は尙更寵愛を得てるに違ひないんだ。娯樂も希望もない此家の二人は、僕等でも力をつけてやらなければ、自滅する外に道がないかも知れないんですからね。何時までも死んだ兒の幽靈に付纏はれて、二人差向ひで氣を腐らせてゐちや果しがないんですから」

「だから貴下は叔父さんの力になつてお上げなさいな。私だつて出来ることなら何でもしますわ」

「此家には物質上の苦勞はないんだから、氣持を變へて、もつと世間の歡樂を求めようにしつたらいゝんだ。僕も一ころは叔父さんのお相手になつて、靈魂の不滅だの天國での復活だの、この頃ある一部の耶蘇信者の間に流行りだした基督の再臨といふやうなことまで研究したものが、不思議なもので、僕よりも叔父さんの方が早くさう云ふ研究にでも興味が無くなつたんですよ」

「でも、叔父さんは今でも時々そんな話をしてお前はどう思ふと聞きなされるんですの。私返答に困ることがありますよ」

「心細いから僕等の云ふことでも手頼りにしたがるんです。貴女を呼寄せる氣になつたのもそのためなのだから。……僕等と一緒になつて快活な話の種をつくれれば此家のためにも幸福なのだ。先日些つと云つたやうに、僕等はこの家の二人を支配する氣にならなければ嘘ですよ。貴女は女の王見たいにしてゐられるのに、家の空氣に感化れて萎けてゐちや、天から授かつたい運を棄てるやうなものです。さう思はないんですか」

「だつて、私どうしていゝんだか分らないんですもの」

「それは僕がおひくに教へて上げますよ」

明は自分の意のままに振舞へる樂みを茫漠と描いてゐた。芝居見物に誘はれてゐることを仙子から聞いて、

「それはいゝことだ、叔父さんも誘はうぢやありませんか。僕が勧めたら、屹度承知するでせうから」と、假りにも叔母がさう云ふ氣になつたのを、この家のためにも自分のためにも喜んだ。そして國許からは人並の學資しか支給されてゐない彼れが、いろく世の贅澤を味ふためには、これまで以上に叔母夫婦に喰入る必要があつたのだが、仙子のやうな若い女が此家にゐて自分との親みを増すのは、老人ばかりの所へ出入りするよりも、どれほど張合ひがあるか知れなかつた。そして、十日ばかりの間に田舎の垢が落ちたのか、仙子の顔も先日よりもぐつと見まざるやうな氣がして、どうしても確實に彼女の心を捉へたくなつた。

「芝居もいゝが、この冬期休暇には、皆なで避寒に行きたいねえ。僕等二人でさう極めて置いて、老人を説附けようぢやありませんか」と、よく知らない東京近所の温かい海岸や温泉場の光景を艶をつけて話した。

が、東京へ来たばかりの仙子には、都會の賑ひこそ珍らしくて、大磯でも熱海でも、都會を離れた海や山へ遊びに行きたいと思はなかつた。

下駄の音で叔母の歸宅が分ると二人は急いで下りて行つた。

「寒くつて、道が悪くつて」と、おとよは勢ひのない顔して家の關を跨いだ、ニコノして玄關に出迎へた若い二人を見ると、自分もニコノした。お墓参りして一人で寂しい家へ歸つて来ると、氣が沈んでいけないのだが、この日はさういふいやな氣持を免れた。

明は日暮れ前まで快く遊んで、芝居見物の打合せをもして暇を告げた。仙子は昨夕から今朝

へかけて陰氣だつた叔母の顔が晴々として来たのを喜んで、夕餐仕度の手傳ひをしながら、叔父の歸りを待つてゐるが、何時も版で摺つたやうに時刻を違へない叔父の靴の音も、今日は容易に聞かれなかつた。

「どうしたんでせう？。何處かへお寄りなすつたんでせうか」と訊ねたが、

「さうねえ」と云つたきり、叔母の答へはハキ／＼しなかつた。そして、戸外が暗くなつて三十分一時間と時が経つにつれて、叔母の顔が曇つて、口を利くのさへ懈さうになるのに氣づく

と、仙子も口を噤んで、身動きをも慎んで、一圖に叔父の歸りを待ち受ける氣になつてゐた。

これまで表立つては夫婦間に何の波瀾も起らなかつた山村の家庭では、主人が無斷で夕餐時を外で過したことでだけでも、容易ならぬ一事件となるのであつた。

妻のおとよの方で、二十年來平和だつた家庭生活もそのために波綻が起りでもするかと危むばかりでなく、夫の英吉の方でも、家の闕を跨ぐまで絶えず心を遣つてゐた。別段何等の悪遊びをしたのではないので、たゞ妻の昨夕の没理解の言草に刺戟されて、かねて厭つてゐた家庭の淋しさが一層烈しく感ぜられたため、平生歩み馴れてゐる歸途を轉じて、賑やかな年末の市街をぶらついた揚句に小瀟洒した洋食屋の華やかな食卓で、一杯の洋酒を傾け、幾皿かの甘い料理を食べ

たゞけなのだが、腐甲斐なくも、それくらゐなことにはさへ、心の咎めを免れることが出来なかつた。そして紅い顔して歸るのに氣を差して、酔の醒めるまで、再び當もなく彼方此方の市街を歩いて、寒い夜風に頬を曝らした。

歸つた時はまだ宵の口だつたが、英吉は、ひつそりしてゐる家の中の様子に耳を留めながら、靜かに戸を開けて入つた。

ハツと驚いて思はず立上りかけたおとよは、思返して腰を据ゑて出迎へもしなかつたが、仙子が俄かに元氣づいて玄關へ驅出たので、英吉に取つては何よりも都合がよかつた。

「お歸んなさいまし」と、さも悦しさに迎へられると、英吉は俄かに頭の中が明るくなつたやうな氣がして、

「途中で昔の友達に會つて、いろんな話をしてゐたものだから」と言譯して、茶の間へ入つた。外套を着たまゝ火鉢の側に胡座を搔いて、晚餐がまだ手を着けられないでゐるのを見ると、

「おれも一杯食べてもいゝよ」と云つて、二人に勸めて自分も箸を執つた。

何時となしにおとよの心も和らいで、某といふ舊友の事や明の事で、平生の通りに座が賑つたが、仙子は茫漠たる厭な氣持と、可笑さとをひそかに感じてゐた。叔母さんもどうかしてる。

叔父もどうかしてる。明さんが軽じてるのも無理はない」などと思ひながら、二人の顔を見比べ
てゐた。

「明さんは芝居へは是非叔父さんをもお連れ申したいと云つてゐましたわ」と、仙子が先へ口
を出すと、

「四人だと席を取るのに都合がいゝと、明が云つてゐたのですがね」と、おとよが調子を合せ
た。

「かういふ時に静夫を誘ふといゝんだが。……明がまだ悪く思つてるのなら、おれ達が間に立
つて仲直りをさせたらいゝと思つてゐたのだから、それには丁度いゝ機會なのだが」

英吉は同行を承知した上に、四人の一人に久しく會はない静夫を選ばうとした。おとよも昨夕
のやうに反対はしないで、英吉自身が両方へ手紙を出して取計らはうとするのを黙視することに
した。

仙子の心は躍つた。

「おれ達は芝居を見ることさへ精神の墮落のやうに思つて若い時代を通つて來たのだ」と、英
吉は感慨を洩らした。

三

翌日英吉は、定つた時刻に、一包みの西洋菓子を持って歸つて來た。昨日の一時の暗い發作は、
何事もなく彼れの心から消えて、日に／＼自分に懐いて來る仙子に、流行の衣服でも着せて喜ば
せることが、差當つての自分相應の害のない樂みのやうに感ぜられて、電車の中でも、派手な
装ひをした若い女に目を留めた。

「一揃ひ春着を拵へてやらうか」と、その夜、最近流行の色合ひや柄柄について、さういふこ
とに目の敏くないおとよと話合つてゐたが、そこへ、明から二通の手紙が來た。仙子は自分宛て
のをザツと讀んで、何喰はぬ顔して封筒に收めたが、英吉は長いのを讀んで行く間に、次第に眉
を蹙めた。

「明もどうしたんだね。静夫のことゝいふと、いやに六ヶ敷くこだはつて來るよ」と苦笑し
た。

「一緒に行くのがいやだといふんでせう。さうでせうとも」と、おとよは豫期してゐた事のや
うに云つて、前に置かれた手紙の一節を拾讀みした。そこには、「假りにも有夫の女を誘惑せんと

明の男を誘惑せんと
おとよの男を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと
おとよの女を誘惑せんと

斯くは女が大事の心で思ふを胸に置くことよ

おもしろいことよ

せし者と席を同じうすることは小生の潔しとせざるところにて候。純潔なる叔父上の御家庭へかゝる青年を出入いたさせること小生は全力を擧げて反對いたし候。ことに只今は仙子どのも寄寓いたし居らるれば、不潔なる精神を有せる彼輩は斷じてお近づけならぬこと最も肝要なりと愚考仕り候……」と、筆に力を籠めて書いてあつた。……亡兒の速夜に、場所柄をも顧みず、おきくといふ女が、靜夫に對して不穩な素振りを見せて、一座の者に苦々しい思ひをさせたことや、明が靜夫の面皮を剥ぐやうな昂奮した口を利いたことなどが、ありくと思ひ出された。「ぢや、芝居見物もお流れだね」と、英吉は好意が藪蛇になつたのを後悔しながら、「今更靜夫を除け物にして、三人だけで見に行く譯には行かないからね」

「靜夫なんかに関はなかつてもいゝぢやありませんか」

「しかし、かうさんくんに貶しつけた手紙を見ると、おれは靜夫が可愛相になつて来るよ明はおれを目の敵にしてるけれど、あの男が實際に悪い行ひがあつたのぢやない。女の方から勝手に誘惑されやうとするやうな美貌を持つて生れたことが、決して靜夫の罪ぢやないのだもの。内々靜夫に迷つてる女は外にもいくらもあるんだらう」

「おきくのやうな女が世間に多いと思つてゐらつしやるんですか」とおとよは汚らしいといは

ぬばかりの顔をして、「こんな話はもう止ませう」

「機會を見て靜夫だけを家へ呼ばうとおれは思つてるおれはあの男を毛嫌ひする氣にはなれな

い」

夫婦は暫く口を噤んで、互ひに靜夫のことを考へてゐたが、やがて、心を新たに、クリスマスや正月を迎へようと互ひに勵まし合つた。生活に不足がなくつて、たゞ愛する者を缺いでゐるために世の寂しさに震へてゐる夫婦の側に待つてゐる仙子は、何方向いても悪い目では見られなかつた。クリスマスでも新年でも、彼女を幸福の光で照らすべく待つてゐるやうであつた。

自分の部屋へ退いてから、仙子は落着いて明の手紙を讀直した。それには靜夫を不徳漢として烈しく責めて、芝居への同行などは以ての外だと書いてあつたが、靜夫を辯護した叔父の言葉が何故だか尤ものやうに思へてゐたので、烈しい手紙の文句なんかによつて、些とも彼女の心は動かされなかつた。むしろSを悪ざまに罵つてゐるのが、明自身の醜い量見を現してゐるやうにさへ思はれた。

あんな男には接するなと、戒めてあつたが、叔父の手紙によつて、彼女の上哀がSに知られてゐるとすると、たとへ芝居行が立消えにならうとも、程なくSに會ふことを、仙子は豫期してゐ

なければならなかつた。

四

クリスマスをも二三日後にひかへた日曜であつた。英吉は信仰が進んだ譯ではなかつたが、この頃新たにつくつた習慣に従つて、午前の禮拜に列すべく、飯倉の教會堂へ出掛けた。髪を綺麗に分けて金縁の目鏡を光らせて、滑つこい顔をした司會者のわざとらしい祈禱や聖書朗讀には意味を感じだした彼れも、讚美歌の合唱やオルガンの音には、何時もながらの親しみを覺えた。天上の神を崇め奉る氣持になるよりも、調子を取つた快音にまつて、彼の萎びた身體にも若い血汐を湧き立たされるのであつた。

鼻の高い頬の削けたKといふ牧師の説教は、處女マリアから耶穌の生れた奇蹟に關したことで、今の世の中ではあまりに不思議過ぎる説であつたが、それを心から信じて教壇に立つてゐるらしい牧師の態度と熱情を含んだ音聲とは、英吉をして一種の敬虔の念を起させないでもなかつた。

奇蹟々々、數千年前にこの地上に現れてゐたやうな奇蹟が、新たに起ることを待焦れるや

うな氣持になつた。

閉會の讚美歌を唄つて、英吉は椅子を離れて出口へ向つてゐたが、すると、「先生」と呼掛ける聲が、ふと後から聞えた。顧みると、意外にも靜夫の姿が其處に見えた。

「君も來てゐたのか。……まあ一緒にしよう、連立つて外へ出ると、靜夫は、先づ長い間の無沙汰を詫びて、先日の懇切な手紙に對して禮を述べた。

「今日は少し感じたことがあつて久振りに教會へまゐつたんですが、偶然先生にお目に掛かつて大變幸福でした」

柔しい目をして懐しさうに口を利いてゐる靜夫を、英吉は最早些少たりとも悪意を有つて見ることは出来なかつた。で、妻の思惑を多少氣にしなながらも、教會からは目と鼻の間の自分の家へ、彼を誘はない譯には行かなかつた。

「お宅のお近所までは二三度行つたことがありました」と云つて、靜夫は子供の死後に移轉した英吉の新宅を、外から見てよく知つてゐるやうな口吻を洩らして、躊躇せずに行つた。途中で二人は重にK牧師の説教について語合つた。これは、英吉が自分の受けた強い感じを、薄れない前に他人に告げたがるからであつたが、靜夫もよくそれに相槌を打つた。

「Kさんの云ふやうな基督の奇蹟は兎に角、我々の目の醒めるやうな奇蹟が起ればいゝと僕は願つてるよ。神の愛の奇蹟だらうが、悪魔の憎みの奇蹟だらうが、何方だつて僕は關はないのだがね」と、英吉は興奮して云つた。

「神様が人間の吃驚するやうな奇蹟を行つて呉れなければ、我々自身に一つ奇蹟を起したいと思ふこともありませんね。……先生なんかは掛替へのないお子さんを奪られて、酷い試練にお會ひになつたのだから、尙更さうお思ひなさるでせうね」

「だけど、僕は心が弱くつてどうもいけない。外部から何か来るのを、當てもなく待つてるだけさ。そこへ行くと、君達は何でもやれさうだから羨ましいよ」

家の前に來ると、英吉は一足先へ中へ入つて、靜夫を連れて來たことを簡単に妻に知らせた。

おとよはわざと馴々しい素振りを見せないやうに努めたが、罪人にでもあるやうに謙だつて別後の挨拶をする靜夫を見ると、酷いことが云へないのみならず、思はず涙が浮んだ。

「お役所へは相變らず勤めてゐるんでせう。……夏時分よりもいくらか痩せたやうだけれど、何處か悪くないんですか」

「別段悪いところもないやうですが、物價騰貴のための營養不良かも知れませんね」と、靜夫

は口軽く云つて微笑した。その口元に云ひがたい愛嬌が見えた。

「あんなことを云つて。貴下は獨身で氣樂ちやありませんか」

おとよは靜夫の蔭に女があるのぢやないかとふと疑はれたが、そんなことを口へ出すのは慎んだ。

「まあ二階へ來たまへ」と、英吉は途中でしたやうな話をもつと續けたくつて、自分の書齋の方へ引立て、行つた。

わざと座を避けてゐた仙子は、縁側に蹲んで冬枯れの庭を見ながら、玄關で一瞥した靜夫の顔を前に浮べておどくしてゐた。書生々々してゐる風采態度は、長い間空想裡に宿つてゐたとは違つてゐるが、立派さはむしろ勝つてゐるやうに思はれた。自分などにあんな卑下した手紙を呉れる人としては、美し過ぎるやうな氣がした。

やがておとよに呼ばれて、仙子はお茶やお菓子を運ぶ役目を言付かつたが、その際、靜夫が叔母の姉婿の甥に當ることや、會計検査院に奉職してゐることや、明より一つ年上の二十八で、まだ獨身で家も持たないでゐることなど聞かされた。

髮形をも整へないで、Sの目の前へ自分を現すのを恐れながら、躊躇する譯には行かないの

で、仙子は努めて冷然たる顔して、持つ物を持つて静かに二階へ上つて行つた。幸ひに二人の間に六ヶ敷い話かはすんでゐたので彼女の方へはあまり目を留められなかつた。

「叔父さんは高い聲を出して。何を話してゐました？」と、階下へ行くと、叔母に訊かれた。

「何ですか。私には分らないやうな六ヶ敷いこと云つて入つしやるんですの」と、答へると、

「議論好きの叔父さん、久振りだと思つて」と、叔母は微笑した。

仙子は、静夫から幾度も手紙を買つてゐる上に、自分の方からも一二度好意を寄せた返事を出してゐることを、叔父夫婦に隠してゐるのが、今日のことには氣遣はれた。若しもあの人の口から叔父に打明けられでもしたならどうしやうとそんなことのある筈はないのを承知しながら、ともすると、それを恐れてゐた。一時の戯れにあんな手紙を呉れたのではないかと疑はれたりした。で、あの人の手紙の上の愛はこれまでの夢として消えてしまつてもいゝから、叔父や叔母やあるひは明などに知られないで済めばいゝと、次第に望みが萎けるやうになつた。

叔母の目につくやうな粉飾をするのは遠慮されたが、仙子は隙を見て、自分の部屋へ入つて、ホンの氣休めだけに亂れてゐる髪を解付けて、しげ／＼と鏡を見詰めた。何となく心強い氣もし

たが、もつと美しく生れて来ればよかつたと、ふと悲しいやうな氣持もした。

改まつて静天に紹介されたのは、皆な揃つて食卓に向つた時であつた。仙子は目を伏せて堅く口を噤んでゐたが、静夫の方で殆ど彼女の存在を認めぬやうに、二三言形式的の話をしかけただけに過ぎないのが、仙子に取つては手頼りなく思はれた。

食事中の話題は、お互ひの近状や歐洲戦争に關したことで、いやな思ひを起させさうなことは話を觸れないやうに、夫婦とも注意して居たが、

「石田君はこの頃もよく遊びに来ますか」と、静夫の方から、ふと明について訊ねた。

「時々来ますよ。相變らず氣儘なことを云つてゐますよ」と、おとよは答へた。

「私は些とも會ひませんが、彼方此方でもり／＼石田君の噂を聞くことがありますよ。……元氣のいゝ人だから、私なんかとは違つて面白いことをやつてるやうですね」

「君だつて明に譲らないだらう。好きなことをして愉快に日を送つてるといふ點では」と、英吉は云つたが、静夫の云ふ面白いことゝは何を差してゐるのやら、よく考へもしなかつた。

「いえ、私は駄目です。職務の方は成るべく興味を有つやうにして眞面目に勤めてゐるからいいんですが、自分の過去の行爲や何かのために役に立たない煩悶に陥つたりしていけないんで

す。……それに私の性質が他人から誤解を受けるやうに出来てゐるためでせうか、自分の方では好意をもつてゐても、先方からは悪意を向けられることが多いので、人に交はるのが次第に厭になりますよ。毎日の職務以外には、世間へ出ないやうに、人に接しないやうにと、自然引込思案になるんでしてね。それはよくないこと、思つてゐるんですが」

「……僕の家へはこれから時々やつて來たまへ」

相手の言葉をそのままに受入れた英吉は、長い間静夫を斥けてゐたのを氣の毒に思ひながら云つた。

「明後日のクリスマスに入つしやいな」と、おとよも言葉を添へた。その祝日に明と和解させて悪い記憶をも拭去らうと、夫婦は同じ思ひを抱いた。

食事の終るまでに、話は一時中止になつた観劇の事に移つた。静夫はこれまでこの家庭ではろくに話したことのなかつた各劇場の模様をつぶさに語つた。

歌右衛門だの梅幸だの重立つた役者の名は、英吉などでも何時となしに聞いて知つてゐるの
で、さういふ役者の容姿や藝風についての静夫の巧な説明には自から心を惹かれて、春になつたら、静夫の案内で、どれか一つ出物の面白さうな所へ出掛ける約束を取極めたりした。

「この休暇には、東京にゐても遊び相手はなし、淋しいから、信州から越後路へかけて、雪見旅行にでも行つて來ようかと思つてゐましたが、それは止したつて構ひません。一人ほつらの旅はさして面白くはないですから」

静夫は興に乗つた芝居話から、ふとまた話を轉じて、沈んだ口調で、自分が彼方此方の親類や知人に何となく疎外されてゐることを訴へた。そして、いやな目付で迎へられるやうな所へ、此方から頭を下けて訪問するには及ばないと思つてゐると、男らしい意地をも見せた。

「東京の正月も下宿屋で一人ほつちでごろ／＼してゐるんぢや詰らないから、旅行でもしようかと思ひ立つたのですが、お宅へ寄せて頂ければ私のためには大變幸福なんです。東京に温かい心で迎へて呉れる家があれば、なにも好んで寒い土地へぶらつきに行く必要はありませんからね。それに私は二年間も九州地方へやられてゐて、田舎にはあき／＼して始終東京を戀しがつてたぐらゐるですから、用事のないのに、田舎へ行つて見ようなんていふ好奇心は更になんてすよ」

「さうでせうとも。……」おとよは静夫の柔和な顔を見ながら、眞心から出たらしい沈んだ言葉聞いてゐると、一圖に同感されて、「お役所がお休みになつたら、私も一度貴下の下宿をお訪

ねしませう。……お仙ちゃんと一緒に」と云つて仙子を顧みた。

今まで除物見たいにされてるた仙子は、ふと我れに返つて、照れ隠しの微笑を浮べた。静夫の下宿の町名番地や宿の名は、仙子はよく覚えてるた。宿の部屋から愛宕の塔の見えることも、部屋の中には古い西洋の風景畫の懸つてゐることも、手紙の文面によつて知つてゐるので、静夫がおとよの問ひに應じて、下宿生活の説明をするのが、ことに面白く聞かれた。「塔のところは鳥なにか、何羽も集つて來ることがある」とか「あんな塔でも秋の夕日を受けた時なんかには非常に奇麗に見えるので、そんな時にはいろ／＼なことが考へられる」とか云つてゐるのが、さながら手紙の文句を、新たに當人の口から聞かされてゐるやうで懐かしかつた。

「近所の古道具屋で油繪を買つて來て懸けてゐるんですが、毎日見ても見飽きのしないやうな古雅ないゝ繪なんです。あれだけは先生に是非見て頂きたいと思つてゐます。どうも日本人の筆ぢやない、西洋の名家の作らしいんですよ」と、仙子が心待ちにしてゐた通り、果して手紙にあつた西洋畫の話が静夫の口から出た。

で、仙子は座に加はつてゐるばかりで、静夫と語合ふ機會はなかつたのだけれど、次第に彼れに對して親しみを覺えた。……静夫が皆なに疎外されてゐるといふことも、却つて彼女をして彼

れに近付き易く思はせるのであつた。

静夫は英吉に隨いて再び二階へ上つて暫く話した後、この日の意外な歡待を夫婦に向つて深く感謝して暇を告げた。

仙子は希望と不安とにこも／＼襲はれて惱まされながら、迷ひを慰めるために、またも例の手紙を取出して、一字一句身を入れて讀んだ。

このまゝ何事もなく済むのは不本意であつたが、と云つて、今にSから直接に此方の心を開かれるとすると、どうしたらいいか。……よく考へて置かなければならない。よく考へなければならぬと、仙子はそのために、つひに一夜の睡眠を妨げられた。

五

今日は以前に勝る御懇情を忝なうして、歸來感謝の涙に咽んでゐるといふ静夫の端書を見た英吉夫婦は、文字通りに文意を解して、一つの善事を行つたやうに喜んだ。

「たとへ静夫の過去の行爲に、明が指摘してゐるやうな不穩當な點があつたにしろ、あれほど柔順にしてゐる者を鞭うつことは出來ないよ」と、英吉は云つて、夫婦相談の上で、來るクリスマス

マスには二人の青年を招いて、彼等の長い間の反目を調停しようとして企てゝゐるが、仙子は、彼等の従來の仲たがひの真相は知らないけれども、彼女自身が二人の心に宿つてゐる上は、叔父と叔母とがいくら力を入れたつて、完全な調停なんか出来るものぢやないと、ひそかに思つてゐた。そして、悪くすると、自分までが早くも争ひの飛沫を受けて、詰らない目に會ひはしないかと危んでゐた。

が、明は招待された日まで待ちかねて、クリスマスマスの前日、慌ただしく訪ねて來た。

「叔母さん。僕があれほど云つてゐたのに、白井を家へ入れたんですね」と茶の間へ入るや否や昂奮して云つた。

「私の方で呼んだのぢやないの。神様のお執成で來たやうなものだから、お前も悪くお思ひでないよ」と、おとよは明に對する言譯にあの日の事を話した。

「そんなに弱くつちや駄目ですね。悪いと知つたら、断然斥けるやうでなくつちや、見すく家庭を蹂躪されることになるんです」

「詰らないこと云ふもんぢやありません」と、おとよは明の度外れの言葉付を不思議がつて叱るやうに云つたが、そこへ英吉が下りて來たので、二人の氣色ばんだ顔も和らいだ。

明も叔父に面と向つては烈しい口が利けなくつて、靜夫との同席をも不承々に承諾したが、平生のやうには打解けなかつた。そして、差迫つた用事のために直にも歸つて行きさうな口吻を洩らしながら、膝を立てたり下したり、モヂくしてゐるが、やがて、

「お仙さんにクリスマスマスの贈り物をしたんですが、そこまで一緒に行つて貰ふ譯に行かないでせうか」と思切つて云つた。

「いゝとも。おれの方でも君達へ贈り物をしたんだけど、それは明日のこととして、君がお仙に祝つて呉れるといふのなら有難いよ」と、英吉は快く答へた。

「些細な物でも同じことなら氣に入つたものを贈りたいと思ひますから」

「さうだとも」

「一寸其處までとすから、衣服もそのまゝでいゝでせう」

明は事が極まると急立てた。仙子は先日やうな話をもつて迫られるのが氣遣はしさに、明との同行を好まなかつたが、皆なして勧めるのを拒む譯には行かないので、身仕度もそこく随いて出た。

埃つほいいやな風が吹いてゐた。明は暫くの間無言で足早く歩いてから、ふと足を緩めて、

「貴女も白井に會つたんでせう」と訊いた。

「え、仙子は興もなげに答へた。

「白井と僕をクリスマスに招待するといふ叔父さんの端書を見て、僕は吃驚したんです。叔父さんなんかは口先で誤魔化されるから駄目さ。僕と貴女とが連合して、あの男を山村家から排斥するやうにでもしなければ、屹度あの家のためによくないことが起るんですよ。それについては、貴女にも誰れにも云へないことで、僕一人が心配してることがあるんですよ」

「さう？。私はなんにも知らないんですから」仙子は再び興もなげに答へた。

「とに角あの家によくないことが起れば、貴女のためにも僕のためにも決して幸福ぢやないんだから」

明は歩きながらでは、深入りした話のしみぐ、出来ないのを低悟しく思つてゐたが、しかし、若い女と並んで歩いて、往來の人の目を惹いてゐるといふ意識は何となく樂しかった。

「僕となら何處へ行つても叔父さんは心配なさりやしませんよ。贈物は銀座の方の店へ行つて買ひませう」

明は、相手の心を確めるためにこの機會を外すまいと、獨りで極めて、停留所に立つて電車を

待つた。が、仙子の方では、風が寒いし、氣乗りがしないので、遠くへ行行くことは頻に斷つた。

「とに角今日は僕の好意を受けて下さい。それにもつと貴下にお話しときたいことがあるんですから」と、明は仙子の肩を押すやうにして電車に乗せた。

仙子は明と前後して釣革にぶら下りながら、十數日前に東京驛から明に連れられて電車で飯倉まで来たことを思出してゐたが、あの時は東京ッ兒らしくキビクしてゐて頼もしく思はれた明も、今日は我殺で煩い人間のやうに思はれた。電車の窓から指差しして東京の市街の説明をされるのも、乗客の前で田舎者扱ひされてゐるやうで今日はいやだつた。

「半襟か頭の道具か買つて上げたいんですがね何がいでせう」と、明は銀座で電車を下りると訊いた。同じことなら女の身に附ける物を買つてやりたかつたし、氣を利かせたつもりであつた。

「私はなんにも入りませんわ」と、仙子は冷淡に云つて、「私風邪を引きさうだから早く歸りたいんですけれど」

「ぢや、温かいものを飲みに行きませう」

明は、寒くさへなければ、日比谷か芝の公園でも散歩して、人目の薄い所で心の中を聞いたり

聞かせたりするのだがと、顔に吹き付ける冷酷な寒い風を咄つた。平生安價な珈琲店へは屢足を入れて居るのだが、女を連れて行つたことは一度もなかつたので、仙子を促して威勢よくある珈琲店の階子段を上りながらも、多少極りの悪い思ひをした。

給仕女の目は眩かつたが、幸ひに客は少かつた。隅の方へ席を選んで腰を卸して、仙子の珍しがりさうな名前の六ヶ敷西洋菓子と紅茶とを命じて、煙草に火を點けて、

「僕は學校はもう休暇になつてゐるんだから、貴女がその氣にさへなれば、叔父さんの許しを得て、何處へでも一緒に遊びに行つていゝんですよ。叔父さんは僕が隨いてゐさへすれば、何時でも貴女の外出を許すんだから、今の中に貴女も出掛けなければ損ですよ。」と、話の口を切つて、相手が黙つてゐるので、「此夏貴女と海岸の家で話してゐた時には、東京へ行つたらあゝしたいとか、斯したいとか、いろ／＼な希望をもつてゐたやうでしたが、東京へ來てから考へが變つたんですかね」と、夏の記憶を呼び起させようとして云つた。あの時の言語態度から推すと、全身を自分の方へ寄せてゐる筈だといふ心持を目に含せて仙子を見た。

「私さう方々を遊んで歩きたいなんて思つてやしませんわ。今日も早く歸らなければいけないと、先つきから思つてゐますの。貴下も今日は御用がおりなさるんでせうから、私にお話なさ

りたいことはこの次の時にして下さいな」と、仙子は聲を潜めたが、豫め相手の話を遮らうとして力づよく云つた。

「だけど、あの家ぢや叔母さんが何時も貴女の側にくつゝいてゐるから、打解けた話がしにくつていけない」

「叔母さんは貴下の叔母さんですもの、御遠慮なさることはないぢやありませんか」

「無論僕は叔母を恐れてやしないけれど……」

明が言淀んでゐるところへ、誂へ物が運ばれたので、話は他へ移つた。仙子は上京後毎日のやうに叔父が買つて來て呉れたため、いろ／＼な西洋菓子をも喰馴れてゐるので、前に置かれた菓子皿のをも、些とも珍しいとは思つてゐなかつた。寒いところを遠方からわざわざこんな物を食べに來るにも及ばないと思つてゐた。

「先日、もつと考へさせて呉れと、貴女は云つてゐましたね。あれから考へたんですか。僕ばかり考へてゐるんぢや張合のない譯ですからね」

明は紅茶を呑み干して、他の客や給仕女から遠ざかつてゐるのに安心して、再び煙草に火を點けてから云つた。

が、仙子は大勢が飲食に来るこんな家で、重大な事を無理強ひに訊かうとする明の無法を厭うて、目を伏せて黙つてゐた。

明は同じことを繰返しても手答へのないのに失望した。そして、先日まで田舎娘として軽く見てゐた仙子に對して、激しい執着が感ぜられだして、このまゝ不得要領で別れを告げて自分の下宿へ歸る氣にはなれなかつた。

「僕は明日のクリスマスに飯倉へ行かないかも知れませんよ」と云ふと、

「何故ですか？」と、仙子は目を上げて、暫く喋んでゐた口をやうやく開いた。

「何故でも、いやだから」

明は自棄に投出すやうに云つたが、すると、ふと、何者を犠牲にしても仙子の心を捉へたいといふ激しい慾念に驅られて、ほんやりした疑惑に過ぎないことを、さも自分の不斷の苦みになつてゐるやうに話した。

「白井の過去の不都合な所行は、貴女も多少察してゐるでせうが、そればかりぢやないんです。

……叔母をさへ誘惑しようと思つてたに違ひないですよ。僕はさう勘付いたけれど、人に云へることぢやないし、ひとりで心配して、過失の起らない前に白井を山村家へ近づけぬやうに警戒

したのです」

「だつて、そんなことが」仙子は顔色を變へて、五體に戦慄を覺えた。

「貴女が容易に信じないのは無理もないが、僕だつて今まで一度も他人に口外したことはありませんよ。……初めて白井の悪埒な態度を察した時には頭の中が煮えかへるやうで、一週間ばかりは夜も眠れず飯の味も分らないくらゐだつたのです。……しかし、過失がなくて事が済んだやうなものだから、それでいゝんだが、以前さういふ態度のあつた奴をこれからだつて家へ入れちやいけないんです」

「……」仙子は目顔で明の言葉に同意した。

「是は絶対の祕密なのだから、貴女もそのつもりでゐて下さい。叔母に對しては云ふまでもなく、誰れに對しても、そんなことを些つとでも氣づいてゐるやうな風をしちやいけませんよ。たゞ白井が續いて彼處へ出入するやうなら、僕達二人が警戒してゐればいゝんですからね。貴女がその氣になつて僕と力を合せてくれさへすれば、僕も心丈夫なのです。さうすれば叔父叔母二人の身の上に不幸が起らないばかりぢやない。僕達お互ひの身にも新たな幸福が得られるんですよ」

「……」仙子は得心したやうに心持首付いた。平穩無事としか思つてゐなかつた叔父の家が恐

ろしくなるとともに、明を頼りにするやうな氣になつた。

「僕は親にも云へないことを云つたんだから。貴女を他人と思つてゐたら云へることぢやないんだから……」

「私無責任に聞いてゐるやしませんわ。これからウツカリしちやゐられないと思つてゐますの」
「折角貴女を誘つて来て、いやな事を聞かせて済みませんでしたね。……だけど眞心を打明け
たつもりなんだから、許して下さいよ」

明は近くの食卓へ新たな客の來たのを見て、話を切つて椅子を離れた。仙子は先つき入つて來た時とはまるで違つた氣持で、明の後へ隨つて珈琲店を出た。辭退するのを強ひられたので、それなら日記帳でもと、金目のかゝらぬ物を選んで、通りすがりの書店で買つて貰つた。

「これを頂いたから、來年の元日から日記をつけることにしますわ。」

「その日記帳をつけてしまふまでには、貴女の身の上にどんなことが起るだらう」

六

仙子は家へ入ると、叔父夫婦が茶の間に差向ひでゐるのを見た。

「明に何を買つて貰ひました？」と、おとよに訊かれたので、日記帳を出して見せると、

「何だ、こんなものを」と、英吉は笑つた。

夫婦は先つきから相談してゐた明日の祝宴の準備や若い者達への贈り物についての話をつゞけたが、仙子は叔父が自分や二人の青年を平等に可愛がつてゐるのを、何となく痛ましく感じてゐた。

「今日は叔父さんがお前に話したいことがあるんだから、二階へ來てお呉れ」と、英吉は贈り物の事が極つてから、改まつて仙子に向つて云つた。

仙子は今日は誰れからも話を仕向けられないで、自分の部屋に獨りである、明の云つたことについてよく考へたかつたのだが、叔父の事ありけな招きを拒まれもしないので、後から二階へ上つて行つた。

英吉はニコ／＼しながら手づから客蒲團を持つて來て、火鉢を挟んで仙子を坐らせた。

「明日はクリスマスのお祝ひで皆なを呼ばうと思つてるから、この機會に一應お前に話したいと思つてるんだがね」と云つて、仙子の不安らしい顔付を見ると、「叔父さんは決してお前の爲めにならんやうなことを云やあしないよ。お前を東京へ呼ぶ前から考へてゐるので、お前に會

ふと直ぐ話す筈だつたのを今まで延ばし／＼してゐたのだ。なに、急に云はなくちやならんことでもないが、明日はお目出度日だから、かういふ時に云つといた方がいゝだらうと、先つきお前達が出て行つた後で思ひついたので」

英吉はかう前置きをして言葉を切つたが、仙子は略話の要點を察して、一層不安を増した。先つき銀座の珈琲店で恐ろし事を聞かされてから、俄に明に心を傾けるやうになつてゐるものゝ、今直に結婚の諾否を聞かれるのは厭だつた。最後の確な返事は延ばすにしても、叔父にさういふ意志があることを明瞭に知るだけでも、彼女は重苦しい氣持がした。

「實はお前の縁談なのだ」と、英吉は二三度悠然と煙草の煙を吹き出してから、相手の可憐な驚きを豫想しながら云つた。「お前も夫とすべき人を極めていゝ頃だ。かういふ男の所へ行きたいといふ心當てがあるのなら、遠慮しないでおれに打明けて貰ひたいのだが、……お前が心を許してる男はないのかい。自分の夫を自分で選んでゐたつて、叔父さんは決して非難しやしないよ。……無いとかが有るとか正直に云つて御覽な」

英吉は愛してゐる若い姪に向つてこんな話を仕向けることに一種の快感を覚えてゐたが、訊かれる方では迷惑だつた。

「この人と指せるやうな男はなくなつても、お前くらゐな年齢になれば、いろ／＼な理想は持つてる筈だが、どんな氣質でどんな職業を有つてる男をお前は望んでゐるのだい。……學者が好きなのかい。實業家の方がいゝのかい。」

仙子は叔父さんも詰らないことを訊くと、軽んじるやうな氣になるともに元氣づいて、「私、まだ結婚のことなんか考へてやしませんの。だから、叔父さんがかういふいゝ縁があるがどうだと仰有つたつて、結婚する氣になれさうぢやありませんわ」

「それはお前の方で氣が進まないものを強ひはしないがね。たゞおれ達の望みは云つとききたいのだ。實は明をお前の夫と極めたら、丁度持つて來いの縁ぢやないかと、おれも叔母さんもさう思つてゐるんだが、お前はどう思ふ。明ぢや不満足かい。あの男も來年は學校を出るし、相當に學才があるやうだから、お前の夫として決して耻しくはないと、おれ達は思つてるよ。故郷のお父さんだつて二つ返事で承知するに違ひない」

英吉はかう云つて、平生親しくしてゐる明に對して仙子がどんな感じを抱いてゐるかを知らうといふ好奇心を以て、ちつと仙子の顔を見た。

仙子は豫期してゐたことゝて、顔や様子には何等の動搖をも現さなかつたが、相應しい返答を

思ひつかないので黙つてゐた。

「明の方では異論はない筈なのだ」と、英吉は更に話を一歩進めたつもりで、「……お前は明に思はれてゐると、おれの目でちゃんと睨んでゐるのだが、あゝいふ青年に思はれてゐると知つたら、お前はどんな氣持がする？。若い女として悦しくない筈はないと思ふが。……思ひ思はれるといふ若い時分の幸福をおれ達は知らずに通つて來たが、お前は今それを経験しようとしてゐるのだから羨ましいよ。どうせ結婚は明が卒業してからのことだが、それまでの間、心を許し合つた同士で、いくらでも世の中を樂むことが出来るのだ。おれなどは機械的に結婚して直ぐに家庭に捕はれてしまつたのだが、お前は戀の苦痛を知らないで樂みだけを享けることが出来るのだ」

獨り合點で自分の言葉を樂しんでゐる英吉の話し振りが仙子には可笑くなつた。

「これは叔父さんの今のお話とは別のことですけれど、苦痛のまじらない樂みが世の中にあるのでせうか」

「さうさ」英吉は些つと考へて、「お前もなか／＼理窟を云ふね」と云つて、持前の教師じみた哲學の講釋をはじめた。話が肝心の要點を外れて英語をも用ひて西洋の哲學者の幸福説などを持

出したりして得意になつてゐると、仙子にも人のいゝ叔父の腹の中が見透かされるやうな氣がした。

「私ね。結婚なんかしないで、何時までも叔父さんの側にゐたいやうな氣がしますの。叔父さんは寂しさうだから」と云ふと、

「それだからお前を呼んだのだが、若いお前に何時までも老人の話相手ばかりさせとく氣はないのさ。そんな残酷なことはしないよ」と云つて、ふと聲を潜めて「おれのこととはとに角、お前は今に叔母さんに對して居づらひ思ひをしないと限らないが、さうなつてまた故郷へ歸りたいやうな氣を起されちや、折角東京へ呼んだ甲斐がないから、それで先つきのやうな話を早く取極めたいと思つてるのだ」

「叔父さんも詰らない取越し苦勞してゐらつしやるんですのね。私この家で居づらひ思ひなんかする氣遣ひはないだらうと思つてゐますけれど、たとひどんなことがあつても、叔父さんが出て行くと仰有らない限りは、私の方から勝手に出て行つたりなんかいたしませんよ」

「よく云つて呉れた」英吉は満心の喜びを面に漂はせながら、「叔母さんもおれに劣らないくらゐにお前や明を可愛がつてるのだが、市太に死なれてからは心が寂しいもんだから、どうかする

と憂鬱になつて常識に外れたことを云つたりして困るのだ。さういふ場合があつてもお前は氣に掛けないやうにして呉れ」

「えゝ。……仙子は明の云つてゐたやうな厭なことに、叔父が些しも氣づいてゐないのを不思議に思つてゐるが、そこへ、おとよが上つて來る足音がしたので、二人とも口を噤んだ。

おとよは先つきからの話聲がバツタリ止んだのを變に思ひながら、二人の顔を見比べて、

「私もお仲間に入れて下さい。何だか面白さうなお話をしていらしたぢやありませんか」と、火鉢の一角に座を占めた。

「なに、明のことを云つてゐるのだ。お前も勸めて見るといゝ」と、英吉は何氣なく云つたが、おとよは、

「もうお仙ちゃんに何もかも仰有つたんですか」と、不平らしく云つた。

「いゝぢやないか。どうせ早晚云はなくぢやならんことなんだから」

「だつて、さういふことは私から口を開けるべきことです。貴下はお仙ちゃんを御自分一人の所有のやうに思つてゐらつしやるんですのね。……お仙ちゃんはさうであつても貴下一人の所有であつても、明は私の甥ですよ。」

「それがどうしたと云ふのだい」と、英吉は相手が下らなく纏れて來るのに當惑した。

「明の方の量見をちやんと極めてからでなければいけませんよ。お仙ちゃんさへ得心させれば、明は直ぐに同意すると思つてゐらつしやるのなら、あんまり明を見くびり過ぎたことになるぢやありませんか」

平生明がこの縁に不同意をとへる筈はないと云つてゐた癖に、おとよはこと更改まつてかう云つた。

「さう六ヶ敷云はなくつてもいゝぢやないか。無論明の意向も聞いてから、正式の話は始めるつもりだが」と云つて、英吉は仙子の前でこんな下らないことを言争つて、この良縁について彼女の氣を悪くさせるのを憚つて、「兎に角今日はこの話はこれで打切ることにしようよ」と云つた。そして仙子に向つて、「お前は今返事をしなくつてもいゝから、よく考へてお置き」

「えゝ」仙子は窮屈な話から免れたのを喜んで、「私、叔父さんに何を云はれても、大事な事は一應叔母さんに御相談しなければお答へしないつもりでゐますの」と、夫婦の間を取做す氣で快活に云つた。

その無邪氣らしい顔付と、その懐つこい言葉とは、果して夫婦の氣まづい思ひを和らけた。今

まで喰しかつたおとよの目にも微笑が浮んだ。

「私だつてお仙ちゃんのためにいゝやうにと考へてる點では、叔父さんに劣りやしませんよ。……お仙ちゃんに明に、それにこれからは静夫も来るし、私の家も賑かになつてよ御座んすわ」と、子供のやうに喜んだ。

で、夫婦は明日の祝宴を子供のやうに楽しんで待つてゐた。夜が明けると、風も鎮まつて、日も麗かに照つた。英吉は庭掃除に取掛り、おとよや仙子は丹念に家の中を拭磨かうとしてゐたが、そこへ、明から「無據用事有之參上いたしかねる」といふ端書が來たので、夫婦とも俄かに張合ひが抜けて萎れてしまつた。

「何故でせう？。昨日何だか云つてたけれど、まさか來ないことはないと思つてゐましたのに」

「矢張り静夫を嫌つてるのかね」

夫婦は明が來なければ、折角の催しも無意味になるのを悲しんでゐたが、やがて、是が非でも呼寄ることに話を極めた。電報を打たうか速達郵便を出さうかなど、夫婦で評議してゐたが、ふと思ひついた英吉は、

「お仙に迎へに行つて貰はうぢやないか。電報なんかぢや不安心だから」と、勢ひよく云つた。

「さうすれば何よりだ」と、おとよも同意して、「御苦勞だけど、お仙ちゃん、明を迎へに行つて下さいな。下宿屋を一度見て來るのも話の種になりますよ」

仙子は躊躇したが、つまりは承諾して、宿俵で出掛けることとなつた。向ふが下宿屋だからといふので、目立たないやうにと、殆ど不斷のまゝで、買立てのシヨールを纏うて、夫婦に見送られて家を出た。

役目以外のいろ／＼な事を想像しながら仙子は俵の上で、胸を轟かせてゐた。飯倉から森川町迄は途中が長くつて、何處まで曳かれて行くのか知らんと氣遣はれるほどだつた。をり／＼俵の窓から未知の街を覗いて、人家の密接した賑かな市街が際限もなく續くの驚いたりしてゐたが、俵が下宿屋の前に留まると、やうやく安心の息を吐いた。

俵夫に在否を訊いて貰つたが、幸ひに明は宿にゐた。物珍らしさうに視線を向けてゐた幾人かの下女の中の一人に案内されて長い廊下を通つて行くと、明は部屋の障子を開けて待つてゐた。

「貴女が迎へに來るとは意外でしたよ。……だけど今日は行かないことにしませう」と、明は

坐るや否や、仙子が何も云はない先に來意を察して云つた。

「だけど、貴下が一緒にやつて下さらなければ私わざ／＼來た甲斐がありませんわ。それ一つの用事で來たんですもの」

「そんな用事はどうでもいい、ぢやありませんか。まあ緩くり遊んで入つしやい。クリスマスは僕の部屋でも祝はれますよ」

七

明は、歸りには飯倉まで送り届けると云つて、仙子に關はずに獨斷で下女に命じて俵夫を返した。

仙子は虜になつたやうな氣持で落着かないながらも、この下宿屋の一室を物珍らしげに見てゐた。かねて空想に描いてゐた靜夫の部屋よりは質素で、叔父の家の彼女の部屋よりも餘程粗末なのが意外であつたが、亂雑な遣つ放しな學生生活の一面がそこに見えてゐるやうで一種の親しみを覺えた。

「貴女が訪ねて來ることが前から分つてゐれば、もつと綺麗にしとくのだつたのに」と云つ

て、明は散らかつた物を片付けなどした。

「眞正に今日は飯倉へ入つしやらないんですか。それが極らなければ私かうしてはゐられませんわ。叔父さんを怒らせちや貴下のためにもよくないと思はれますよ」

「それは行つてもいいですよ。だけど、叔父さんの催しに招かれて行くといふよりも、僕と貴女の晩餐會として行くつもりなんです」

「どちらでもいいわ。行つて下さりさへすれば」

「貴女は何とも思つてゐないやうだけれど、僕は今日の會へ出るには餘程の覺悟が入るんですよ。……白井に對して勝利者として行かなくちや」と、明は自分一人の胸に潜めてゐることを、今は心を許し合つてゐると自ら信じてゐる仙子にうかと洩らした。

が、勝利者といふ言葉は仙子の耳には變に聞えた。まさか白井と自分との手紙の上の交はりを知つてゐるやすまいのにと疑はれた。

「彼奴叔父さんの人のいゝのにつけ込んで、旨い事をしようと思つて企らんでゐるのを、この夏僕が退治してやつたんだが、これからまた元のやうに彼處へ出入りするとなると油斷出來やしない。僕は飽まで勝利者として壓服するつもりだが、今度は貴女が味方になつてゐるから心強いんです。……」

「實は僕が貴女と懇意にしてることや、叔母や叔父が貴女と僕とを縁組みさせようとしてることを、白井は確に知つてゐるんですからね」

「貴下は静夫さんとそんなに懇意にしていらつしやつたんですの」

「彼奴の性質の分るまではよく往來してゐたんです。だけど、いけないことが分つてからは絶対に交際を絶つたのです。卑劣で詭譎上手で陰險なんだから」

かう一圖に罵りながらも、胸に浮んで來る二人の間に起つた事實について語るのは躊躇した。女に對しては尙更だが、男に對しても、静夫が不思議に相手を魅する力を何處かに持つてゐるのを、いろ／＼な事實によつて己むを得ず認めねばならぬやうに、なつてゐるので、明は静夫が現れる所に、自分以上の力を持つてゐる人間の現れを感じてゐるのだつた。静夫が同じ舞臺へ出て來ると、明自身が知らぬ間に氣壓れて、自分の幸福を横取りされるやうだつたので、表から裏から逆らひ／＼して來たのだが、今なほ相手に對して自分の強い力を持つ氣になつてゐなかつた。で、静夫が飯倉へ來るとなると、叔父でも叔母でも、あるひは女珍らしくない静夫にはさして興を惹かないらしい仙子までも、間もなく彼に魅せられて、目下は寵を恣にしてゐる明自身の方が疎外されさうに思ひ過ごされてゐた。

直接には静夫について何も知らない仙子は、明の漠然たる悪口をもそのまゝ受け入れる外はなかつたが、明は素直に聞いて居られるのに安心した。そして、話を轉じて、この冬季休暇を仙子と一緒に遊ぶ方法を話合つた。飯倉の家の中では氣づまりだから、叔父や叔母の耳目を離れた所で、二人だけで自由に遊ぶことを頻に望んだ。

「だけど、私珈琲店はもう御免蒙りますよ。一度で懲り／＼しました」

「先日は己むを得ずあんな所へ行つただけけれど。……」明はさう云つたが、あの珈琲店が二人の記念になるやうに思つてゐた。

「東京にも周圍の人に氣兼ねしないで遊べる所があるんでせうか。何處へ行つても人ばかりゐるぢやありませんか。……此處にゐても大勢の人が泊つてゐるんだから、浮かり大きな聲は出せないやうに思はれてよ」

仙子は誰れかに見られてゐるやしないかと、ふと廊下の方へ目を向けた。

彼處へ連れて行かう、彼處へ寒内しよう、明が興に乗つて云ふのを聞いてゐた仙子は、

「一度期に彼方からも此方からもいろ／＼なことを云はれて、私何だか夢を見てゐるやうですの。もつと東京に馴れるまで、いゝことも悪い事も聞かされないうで、ボンヤリしてゐたかつたの」

ですけど」と答へた。

「なに、お互ひにボンヤリしてゐるぢや駄目だ。叔父さんにも望みを屬されてゐるんだから。」と云つて、明は、仙子に叔母の傍にゐて無意味に日を暮すよりも、年が變つたら、習ひたい事を習ひに行くやうにと勧めた。自分の妻としてもつと新しい教育を受けさせたいとひそかに望んでゐた。

佛蘭西語をやれとか西洋音樂の何かをやれとか、明がいゝ氣になつて勧めて、ピアノぐらゐる叔父は買つて呉れるから、さうして熱心に稽古したなら、習ふ當人のために楽しみになるばかりではない、あの家の空氣を賑かにして、叔父達のいゝ慰めにもなると云つて唆かしたりしたが、ピアノの音なんか一度も聞いたことのない仙子の心は動かされなかつた。有合せの佛蘭西語の書物を見せられて、その文字の讀み方を聞かされたりしても、さういふ物を習ひたい氣にはなれなかつた。で、いゝ加減な受答へをしながら、却て自分の無學を指摘されてゐるやうないやな氣持を起してゐた。

あまり遅くなつてはと、仙子が心配して急立てるので、明もやうやく出仕度して座を立つたが、久振りに靜夫に會ふことを思ふと氣遅れがしてならなかつた。そして、戸外へ出てからも、

靜夫がどんな顔してゐたかとか、どんな話をしてゐたかとか屢々訊ねた。仙子は相手の満足するやうなハツキリした返事をしなかつたが、訊ねられるたびに、自から靜夫の目鼻立や聲音が一層鮮明に心に浮ぶのであつた。そして、現在耳許に響いてゐる明の聲が、頭の頂邊から出て來るやうなのに不快を感じた。

二人が飯倉の家に着いた時には靜夫は既に來てゐて、二階で英吉の話相手になつてゐた。明は二階へ行くのを躊躇して、茶の間で愚圖々々して、叔母に小言を云はれたり言譯をしたりしてゐたが、やがて叔母に急立てられて、不承々に階子段を上つて行つた。襖を開けるまでに、一心に平氣を装はうとしたが、先つきから信仰談なんかをしてゐた二人の目が、襖の音によつて一度に明の顔に注げると、明の平氣らしい態度は直ぐに崩れた。わざとらしい笑ひを浮べて、「ヤア」と附元氣で聲をつけて、火鉢の側へ寄つて坐るや否や煙草に火を點けた。

「暫くでしたね。森川町の先の下宿にゐるんですか」と、靜夫の勿體ぶつた言葉が明の耳には押捺されてゐるやうに聞えたので、「えゝ」と空々しい返事をした。

「今日は君達二人を握手させるために招待したのだから、僕に免じてこれまでの誤解を解いて、元のやうな親密な交際を復活させることにして呉れたまへ」と云つて、英吉は明に向つて、

「静夫君は君に對して些しも悪意を有つてゐないと云つてゐるんだから、君もいやな事は忘れてしまつたらいいぢやないか」

「ええ。……僕も深く根に持つてゐた譯ぢやありませんから」

明は已むを得ずかう答へたが、叔父が兩方の過去の所行を五分五分に見て事もなげに云ふのが不平だつた。

「僕は先生に對して相濟まんことをしたと、あの後絶えず後悔して居たんですよ。だから今日招んで頂いたことはどれほど悅しいか知れないんです。」と云つて、静夫は明の方へ、ひと懐つこい目を向けて「君一人が絶えず先生のお宅へ上つてゐる事を思つちや、始終羨ましくつてならなかつたんです。僕は君達とは違つて、同僚の俗吏以外には友人らしい友人さへないんだから。」

「さうでもあるまい」

明は、表面だけでも相手が自分が對して何等の含むところもなささうなのに、身體や心の窮屈さがいくらか寛いだ。

「僕は階下へ行つて御馳走の指圖でもして來るから、二人で話してゐたまへ」と、英吉は二人に自由な話をさせて打解けさせる爲に氣を利かせたつもりで座を外した。

英吉がゐなくなると、明は静夫に對して眩い思ひをしたが、静夫は膝を崩して、

「この頃先生の姪が來てるんだね」と、何喰はぬ顔して云つた。

「あゝ……」と、明は他所々しく答へて、仙子に關する話は今は避けようとした。

「僕は君から聞いたことはあつたが、顔を見るのは今度がはじめてなのだ。ちよつと綺麗な女だね」

「さうでもないさ」と、明は軽くあしらつて微笑して、「僕は不思議でならない。こんな風に叔父さんの書齋で君に會ふことにならうとは夢にも思はなかつた」

「しかし、先生のお家で別れて、また此家で會ふのは當然なんだね。……僕の君から受けた打撃はひどかつたよ。半歳の間随分いやな思ひをして暮したよ。そして、何故君があんなに昂奮して僕を破廉恥漢扱ひしたかをいろ／＼と考へて見たんだがね。つまり思ひ當らずじまひなのさ」

「……僕は自分の良心に疾いことをしたとは思つてゐるやしない」

「……僕は君に對してそれだけ云つとけば氣が濟むやうなものだから、この上いやな言合ひはしないで、先生の希望に柔順に従つて此處で握手しようぢやないか」

静夫がさう云つて手を出すと、明は頑なに拒めなかつて、握手されるにまかせたが、相手の生

つ白いニヤけた顔がいやに目障りになつた。この夏満身の力を揮つて、その悪魔じみた心魂を碎いたつもりなのに、相手は何の傷も受けないで、却つて以前にも増した魔力を以つて、此方へ迫つてゐるように思はれた。

「年内に一度やつて来たまへ。僕の方からお伺ひしてもいいが」と、静夫は飽くまで懐っこさうに云つて、「僕の近所に甘い物を喰はせるところがあるから、君を案内するよ。ちよつと××軒見たいな氣の置かない家なんだ。……さう云へば××軒のお玉はどうしたらう？、君は消息を知つてゐるだらう。」

「いや知らない。××軒へも暫く行かないんだ」

明はあの頃その安料理屋へ二人でよく遊びに行つてゐたことを思ひ出して、堅苦しくしてゐた顔をも少々和らげた。暫く忘れてゐた懇意だつたお玉の顔をも目に浮べた。

「君が知らないと云ふのは可笑いね。あんなに君に馴染んで居たのに。……實は今話した僕の近所の洋食屋にこの頃お玉そつくりの女が居るんだよ。最初横顔を見た時にはハツと思つて、ウツカリ名を呼ぼうとしたくらゐなんだ。行つたんに君に見せたい〜と思つてゐるんだ」

「何といふ家だい」

「名前は僕が案内するまで秘密にして置かうよ。……僕は夏以來、その家へもAの家へもHの家へも行きにくくなつてからは、下宿で退屈するとよく其處へ出掛けてゐたのだ。お互ひのやうな獨身者が、親しく出入りの出来る家が一軒もなくつて、獨りで退屈してゐちや碌な事を考へやしないからね。君のやうに學生生活をしてゐる者はそれでもいいが、僕なんかは朝から晩まで乾燥無味な仕事ばかり續けてゐるんだから溜りやしない。……君はまだ僕のやうな退屈な思ひを経験してゐるやまい。しかもそれが半歳も續いてゐたんだよ。僕に取つては半歳の退屈は随分長い刑罰だつたよ。その間には教會堂へも行つたり芝居なんかも見に行つたりしたが、そんなことだけぢや物足りないからね」

さう云はれると、明も多少同情の念を起した。濟まないことをしたといふ氣もした。

「だけど、君は面白いローマンスをつくる人間だからね。手を束ねて退屈ばかりしてゐるさうぢやないよ」

「僕がさう見えるかい」

明は静夫の晴々した顔を見ながら、「退屈してゐるのは此家の叔父のことだよ」

「先生を救ふのが僕等のこれからの役目さ」と、静夫は自ら任じてゐるやうに力づくよく云つた。

で、何方が折れて出るともなく、表面だけでも互ひに打解けた口を利き合ふやうになつた。長く住んでゐた以前の家よりもこの新宅の方が遙かに勝つてゐて、新しい綺麗な家財調度の殖えたことを、主人の生活向きの豊かになつた證據として語合つたり、學校通ひ役所通ひの感想を聞いたり聞かせたりしてゐると、親かつた頃の氣分が再び二人の胸に湧いて、取留めのない話にも興を覺えるやうになつた。殊に明は會はぬ前にはいきり立つてゐたに、話してゐる間に相手に對する敬意を次第に失ふやうになつた。

が、そこへ、晚餐の仕度の出來たことを知らせに仙子が上つて來て、襖の間からちよつと顔を見せると、明は靜夫に對する一時の無邪氣な親みを直ぐに濁して、自分を蹴落さうとする優勝者に對してゐるやうな氣がした。

「ぢや、行かうか」と、靜夫が先きに立つて階下へ下りた。

衣食などすべて質素を守つて來たこの家の饗應としては、前例のない贅澤が食卓の上に現されて、珍らしくも舶來の葡萄酒の罎が置かれたりしたので、二人の青年は喜びもし驚きもした。

おとよも仙子も給仕役をかねて席に連なつた、二人の青年の顔に酔ひが出るにつれて、話も賑つて、仙子までも窮屈な思ひが融けた。仙子は唯一人話の仲間に加はらないで、たまに誰れか

ら言葉を掛けられない限りは口を噤んでゐたが、そのために一座の様子が誰れよりも一番よく彼女の目に映つてゐた。一人々々の話し振りがよく耳に留つた。

皆なの心を惹くやうな話に富んでゐるのは靜夫であつて、職務上二年間も住んでゐた九州山陽地方の景色や風俗などが言葉巧に語られたが、ことに一座を面白がらせたのは、食後に唄つた得意の博多節であつた。

「君、さういふ唄を覺えるまでには、いろんな變つた挿話があるんだらう。それを話して見たまへ」と、明が云ふと、

「僕のはホンの聞覚えだから、三味線には合はんさうだよ。東京へ歸つてからは、今日はじめて唄つたのだが、神聖な席を汚したやうで恐縮する」と、靜夫は含羞んだ顔して云つて、英吉に向つても詫びた。

「なに、君達に遠慮されちや、折角招待した甲斐がないんだ」

英吉は二人のコップに手づから酒を注いだ。そしておとよに命じて若い者三人への贈物の包みを持つて來させた。靜夫と明とへは同じやうに、萬年筆と銀側時計とが贈られたのであつた。

「クリスマススの贈物としては少し變だが、記念として末永く持つてゐて貰ひたいと思つて」

と、英吉は二人の感謝を受けて、與ふる者の幸福を感じながら云つた。

すると、静夫はふと思ひ出したやうに座を立つて、茶の間の隅に置いてあつた風呂敷包を取つて来て、この中の包物をおとよの前へ差出して、

「叔母さん。これは私のお祝ひの眞似事ですけど受けて下さいませんか。お仙さんへの贈り物も入つてゐますから、貴方からお渡しなすつて下さい。極く詰らないお耻かしいものなんだから、私が歸つた後で開けて見て頂きたいんです」

「どうも有難う。……お仙ちゃんは今方々から贈物して貰つていゝことをしますね」

おとよにさう云はれると、仙子は一言お禮を云つたが、包物の中味が氣遣はれてドギマギした。明の目がこの包物の方へ向つて異様に光つてゐるのに、仙子だけは竊に氣づいた。

芳醇な酒の香や煙草の煙の漂つてゐる温かい部屋の中で、二人の青年は互に若い夢を描いてゐたが、一二杯の酒で顔を眞赤にしてゐる英吉さへも、老いるまで知らなかつた歡樂の影を知らず知らず眼前にちらつかせてゐた。そして、仙子の豊かな艶やかな頬や紅い唇が平生よりも一層美しく生々と彼れの目にも映つた。

食卓が取片付けられてお茶が入替へられてから、話は更に賑つたが、はじめの中は男達の話に

聞惚れてのみゐたおとよが、次第に昂奮して誰よりも一番餘計に口を利くやうになつた。主客三人の男子が、自分々々の思ひに沈み勝ちになりだしてから、おとよ一人は調子に乗つていろいろなことを喋舌つて話の種を持出した。

「静夫さんも何時までも獨身ではゐられまいから、私がある中いゝお嫁さんを捜して上げませうよ」と云つて、英吉の方では今の場合静夫に對してこんな話をするのは當り障りがあるやうな氣がして成べく避けようとしてゐるのにも構はず、おとよは獨り合點でくどく云つた。

「まさか貴下のお嫁さんが極つてゐるんぢやありませんまいね。若しも祕密でちやんと極つてゐるのなら、此處で正直に發表おしなさいな。今夜のやうな私達のためのいゝ記念の集會の席で、さういふお目出度い話が出たなら、皆なして貴下のために祝盃を上げますよ」

「ところが、生憎さういふ結構な話を持合せてゐないんですからね。祝盃はもつと先きへ延して頂きませう」と、静夫は氣乗りのしない返事をした。

「本當にさうなら、私が一心になつていゝのを見つけて上げますよ。私を信用して任せますか」

「えゝ」

「貴下は明とは違ふから、初心い女ぢや駄目ですわね」

「明君と僕とがそんなに違つてゐるやうに見えますかね」

「同なじことだよ。どんな女がいゝかといふ理想を云つたら、誰れしも同なじだらうよ。おれの考へだつてこの二人と同じいんだ」と、英吉は微醉機嫌でまぜつ返しを云つた。

「どう同じいんです？。私にもよく分るやうに仰有つて下さい」と、おとよはいやに気色ばんだ。

「さうさ。おれに理想の婦人を云へとなら、聖母マリアだ。基督の再臨の奇蹟も待設けてゐるが、おれはそれ以上にマリアのやうな尊い美しい女性がおれ達の目の前に再び現はれることを望んでゐる。……おれはさういふ奇蹟のために祝盃を上げたいよ」

「貴下は随分不謹慎なことを仰有る。」

「いやおれは眞面目だ。マリアを崇拜するのが不謹慎の證據にはならないぢやないか」

「いゝえ。貴下のお腹の中が私には略々察せられるんですもの。明なんかお酒の勢ひで面白さうに話すことに、貴下は歳甲斐もなく一緒に面白さうに調子を合はせてゐらつしやるぢやありませんか。いくら澄ました顔してゐらつしても、以前の貴下とこの頃の貴下の心持の違つて来たことくらゐ、私にもちやんと分つてゐるんですからね」

「ちや、以前のやうに笑話一つしないで陰気に暮すのがいゝのかい。さういへば今夜のやうな催しも、お前には氣に入らない譯なんだね」

「貴下は言抜けがお上手だから。……私がとういふ意味で云つてゐるか、貴下はよく知つてらつしやるくせに」

「……それはまあいゝとして置かう。おれとお前との話は何時でも出来るんだから、お客様の前でどく言合ふにも及ぶまいよ」

おとよも一先づ口を噤んだが座は白けて、折角の盛宴も皆なの頭に不快な思ひを與へて終りを告げさうになつた。仙子は夫婦の煮え切らない言合ひを一二度聞かされてゐるので不思議とも感じなかつたが、近來の山村家の様子をまるで知らなかつた静夫には、先生夫婦の口吻が、世間の痴話喧嘩じみてゐるのが、奇怪でもあり、滑稽のやうでもあつた。

「先日先生が云つてゐたやうな奇蹟が此處に起りか、つてゐるんだな」静夫はひそかにさう思つた。そして自ら乗すべき機会を得たやうな氣になつて、心の中で微笑した。

静夫が先に暇を告げ、明は茶の間へ移つてなほ暫く時を過してから歸つて行つたが、二人が

なくなると、英吉は、先つきから氣にしてゐた静夫の贈物を自分の目の前で開かせようとした。

「此方がお仙ちやんの」と、最早機嫌の直つてゐるおとよは、物珍らしげに包物を開けて、その中の一つを仙子へ遣つて、自分のは皆なの目の前に曝した。……叔母様へと上書した箱の中からは、古色を帯びた小さな木彫の大黒天が現れて、皆なを笑はせた。

「こりや面白い。クリスマスの贈り物としては奇抜だ」と、英吉は由緒ある彫刻を鑑賞しようとするやうに、手に取つて、と見かう見しながら、福々した顔付や、小槌や米俵の形などを勿體ぶつて褒立て、

「お前のは辨天様か」と、やがて、仙子の箱の方へ手を出した。すると、今まで大黒天を珍らしげに見入つてゐた仙子は、われ知らず慌て、自分の箱を自分の膝の蔭へ引込めた。

「いゝぢやないか、出して御覽」と、英吉は頻りに促した。

「私の方には、そんないゝ物は入つてやしませんよ」

「何を云つてゐるんだな。……まさか他人に見せられんやうな物を静夫がお前に呉れやしまし

し」
英吉は笑ひくさう云つて、膝を進めて無理に仙子の箱を引寄せて無雑作に蓋を取つた。仙子

は叔父や叔母にその中を見られたら、今夜直ぐにも此家を飛出さなければならぬことが起りさうな氣がして、胸を轟かせながら目を外らしてゐたが、

「ホウ、こりや恵比須様だ。當てが外れた」と云ふ英吉の聲に、やうやく安心して箱の方へ目を向けると、其處には小さな新しい木彫の恵比須様の外には、紙片一つ入つてゐなかつた。開けられても、何の祕密も潜んでゐないのはいゝが、しかし、當ての外れたやうな物足らない氣持がしないでもなかつた。

「静夫のことだから、こんな異つた物を私達に呉れたのは、何か寓意があるのかも知れませんが」と、おとよは、二つを並べて見比べながら云つた。

「さうかも知れないが、六ヶ敷寓意なんかはおれには分らない」

三人はめいゝに智慧を絞つて、寓意について考へたが、思ひ當るところは些ともなかつた。「洒落や謎はおれたちには分らないからね」と英吉は断念したが、ふと、先つき物に驚いた仙子の様子が、彼れの頭にも異様に感ぜられたして、「お前はこれまで静夫に會つたことはなかつたのだらうね」と、疑ひの目をして訊ねた。

「えゝ。一度も……」と、仙子は断言したが、その事は何よりも一番訊かれたくないことだつ

た。

「さうだらう」

深くは訊かれなかつたが、仙子は自分で自分を裏切るやうな舉動を叔父夫婦の前で現したことを後悔してゐた。そして、贈り物の木彫を持つて自分の部屋へ入つてからも、そのことを思ひ出しては、他日の詰問を豫想しては恐れてゐた。……叔父の褒めるほどの巧な彫物とは思へないし、彼女の机の上に据ゑるのには如何にも不調和な惠比須様を、仔細に検分して、何處かに仕掛けがあつて、秘密の手紙でも封じ込められてゐるのではないかなどと空頼みを起したりした。

明とは知らず／＼親しくなつてゐて、最早彼れの手からはのがれられなくなつてゐるのに氣づくくと、仙子は抵牾しかつた。明を厭うてゐるのではないけれど、性急に自分の運を極められたくなつたのだが、それにつけても、こんな惠比須様なんかをくれたりして、何時までも自分を擲擧つてゐる靜夫が恨めしかつた。

八

英吉は學校が休暇になつたのを機會に、古い研究を新たにはじめる第一歩として、書棚の整理

をして、長い間塵埃に汚されてゐた古今の神學哲學の書類を再び明るみへ持出したりした。仙子にも書物の塵埃拂ひの打傳ひなどをさせた。

「年末の景氣を見に連れて行かうか」と、整理が略々片づいてから云つたが、すると、仙子はふと思ひついて、

「私ね、故郷の人で會ひたい人があるんですが、訪ねて行つちやいけないでせうか。今日でも明日でもいゝんですけど」と、外出の許しを乞うた。自分一人の自由な外出を叔父が許して呉れるか呉れないかと、ちよつと瀬踏みしたのであつた。

「知つた人の家へなら行つたつていゝよ」と、英吉は軽く答へて、仙子を火鉢の側へ坐らせて、自分で茶を入れて注いでやつて、「おれはこの冬季休暇中に一つ著述見たいなことをやる計劃を立てゝゐるのだが、それについてお前に側について筆記をして貰ひたいと思つてゐる。はじめは明か靜夫かを使ふつもりでゐるのだが、何方か一人に頼んでもいけないことになつたので、いつそお前に頼むことにしようと思つてゐる。面倒でもさういふことにして呉れ。お前が手助けして呉れば、おれが著述をするにも張合ひがあるから」

「だつて、そんな六ヶ敷い事は私なんぞに勤まりやしませんわ」と、仙子はあまりに不似合な

役目を言付けられたのに呆れてゐた。

「なに、お前にどつて出来んことはないよ。おれが口で云ふ通りを筆で書きさへすればいゝんだから」

英吉は若い女を侍らせて著述三昧に耽るのを、著述の内容如何に關はらず興がつてゐるが、仙子に取つては些とも有難いことではないので、成べく免れやうとして口實を考へながら、

「明さんも静夫さんも叔父さんのお手傳ひをしたがつてゐるんでせうから、二人の方にかはりがはりに筆記をさせなすつたらいゝでせう」

「さうは行かないよ」英吉は懐つこい笑ひを見せて、「お前が此家へ來てゐるので、おれにも著述慾なんか起つたのだ。だから、たとへお前が明に情愛を有つやうになつても、叔父さんは叔父さんとして忘れられないやうにしてゐて呉れ。……明が昨夕寄越した手紙によると、彼奴お前に對しては豫想外な熱烈な感情を有つてゐるので、おれも驚いてゐるんだがね。無論おれ達の方でもそれを望んでゐるのだから結構だが、お前だちがさう早く熱し過ぎて、今におれの方へは目もくれないやうになるのかと思ふと、心細くつてならないよ」

「どんなことが手紙に書いてあるのか知りませんが、私は叔父さんを疎末にするやうなこ

と、明さんにも誰れにも云つた覚えはないんですの」と、仙子はやゝ昂奮して云つて、「その手紙のことをもつとよく私に聞かせて下さらないでせうか」

「お前のことは決して悪、書いてゐるやしないから安心していゝよ。……だけど、二人を握手させやうとして一緒に呼んだのはおれの失策だつた。お蔭で若い者の氣持がおれにも些とは分つて來たが、人間は歳を取つちや財産があつても何があつても駄目だ。自分一人が取殘されるやうで心細いよ」

「……だけど、私なら、叔父さんが出て行けと仰有らない限りは出て行きやしません」

譯は分らないながらも、心細さうにしてゐる叔父の顔付に、仙子は一圖に同情して目を潤ませて行つた。

「静夫が出入りするやうになつたから、お前を監視しろとおれに忠告してるが、明も少し執念深いよ」英吉はさう云つて非難したが、明の手紙にある熱烈なる戀の告白には氣を悪くしてゐるのだつた。仙子を全く英吉自身から離れさせやうと思はれたのであつた。で、

「静夫の方がもつと淡泊でいゝ。お前はさうは思はないか」と、餘計なことを訊ねたりした。若い男女を結びつけるのを樂みとしてゐる英吉も、明の方で意外に熱して來るのを見ると、不

思議にいやな氣持の萌して來るのをどうすることも出来なかつた。どうせ明に與へるつもりで田舎から呼寄せた仙子だけれど、さう急に無雜作に手渡しするのは惜いやうに思はれだした。

「この休暇中は、毎日二三時間づゝでも書齋でおれの手傳ひをする氣になつてゐて呉れ、そのかはり後はお前の好きなことをして遊んでゐればよいよ」

英吉は著述の手筈を極めて、日に二三時間は仙子を側に引据ゑて置くことにしたが、いざ稿を起すとすると、頭が思ふやうに働かないので、一日々々と自から日を延ばした。そして、頭の働かないのが低悟しさに、仙子を連れたり、あるひは自分一人だけでよく散歩に出掛けたりした。

クリスマスから二三日経つて、靜夫が訪ねて來た時には、丁度英吉一人で遊びに出てゐて、おとよは風邪氣味で行火に當つてゐるところであつた。仙子は側で新年雜誌の小説を讀んで聞かせたりしてゐた。

「先日は不思議な贈物をして下さつたのね」と、おとよは、用筆筒の上に置いてゐる大黒天を見上げながら、二つの異様な贈物の意味を眞先きに訊ねた。

「別段異つた意味はありません。たゞあの二つは私が不斷大切にしてゐるた寶物なんです。貴女方お二人から福を授けて頂きたいと思つて差上げたのです」

靜夫はさう云つて、大黒天を用筆筒の上から取つて來て、その煤けた彫刻にさも愛着の念を寄せてゐるやうに見詰たりしてゐたが、やがて、「これを手に入れた由來は追つてお話しませんが、今日は先生のかはりに叔母さんに聞いて頂きたい大事な事があるんですが」と云つて、仙子には少しの間離れてゐて貰ふことにした。

仙子は妙な疑ひを残して自分の部屋へ退いたが、おとよも行火を出て火鉢の側へ寄つて、相手の口から變つた事の話されるのを待ち設けてゐた。

「お目出たい會ではあるし、明君なんかの手前もあるしするから先日の晩はお話しなかつたのですが、僕はこの頃も非常に當惑してゐることがあるんです」と、靜夫の顔は見る／＼萎れた。「一度消えかゝつた祟りが、この頃になつてまた私の身に落ちかゝつて來さうなんです。この夏此家へ伺つてゐた時分だつて、誰れに何と云はれても、私に暗いところはなかつたのですが、今だつて私に疚いところは微塵もないんです。それなのに、再び酷い迷惑を着なければならんやうな場合に落ちさうなのですから、かういふことが本當の祟りなのかと思はれますよ」

「では、またおきくさんのことで何かはじまつたのですか」と、おとよは聲を震はせて顔色を變た。

が、静夫は聴者が自分を詰責しようとしないので見破つてゐるやうに、自分から進んでこんな話を持出したことを後悔はしなかつた。そして、豫定通に話を進めた。

「私の方では何もはじめはしないのに、無理往生に因縁をつけられるんだから溜りませんよ。私が無實の疑ひを受けても、あの女はそれで却て腹癒せをした氣になつてゐるんだから、女といふ奴は恐ろしくてならない。浮かりすると名譽も生命も滅ぼされてしまひさうなのですからね。それであの下宿にゐちや、その祟りから免れることが出来さうぢやないんですが、……どうでせうか、當分の間だけでもお宅の玄關に置いて頂く譯には行きませんでせうか」

「おきくさんにも呆れつちまふ。……貴下も馬鹿な災難に會ふやうなものですね」おとよは、おきくに對する憎みのために、一層静夫を憐れむ氣になつて、「貴下を置いて上げるくらゐいと易いことなんですけど」

「そのことで此家へ御迷惑を掛けやしません。たゞ置いてさへ頂けば、私は安心してゐられるんですから」

「先生もいやとは仰有りやしますまいよ」と、おとよは静夫の寄寓を略承諾した。そして艶福に富んで居るといふ静夫の顔をしげ／＼見入りながら、「私どもには分らないけれど、そんなに生

命掛けて思ひ込まれたなら、男として本望かも知れませんが、擲擲半分で云つたりしたが、静夫は只管恐縮して、明には祕密にして貰ひたいと頼んだ。

「明は根が正直過ぎるから時々對酌のない亂暴な口を利いたりしていけないんですがね。貴下は此家へ入つしやるやうになつたら、明が何か氣に障ることを云つてもなるべく我慢して逆らはないやうにして下さいな。」と、おとよもそれ一つを案じて、豫め注意した。

「私は明君には決して逆らやしませんよ。これまでもさうだつたぢやありませんか。明君が此家でどういふ地位にゐるかといふことは私にもよく分つてゐるんですから。……私なんかは明君に對して頭は上りやしません」

静夫は卑下しながらも多少の不平をにほはせたが、おとよは從來疎外してゐたことなど思合はせて、ますます不憫な氣がした。

「先生は貴下と明とに分隔てをしてやしませんよ。貴下が立身して立派に一軒の主人になりなされるためには、私どもはどんなにでも力を添へようと先日から話してゐるんです。先生はとに角、私は明や貴下をでも手頼りにしなければ、世が寂しくつてならないんですからね。貴下も私たちの不斷の氣持をよく察してゐて下さい。お金に不自由してゐる時なんかには、私に打明けなされ

ば、私一人でどうにでもして上げますよ」

「叔母さんにそれほど思つて頂ければ、私もどんなに勵みがつくか知れませんが」

静夫は調子に乗つて、この一家のためになら身命を抛つても盡くすやうな口吻を洩らしたりして、世馴れないおとよを喜ばしてゐたが、仙子は部屋を隔てゝゐても、二人の潜々話が氣になつて落着いてはゐられなかつた。暫くしておとよに招かれて茶の間へ入つて行つても、いゝ氣持はしなかつたが、静夫の同居のことをおとよから聞かされると、自分の身についてもこの一家について一大事事件がいよゝ起つて來たやうに吃驚した。驚きを壓へ切れないうで顔に現した。

「僕が食客に來ちやいけないんですかね」と、静夫が笑ひ／＼云ふと、

「アラそんなことはありませんわ」と、仙子は顔を紅らめた。

「此家へ御厄介になるについて、今の下宿を引上げる前に、一度私の部屋の様子を見て頂きたいんですがね」と、静夫は二人の中の何方へ云ふともなく云つた。「私に取つちや、悲しいことや悦しいことや、いろんな思ひ出のある記念の部屋なんですから。壁にもいろんな人の名が書いてありますよ。……あの部屋の窓から見える夕日の景色だけでも、記念に見て頂きたいものですね」

「私も一度貴下の下宿へ遊びに行つて見たいと思つてましたよ」と云つて、おとよは静夫の移轉先に仙子を連れて出掛ける約束までした。

「貴女方が見に来て下されば、それを最後に、あの部屋に残つてる私の手の跡も足の跟も皆な拭取つて、跟を残さないやうにして、私の所有物も一切片付けて、記念の多い部屋にお別れを告げて出ることになりますよ。これから無理にも新しい生涯に入るつもりですから」と、静夫は氣色ばんで云つた。

長いこと空想に描いてゐた静夫の部屋の實際を仙子も一度は必ず見たかつたが、叔母と一緒にあつても其處へ出掛けるについては明の思惑が氣遣はれた。第一叔母の一存で静夫の同居を許してゐのかと、自分までも責任があるやうな氣がして、静夫などの平氣であるのが不思議でならなかつた。……「お前の居るところへ來たぞ」と、静夫の目は口よりもハツキリ語つてゐるやうに、仙子には思はれた。

静夫と入違ひに歸つて來た英吉は、寄寓の懇願をおとよから聞かされて、眉を顰めたが、「此家へ來てゐれば彼奴の評判もよくなる譯だから、置いて呉れと云ふのを断れもしまいよ」と云つたが、静夫の寄寓のために何事か起りさうな豫感を胸から搔消することは出来なかつた。

「何時越して来ててもかまはない」と云ふ知らせを静夫へ宛て、出すともにも、おとよは仙子に手傳はせて玄關脇の書生部屋の拭掃除をして、障子の破れを繕つたり、絨氈を敷いて粗末な疊を蔽ふたりした。

「こんな部屋でも役に立つた」と、おとよは客を迎へる準備を済ませて、机の置場などを考へて興がつてゐるが、すると、そこへ、明が何気なく訪ねて来た。

「些つと都合があつて、静夫を此處へ置くことになつたの。ほんの當分の間なんだけれど」さう云つたおとよの言葉は、明には寝耳に水であつた。自分にだけ秘密で皆なして取運んだことのやうに疑はれて、

「ぢや白井がこれから山村家の一人になるんですか。それもいゝかも知れませんか」と、皮肉に云つた。

「あの下宿にゐられないことが出来たのだつて」と、おとよは軽く受けて、以前の家に一時明の寄寓してゐた時分のことなどを思出して話しかけたが、明は些つと油断してゐる間に相手に出抜かれたやうな気がした。偶に出入りされてさへ、どんな魅力を亂用されるか知れないと氣遣つてゐるのに、この家庭へ常住居坐られてゐる日にや、自分などがいくらヤキモキしたつて適ふこ

とぢやないと心細い思ひに驅られながら、叔父の書齋へも顔出してないで、茶の間の柱に凭れて兩足を投出して黙つてゐるが、仙子までも静夫の同居を歓迎してゐるんぢやないかと次第に思はれてならなかつた。

で、平生叔父叔母の前では、仙子に對してあまり馴々しい口は利かないやうに注意してゐる彼も、仙子がおとよの側を離して次の室へ立つたのを機會に、自分も座を立つて其方へ寄つて行つた。

仙子は明の舉動に臆して、堅い顔して相對してゐるが、

「こんなことがあつたら、貴女が豫め僕に知らせる義務があるぢやありませんか」と語られると、

「だつて、私なんにも知らないんですもの」

「毎日常にゐるながら氣がつかないつていふのは可笑い」と、明は非難の言葉を重ねたが、あまり強く云つて相手の感情を害ねてはと思返して、「白井が来たためにこの家にどんな災難が起らないとも限らないから、貴女がこの家のためによく警戒してゐなければいけませんよ。叔父さんは人を見る目がないんだから」

静夫の悶れるところに凶事が起るやうに、飽くまでも仙子の胸に吹込んで置かうと、明は努めた。

「私、うつかりしてゐやしないわ」と、仙子は素直に答へたが、明は静夫の影が間近く迫つてゐる間は、確實に女を自分の所有としたといふ意識は起りかねた。それほどに静夫を向うに置くと、すべての自信を失ふのであつた。言葉の上の約束なんかでは、いくら繰返しても不安心であつた。

「今日僕は叔父さんに何もかも打明けますが、貴女は叔父さんの前で誓ひますか」

「何をです？」

「何を分つて分つてゐるぢやありませんか」

「……」仙子は相手の意氣込みに怖ぢながら後退りした。

この女に對する強い戀心や若い血の氣のためといふよりも、自分の所有を奪はれはしないかといふ茫漠たる不安に驅られて、人目が無ければ明は何をしたか知れなかつた。

晚餐を喰べて行けと云はれるのを、明は卒氣なく辭退して、二階で西洋の哲學書に向つて腦漿を絞つてゐる英吉には挨拶もしないで匆々に暇を告げたが、かねて一度は遊びに行く筈であつた。

静夫の所へ、この機會に行つて見る氣になつて、電車には乗らないで、愛宕下の方へ足を向けた。

下宿へ行く前に、先日話のあつた××軒へ寄つて、お玉に似てゐるといふ給仕女を一目見て置かうと思ひついて、下宿の近所を捜して、それらしい家を見つけて入つて行つた。珈琲を命じて、火鉢の側の椅子に腰をおろして、左右に動いてゐる白粉くさい二三の女に目を留めたが、お玉に似通つたのはゐなかつた。どれもく下卑た顔してゐて、お玉の持つてゐるやうな愛嬌さへの顔からも受けることは出来なかつた。

「白井さんといふ人は遊びに來ないかね」と、ためしに一人の女に訊くと、

「白井さん？……間宮館の白井さんならよく入つしやいます。正午にも御食事に入つしやいました」

「何時も一人で來るのかい」

「ええ。でも今日はお連れ様が御座いました」

「どんな人？」明はさして聞きたくもなかつたが、女に親む手段として訊ねた。

「女の方でした。時々御一緒に入つしやる方ですの」

「誰れだらう」明は相手が女だと聞いて、ふと好奇心を起して、熱心に質問しかけたが、要領

を得なかつた。たゞ若い綺麗な女といふことが分つただけであつた。

此處にも間宮館にも電話があるのだから、静夫を呼びたければ呼べたのだが、こんな給仕女とも前でも、静夫と一緒になるのを、明は好ましく思つてゐなかつたので、珈琲を飲むと直に出て行つた。

夕風は俄に寒くなつた。ウイスキーの一杯も飲んで来ればよかつたと後悔しながら、下宿屋を訪ねた。

折よく宿にゐた静夫は、階子段の口まで迎へに出て、さも珍客の訪問を喜んでゐるやうな様子を見せた。薄給な下級官吏であつても、獨立の生活をしてゐるだけあつて、學生の明などの居間よりも一段見勝つた、小瀟洒した部屋を居心地のいゝやうにしつらへてゐるので、何故此處を棄て、わざわざ窮屈な他家の書生部屋なんぞへ移轉しやうと企てるのかと、明は怪しみながら、

「君は飯倉へ越して行くんだつてね」と、直ぐに訊ねた。

「これから規律的生活をするために、彼家の玄關番になるんだ。少し年齢甲斐もない譯だが」と、静夫は苦笑した。

「辛抱が出来るか知らん」

「出来まいね。當分の中だらうよ」

「兎に角君は妙なことを思ひつくね」

「これでも眞面目なのさ。先生の家庭へ害を與へやしないから安心してゐたまへ。……彼方に同居する以上、君の一言一行が僕によく分るやうになるだらうし、僕の一言一行も君によく分るやうになるだらうから、これから善悪ともに、君と僕とは親しくなる譯なんだね。お互ひに隠し立ては出来なくなるよ」

「僕は元から誰れにも隠し立てなんかしてやしない」

「さうだらうね」静夫は眞顔で相手の言葉を受けて、「君が轉居前に来て呉れたのを幸ひに、参考のために飯倉の事情をよく聞いときたいのだが、一體先生の姪と君とはどいふ關係に立つてるんだい、叔母さんなんかの口吻によると、話が略々極つてるやうぢやないか」

「さういふ譯でもない」明はあの女はおれの所有だと、問はれぬ先に斷言しやうと、途中では考へてゐたくせに、間が悪さについ言ひそびれた。

「最初會つた時にはさうも思はなかつたが、見るたんびによくなるよ。いゝ女だね。少くもわれ〜の知人の中にはあのくらゐな女はゐらないよ」

静夫にさう云はれると、明は仙子の美しさが一層増して来たやうに思った。

静夫の目に仙子が美しく映つてゐると知るの、明に取つては不快の種であつた。そして、相手の轉居がますます、氣味悪く感ぜられた。

「何を考へてる？」と、静夫は明の腹を察してゐるやうに云つて、「約束だから××軒へ御案内しようかね」

「彼家へは先つき寄つて来たよ。お玉に似てる女なんぞゐるやあしなないぢやないか」

「確にゐるんだよ。あれほど似てるのに氣がつかないやうぢや君の目はどうかしてる」と云つて、静夫は××軒の給仕女の中の肥り肉の一人を選出して、その目許や小鼻のあたりの趣がお玉そっくりなのを説明したが、さう云はれると、明もそんな氣がしないでもなかつた。

「も一度行つてよく見直して見たまへ」

静夫は自分の部屋で愚圖々々してゐるよりも、××軒のストロブの側で、飲食しながら明を相手にした方が興が多いので、明を促して直にも出掛けようとしてゐるが、すると、そこへ、飯倉から二人連れで遊びに来るといふ電話が掛つて来た。

「移轉前に一度僕の下宿を見に来る筈になつてゐるんだ」と、静夫は待設けたこととして平然

としてゐるが、明には意外なので身の所置に迷つた。

「珍客が皆んな揃つたから、引越しの前祝ひをしようか」と、静夫は、ドツサリ火を繼いで、座蒲團を出して、茶や菓子を用意をした。明は逃げて歸る譯には行かないので、覺悟して腰を据ゑたが、自分が此處へ來てゐるのを叔母などに見られるのは不見識なやうな氣がしてならなかつた。

「君が晝間××軒へ連れて行つた女は誰れだい」と、新客を待つ間の話の種として何氣なく訊ねると、

「そんなことまで聞いてゐるのか、あれは役所の同僚の妹さ。公然親しくしてゐるんだから。君たちから彼此云はれる筋のものぢやないよ」と、静夫は今までに似氣なく手強く云つて、ふと調子を變へて、「なんなら君に御紹介しようかね。飯倉の皆さんと懇意にして頂かうと思つてるんだから」

「僕は女の友人なんかはつくりたくはないよ。」

「それは隨意だが、他人のする事に立入つて貰ひたくないものだね」と、静夫は口軽く笑ひ笑ひ云つた。「不徳でも何でも人が幸福としてゐるものを妨げるのはいゝぢやないね。君自身が

そんな場合に遭つたら痛さが分るだらうが……」

「僕は他人の幸福を妨げた覚えはない」明はさう断言しながら、むづ痒い思ひをした。

「君がさう信じてるれば結構だ。……しかし、飯倉の玄關番になるについちや、君には寛大に取扱つて貰はなくちや勤まるまいよ。君の目には僕は前科者だらうけれど」

「僕がどう思つてるようと、叔父や叔母はわれ／＼二人を平等に待遇してゐるんだからいゝぢやないか」

毒氣を帯びた静夫の言葉に傷つけられてゐるところへ、叔母などに訪ねて來られるのは、二重に不快な感じに悩まされる譯なのだから、明は成べく逆らはないやうに口を謹んでゐたが、やがて入つて來た新客の前では、自分から静夫の所へ妥協に來てゐるやうに見られるのが厭だつた。

静夫はまた、二人を迎へるとともに、「明君も僕の今度の轉居を喜んで早速來て呉れたのです」と吹聴した。

おとよは些つと窓を開けて外を眺めたり、部屋の中をも一應よく見たりしても、要するに下宿屋の一室といふだけでさして興味はなかつたが、たゞおきくがまた静夫を慕つて、この頃この部屋へ押掛けて來てゐるのかと思ふと、その光景がいろ／＼に想像されて、殺風景な下宿の一室の

机も火鉢も西洋風景の額なども、生々とおとよの目に迫つて來た。

そして、おきくが押つけがましく此處へ出入りすることを思つて左右を見てゐると、一日も早く静夫をこの下宿から自分の家へでも連れて行きたくなつた。それは必ずしも静夫を危険から救ひたいためばかりではなかつた。おきくの不都合な慾望を妨げることの快さが、知らず／＼とおとよの胸にも動いてゐるのであつた。

他の三人は食事を済ました後なので、明一人が空腹を我慢してゐた。仙子は静夫の手紙によつて空想に描いてゐた部屋の實際を見て、その暗合と相違とを比べて楽しんでゐたが、静夫は相變らずおとよをのみ話相手にして、仙子には冷淡と思はれるまでに、あまり話など仕掛けなかつた。

先日中止になつた芝居見物の計畫を復活して、正月になつたら一家を擧つて出掛けようと、おとよは云つたが、静夫は當分そんな所へは一切近寄らないで、謹直に暮すつもりだと云つて同行を斷つた。

「これは明君にも呑込んでゐて貰ひたいんですが、私が先生のお宅へ御厄介になるについては非常な決心をしてゐるんですからね。……皆さんの目で僕の日常生活をよく見て頂きたいんです」

彼れは、昨今聞いたことだと云つて、ふと思ひ出したやうに、この部屋の因縁話をした。

「三年ほど前のことですがね。この部屋に下宿してゐた男が女に迷つた揚句に、此處で毒藥自殺をしたんださうですよ。金に詰まつたためか、女に棄てられたためか、事情はよく分らないんですが、死骸の後仕末をする者さへないつていふ有様だつたさうです。當分は部屋の借人がなくつて、私が自殺後の二人目ださうですが、私も此處へ來てから、御承知の通りのいやな目に會つたんですからね。舊弊を云つて見れば亡者の恨みが残つてると云つてもいゝんですね。額の下の壁に、薄すら残つてる詩の一句がその人間の筆跡らしいんです」

さう云つて静夫は皆なを誘つて壁の側へ寄つて、「美人去後餘空牀」といふ文字を指先で差しながら判じ讀みした。由緒に刺戟されて、その幼稚な書きなぐりの筆跡をも皆な感動して見入つた。

たゞの下宿屋の一室も、俄に氣味の悪い印象をおとよなどの心に與へだした。

「そんなことが分つてゐながらよく平氣で此處にゐられますね」

「夜中に目の醒めた時に、死んだ奴のことを考へると僕でも變な氣がしますよ。其奴の顔が闇の中に出て來て此方を見てるやうに思はれたりしますよ。……だけど、女に迷つて自殺なんかす

る奴には同感出來ないから、さういふ奴の亡靈は些とも怖かありませんね。」と云つて、静夫は鴨居の上の柱を指差して、「彼處に不動様の魔除けのお札が貼りつけてあるでせう。下宿の主人が誰れか、崇りを恐れてやつたらしいんです」

明も他の者と一緒に感動して、變事の影を止めてゐる部屋の中を不思議な思ひを寄せて見廻してゐるが、何時となしに、静夫の話に信用が置けなくなつて、何か爲めにするところあつての捏造事ではないかと半ば疑ひを抱きだした。……何か異つた眞似をしたり話をしたりして女どもの注意を惹きたがる奴だから。……

「私もいよく今夜一晩で、自殺の亡靈ともお別れなのだから、憑付かれるのなら今夜のことだ」

静夫の戲談にも、おとよは眉を擡めた。そして、彼れに憑付く者はこの部屋に恨みを留めてゐる亡靈ではなくつて、おきくといふ執念深い生きた女であるやうに思はれてならなかつた。

「ぢや、明日は不吉な記憶を棄てよ、この下宿を引拂つて入らつしやいよ」
今夜何事もなければいゝがと、おとよが眞顔でさう云つたが、仙子も心の中で眞にそう願つてゐた。

翌朝静夫の移轉は雑作なく運んで、山村家の玄關脇の一室も面目を改めた。自慢の風景畫が掲げられ、經机じみた時代のついた枕が窓際に据ゑられて、新しい和洋の經濟書などがその上に置かれた。部屋が狭いので、本箱その他の所有物の一部は、仙子の部屋へも預けられた。

憂鬱に鎖され勝ちであつたおとよは、快活な若い一人を新たに傍へ置くことによつて、譯もなく元氣をつけられたが、英吉は若い男女に近づいてゐながら、休暇になつてから、却て今までに感じなかつた焦燥と不満を覺えるやうになつたのであつた。仙子を待らせての著述三昧を望んでゐながら、いくら思案を凝らしても文字に纏めて現せさうな考への浮んで來ないのをどうすることも出来なかつた。数十年間の讀書や育英事業や世路の經驗が、取留めなく頭腦に浮沈してゐるばかりで、文字に現すに足るやうな氣の利いた形を備へて出て來ないのが抵悟しがつた。そして、自分の頭腦の魯鈍なことを痛ましくも自ら認めなければならなかつた。

静夫の越して來た朝にも、英吉は机の前に正座して人には分らない苦しい時を過してゐたが、階下の物音を聞くと、書生部屋へ下りて行つて、部屋の整理について差圖などして、静夫持參の

書物を珍らしげに披いて見たりしてゐたが、それによつてふと思ひ立つたやうに、「おれは丸善へ買物に行つて來よう」と云つて、午餐前に一人で出掛けた。

電車を銀座で乗せて、夥しい人通りを分けてブラ／＼歩きながら、左右の商店の飾窓などを見てゐたが、可成りに裕かな自分の財力によつても、何の幸福も得られないのが悲しくもあるし、俯甲斐なくも思はれた。身に相應した老後の事業としてかねて樂みにしてゐた著述をするにも、頭腦は用をなさぬほどに萎びてゐるし、仙子に對する愛着を有つてゐても、彼女も早晚明か誰れか若い男に奪はれるのだと思ふと、生中一時バツと胸をひらいて呉れたけに、奪はれた後の寂しさが豫想された。明が静夫に對する反目も仙子に對する意外な執心も、若い者の勢ひのある所行として羨ましくして、ふと、立留まつた商店の玻璃に映る自分の老さらばひた顔が、われながら見づらかつた。

財産を譲るべき子に死なれて、新たに子を得る望みをも失つてゐる彼れは、自然に殖えた家産の過半を抛つても、若々しい健全な肉體が慾しがつた。敏い明い氣持が慾しがつた。街上の大地に跪づいてさういふ奇蹟の自分の身の上を起こることを天上の神に祈りたいやうな氣になつた。

丸善近所まで行つたころ、彼れは嘗て學校の歸りに立寄つたことのある洋食屋をふと思ひ出し

て、足を轉じてその方へ向つた。嘗て其處の卓上で得た若やいだ氣持が、彼れに取つては珍らしいものとして記憶に上つて來たのであつた。

京橋近くの裏通にある中くらの洋食屋で、店の裝飾でも給仕女でも料理でも、特に人を惹寄せるほどの價値のあるところではなかつた。この前は夕方だつたから電氣も點いてゐたし、客の出入も繁くて陽氣だつたが、今日は正午前なので一層殺風景だつた。女どもの身仕舞も出來上つてゐないし、部屋の中も薄ら寒かつた。

が、英吉は見覚えのある給仕女に、先日過分にやつた祝儀の利目で鄭重に迎へられた。けで、此處へ入るまでの寂しい氣持がいくらか慰められた。直ぐに一盞の洋酒を傾けて、獻立表を見ながら、馴々しい無駄口など利いた。

一人になつてから、料理の來るまで、酒の氣の廻るにつれて、自分の身に起る奇蹟について考へてゐるが、奇蹟は神々しい力を帯びて現れて來ないで、世間有振れた俗氣をもつて迫つて來た。

非難されてゐるた靜夫の過去の所行も、人間の幸福へ入る道のやうに、英吉の心に力強い暗示を與へだした。

で、酒杯の餘瀝を舐めながら、靜夫など若い者の心に宿つてゐる影を追つてウツトリしてゐると、そこへ料理を運んで來た給仕女の姿は、先つきよりも艶やかに見えた。西洋名畫の寫眞版によつて日頃尊崇してゐる聖母マリアの氣高い姿よりも、今日の前に媚びを含んで現れてゐる女の方が、老いたる者をも若やがせる力を有つてゐるやうに思はれた。眉の濃い薄いや鼻の低い高いなどの差別をば、今の年齢まで女房以外の女には親しまなかつた彼れは、鑑味する力をさへ缺いてゐるので、たゞ頬の豊かな、願も手首もむく／＼と發育してゐる女からは、一樣の刺戟を受けるのであつた。

「お花さんと云ふんだね」と云つて、年齢をも當推量で云つたりしたが、その女は仙子と同じくらのな年齢のやうに、彼れには察せられた。

「御酒は？」と、勧められたので、強ひて今一杯を重ねると、女は傍の椅子に腰を掛けて、無遠慮に煙草を一本抜取つて吹かしながら、馴々しい口を利きだした。

英吉は訊ねられることを正直に答へてゐるが、かういふ女の技巧も手順もなく親み易いのを喜んで胸をときめかした。

此處にはどんな客が來るかとか、幾年勤めてゐるかとか、何でもな話をしてゐても、仙子と

對座してゐる時には得られない清新な刺戟を得られたが、そこへ、新たな客が入つて來ると、ふと、氣が差して、彼れの態度も自から改まつた。

食事を終へると、窓際へ座を移して、わざ／＼買つて來させた香りのいい西洋煙草を吹かせながら、窓の下の人通りを見下してゐた。……無斷で外で食事をして歸ることは、この前と同様に氣にかゝつたが、しかし、女房一人でシヨンポリ待つてゐられた時とは違つて、仙子の寄寓してゐる上に、靜夫までも同居することになつたので、心丈夫であつた。……明の思惑は兎に角、靜夫の來たために、女房から受ける煩ひをいくらか免れて、これから自由の得られさうなのを、彼れはいふことにしてゐた。

で、彼れは、望んでも達せられさうでない著述の企てを抛つて、休暇中の氣儘な遊びをひそかに工夫しながら、其處を出た。曲り角で振向くと、窓際に立つてゐるお花は微笑を含んでゐた。丸善へは立寄らないで、何處ともなく歩いて、寒い風に酔ひを醒ましてから家の方へ向つたが、飯倉で電車を下りると、女房に對する旨い口實を考へるために、足の歩みが自からのろくなつた。

と、ふと、擦違ひざまに下女のお安に目がついたので、「何處へ行く？」と訪ねて、家の様子を

聞くと、おとよは午餐後墓參に出掛けたさうだつた。

英吉は安心して元氣よく家へ歸つたが、すると、靜夫は玄關脇から出て來ないで、二階から慌たしく下りて來て迎へた。

「叔母さんは一人でお墓參りに入つしやいました」と、靜夫は事々しく云つた。

「さうだつてね」

「私も一度お參りしたいと思つてゐましたから、お伴しようと思上けたのですけど、一人で入つしやりたいやうでしたから」と、靜夫は氣遣はしげに云つた。

「お墓へはよく一人で行きたがるんだよ」英吉は事もなげに云つて、火鉢の側へ寄つて、手づから茶を入れて飲んで、「君たちは午御飯は済んだのだらうね」

「え、頂きました。先生はまだ御飯前でせうか。……叔母さんは殊に御飯も召上りませんでした。そして、私にいろんなことをお訊きになるんで御返事に困りました」

靜夫は、氣に掛けまいとしてゐる英吉を揺動かして、無理強ひにおとよの心持について思ひ煩はせやうとした。

「どんなことを訊ねたのだね」と、英吉は據ろなく訊返しながらも、おとよの云つたらしい

厭味なことを、靜夫の口で繰返させたくなかつたので、「お仙は居るかい」と、話を外さうとした。

「お仙さんも叔母さんのことを大變氣にかけて居るやうです」

仙子は二階の襖に身を寄せて、階下の様子を氣遣ひながら、青褪めた顔して胸を轟かせてゐた。先つきはじめて靜夫と差向ひで、長い間、心に掛つてゐた疑問の糸のほづされたことを思ふと、最早一刻も安閑としてはゐられなかつた。叔父が突如に歸つて來た、めに、話が止切れて、五體の震へるやうな強い壓迫から一時免れることが出來たやうなもの、今日の日にも何とか自分の量見を極めなければならなかつた。

「仙子はどうした？」と云つてゐる叔父の聲を聞きつけると、それを機會に、靜夫の呼びに來ない間に、仙子はそつと階子段を下りて行つた。

「お前も二階にゐたのか」と、英吉は些つと怪訝な感じに打たれながら、彼女の顔を見上げて、「何か心配してゐるのか、顔色が悪いぢやないか」

「どうもしませんけれど」仙子は叔父の目が眩くて、自分の部屋の方へ行かうとしたが、呼留められて火鉢の側に坐らされた。

「叔母さんのことは氣に掛けなくつてもいゝよ。どうかすると、市太のことを思出して鬱ぐのがあるの病氣なんだから、さういふ時にはお前たちが慰めてやつて呉れ。おれが取合つちや却つていけないんだから。……それに、おれは休暇の間は圖書館へ行つて調べ物をしたと思つてゐるんだ。實は今日も丸善に思はしい書物が見つからなかつたから、上野の圖書館まで行つて來たのさ」

「上野も冬枯れで寂しう御座いませうね」

靜夫は、圖書館は歳末で休館してゐる筈だがと、變に思つた。そして、英吉が家の者の手前明らさまに云ひがたいところへ行つたのぢやないか、またこれからも行かうと企らんでゐるのぢやないかと疑ひだした。が、靜夫自身に取つてはそれは都合のいゝことであつた。自分の方から唆かして、英吉をして外の歡樂を求めさせたいくらゐに思つてゐたところなのだから、それはもつへの幸ひであつた。

「僕のゐない時には、君は僕の書齋を自由に使ふ事にしたまへ。讀みたい書物があれば、勝手に引出して見るがいゝ。」と、英吉は言馴れない偽言を云つた心苦しさに、相手に對してますます寛大な口を利いた。

「叔母さんに對しても出来るだけのお力添へはいたしますから、先生は家の御心配なく、圖書館へでも何處へでもお出掛けなすつたらよろしいでせう。第一書齋にばかり籠つていらつしやるのは、先生の御健康のために、よくないことと思はれます」

「さうさ。僕も學校と書齋と茶の間にばかり愚圖々々して居る間に歳を取つたのだ」

英吉は感歎したやうに云つたが、仙子の顔を見てみると、給仕女のお花の顔が媚を含んでムクと目の前に迫つて來た。酔後の疲れも出たので、「ちよつと午睡をするから、二階へ夜着を持つて行つて呉れ」と、仙子に命じた。そして、寢床の用意が出來てから階子段を上がつて、のびのびと快よく手足を伸しながら、お花の幻影を見詰めてゐた。

仙子は叔父が枕に就くのを見ても、階下へ下りて行くのが恐ろしくて、暫く書齋にウロウロしてゐた。

「何をしてる？」と、英吉はやがて頭を持上げて云つた。返事がないので、「え、どうしたのだ」と、重ねて云つた。

「……叔父さんは何時までも私を此家に置いて下さるんでせう」と、仙子は横を向いて哀れつほい聲で云つた。

「それは極つてるぢやないか。叔母さんが何か氣に觸るやうなことで云つたのかい」

「さうぢやないんですけど。……」

「可笑な奴だ」と、英吉は機嫌よく笑つて、「お前は自分の好きなやうにして暮らしたらいいぢやないか。おれはそれを望んでるんだ。叔父さんはお前の厭なことを強ひはしないよ」と、明との事を念頭に浮べながら云つた。

仙子はふと、叔父の言葉によつて力を得た。そして、叔父が再び目を閉ぢるのをそつと見て、階子段の方へ向つた。

静夫は英吉の置いて行つた西洋煙草を吸ひながら、茶の間に腰を据ゑてゐた。使ひにやつたお安はまだ歸つてゐなかつた。

仙子は呼び留められるのを豫期しながら、顔を背けて茶の間を通つて、自分の部屋の方へ行きかけたが、意外にも静夫は冷然としてゐて、聲も掛けなければ願ひもしなかつた。仙子は部屋へ入ると、机に寄つて息を殺して、茶の間の方の物音に耳を澄ましてゐた。否か應かの量見を極めねばならぬ瀬戸際に立つてゐるのだが、何方にしても自分ゆゑに波瀾の起るのを覺悟してゐなければならなかつた。「何のために、他人の家の書生部屋なんかへ移つて來たと思ふか」と、静夫は

かつて理由のない侮辱を受けた家へ、頭を下げて詫びて近づくことにしたのも、偏へに貴女を慕つてゐるためだと、眞心を顔に現はして云つてゐるが、自分は彼方からも此方からもそれほどに思寄られる價値のある人並すぐれた女なのであらうか。……

明は云ふまでもなく、静夫も抑捺つてゐるのではなくつて、長い間眞に自分を思つてゐたのだと、仙子は最早一點の疑ひを入れぬほどに確かに信ずるとともに、嘗て覺えない誇りを感じた。そして、二人の何方を選ばうとも自分の心の儘として見ると、躊躇なく心はSの方へ傾くのであつた。

「明さんがどう難癖をつけたつて、Sはさう悪い人とは思へない。少くも私に對しては悪い心を持つてゐないのに極つてゐる」

仙子はさう信じて、まだ見ぬ前に静夫が書いて寄越した手紙の文句を記憶に浮べたり、先つき叔父の書齋で静夫の囁いた言葉を思ひ出したりしてゐるが、机の上の惠比須の像の滑稽な顔や手振が、今はまことに懐かしく見えだした。

ふと静夫が身體を動かしたやうなので、仙子は驚いて小さくなつたが、やがて、書生部屋の方で襖の音がして後はひつそりしてしまつた。

仙子は故郷の人々へ宛て、年賀の音信を出さうとして、かねて用意してゐる一かさねの端書を出して筆を執つたが、今に兩親を驚かすことが起りさうな氣がしたので、極り切つた年賀の文句を書並べるにも胸がドキ／＼した。

お安が歸つて來て買物を持つて書生部屋へ入つて行くのにも、仙子は耳を留めた。静夫の笑聲も聞えた。何を話してゐるのか、お安もゲラ／＼と卑しい笑ひを高く響かせた。すると、そこへ、おとよの歸つて來た氣色がしたが、直ぐに書生部屋へ入つたらしかつた。

長い間おとよが静夫の部屋に入り込んでひそ／＼話をしてゐるのが、仙子には氣になつてならなかつた。出来ることなら立聞したいほどだつた。やうやくおとよが書生部屋から出て來たらしいので、仙子も茶の間へ入つて行つたが、出掛けには鬱陶しかつた叔母の顔の晴々してゐるのが、何となく不思議に思はれた。

「叔父さんはまだお目醒めにならないのか知らん。いゝ加減で起していらつしやいな。お茶を入れますからつて」

おとよに言付けられて、仙子は二階へ上つて行つて、叔父の枕許に立つた。スヤ／＼眠つてゐるものを呼醒ますのは躊躇されて、側に坐つて寝顔を見守つてゐるが、すると間もなく薄目

を開いた英吉は、ふと頭を持上げて、

「お前だつたのか」と微笑した。夜具を跳ねて起上つて目をこすりこすり、見残した夢の跡を追つてゐたが、

「お前はおれが寝る前に心配さうに何か云つてたね。何だつたか、も一度云つて御覽」

「もう心配なことも無くなつたんですの」

「それは結構だ」英吉は欠伸を洩らした。

十

規律的に勉強すると静夫は誓つて、英吉夫婦もそれを望んでゐたのに構はず、静夫は机の前に長く坐つて書物に親んではゐられなかつた。交際の範圍が狭くて、世間の風習をも顧慮しないこの家では、迎春の準備も極めて手輕なので、静夫などの手足を借りる必要は少かつたが、夫婦はともすると、話相手として彼を、二階なり茶の間なりへ呼寄せた。書生部屋へも屢遊びに行つた。おとよは元より、自分の頭腦の働きに失望してゐる英吉も、以前のやうに一人で書物など讀んではゐられなくなつてゐるのだつた。

圖書館行に假託けて、英吉は二日も續けて京橋近い例の洋食屋へ出掛けたが、静夫はますますそれを怪しんでゐた。

大晦日の夜。一家四人風呂に入つて食事を済ましてから、火鉢を圍んで一年間の思出話などしてゐるが、すると、おとよはふと、隈々までも明い部屋の一方に、市太のいたくしい死様をあり／＼と思浮べて、涙を落して萎れかへつた。

「そんなことを云つてゐても仕方がないから、皆なで下町の方へ遊びに行つて見ようぢやないか」と、英吉は妻の愁歎に引入られるのを避けようとして勧めたが、おとよは應じなかつた。

「私たちがもつと氣を詰めてあの子のことを思つて居ないから、恨んでゐるに違ひないんです。面白さうにして年を越さうとしてゐるから、今夜の今私の目の前に、あんな惨い顔を見せに出たんです。死者をして死者を葬らしめよと、聖書には書いてあるか知らないけれど、そんなことは人情に背いた無慈悲な教へだと思はれますよ」

「だつておれ達の力で、死んだ者を生返らせることは出来ないぢやないか。いくら思ひ出して悲んだつて、お互ひの身體を壊すだけで、何の効もないんだから」

英吉は妻よりも自分の方が、愛兒の死によつて一層強い打撃を受けてゐることに思ひ及んだ

が、おとよは夫の冷淡らしい言葉に飽足らなかつた。

「まだ半年も立つか立たぬのに、あの子のことを外々しくするからいけないんです。以前のやうに、私だち二人きりで市太のことを絶えず思出して忘れないで、あの子の魂を何時までも傍に置いてゐてやればよかつたのです。いろ／＼なことをして氣を紛らせて、私だちの壽命を延したつて、私だちに何の幸福も湧いて来やしませんよ。市太が死んだからつて除物にしようとするから、私にも貴下にも魔が差して来るんだと思はれますよ」

おとよは興奮してこんなことを云つて、仙子などに居つらい思ひをさせた。英吉は觸らない方がいゝと思つて口を噤んでゐた。

「賑かなことを云つて笑つてゐたつて、私だち二人は決して幸福に年を取れやしませんよ。……ちつとそこを見て、御覽なさい。市太が此方を見てるぢやありませんか」

さう云つておとよの見てゐる方へ、英吉も何氣なく目を向けた。其方には用筆笥の上に静夫の贈物の大黒天が飄軽な顔して蹲まつてゐた。

「ぢや、お仙と静夫君とだけで大晦日の景氣を見に行つたらどうだ」と、英吉は若い二人にいやな事を聞かせるのを憚つて、思慮もなく云つた。

「ぢや、腹ごなしに三田あたりまで行つて来ませうか」と云つて、静夫は「貴女は？」と仙子を顧みた。

叔母の刺々した言葉に惱まされてゐた仙子は、どうであらうと、座を離れる機會の出来たのを喜んで勧めに應じた。

「奥様、雪が降つて来ました」と、下女のお安は臺所から聲を掛けた。

その知らせによつて一座の者は皆な耳を澄ましたが、成ほど庭の樹木にサラ／＼と雨が雪かの音が幽かにしてゐた。

「先つきまで月が出てゐたのに」と、おとよは不思議さうに云つて、幽かな雪の音をも不思議な音として耳を留めた。

若い二人は雪くらにはめけないで戸外へ出た。仙子は叔母の刺をもつた言葉に恐れもし反感をも起してゐるので、静夫に随つて出るのを躊躇しなかつた。そして、二人きりで出歩くことが、無言の中に既に心を許してゐる證據になつてゐるやうな氣がした。

「叔母さんに追出されたやうなものですね」と、静夫は笑ひ／＼云つて、「僕たちのお蔭であの陰氣な家も明るくなつてゐるのに、死んだ子の亡靈を呼出して、僕等を疎外するのは怪しからんこ

とだ。見せしめのために今夜は思切り遅く歸つたらどうだらう。」

「後で叔父さんは困つてゐやしないでせうか。これまでも例があるんですから」

「先生はあれで貴方方のまだ知らない祕密の樂みをこしらへてゐるんですよ。だから、あの家もこの先平和ぢやありませんね。貴女も彼家にゐるには、いやな事を聞かさせる覺悟してゐなきやならないでせう」

靜夫は「祕密の樂み」の内容については、訊かれても話さなかつた。そして、電車には乗らな
いで、足を早めて歩いた。「仙子は何處までも隨つて行く氣になつた。小雪のチラつくのも慌た
しく人の通つてゐるのも、彼女には夢心地に見られた。」

「こんな寒い思ひをして歩いてばかりゐたつて詰らないから、温かい所で休んで、叔母さんの
機嫌の直つた時分に歸らうぢやありませんか」

「どちらでも。……私、歩いてゐても別段寒くは思はないんですけど」

「叔母さんに追出されたつて、無宿者見たいに震えながらうろついてゐるには及びませんよ。
僕だつて行き場所のないやうな甲斐性なしぢやないさ」

温かい所と云つたら、先日明に連れて行かれたやうな珈琲店ぢやあるまいかと、仙子はそんな

人目の煩いところへ入つて行くことを好まなかつたが、口へ出して逆らひはしなかつた。隨いて
歩いてゐる中、取留めのない恐ろしい思ひに、ふと胸を打たれたりしたが、恐ろしさは直に彼女
の夢の中に融けて、却て一層彼女の夢を燃し立てた。

大通りへ出ると、雑然たる賑かな人聲や物音をも、仙子自身の身の上何事か起るために起つ
てゐるやうに思はれたりした。店頭の商品も松飾りも、頬に觸れる粉雪も、彼女自身これまで見
たことのないやうに美しく世間を色取つた。

田舎の正月と都會の正月の相違などを何氣なく話しながら、靜夫の足は躊躇なく進んで、
愛宕下のある家の前に留まつた。先日叔母と一緒に來た下宿の近所であることは、仙子にも分つ
てゐたので、靜夫の懇意な家だらうと思つて、「私入つて行つてもいいんでせうか」と訊いた。

「僕が下宿にゐた時分に別荘見たいにしてゐた家です。別荘にしちや汚いけれど、そのかはり
氣の置けない家です」

横の小さな入口から入つたから分らなかつたけれど、煮物の臭ひが鼻を襲つて來たので、飲食店
ぢやないかと、仙子は想像した。縁側を傳つて階子段を上つて、小ぢんまりした部屋へ入るまで
に、この家が隣りの家から、三味線につれて聲のいゝ唄が聞えて來たので、こんな安つほい家

でも都會らしい異つた風情があるやうに思ひながら、仙子は座に就いた。

静夫は部屋へ案内した女に隨いて直ぐに階下へ下りて行つたので、仙子は周圍に目を留め耳を澄ました。叔父に對して何となく後見たい思ひはされたが、しかし、明の下宿へ行つた時ほどの不安は感じられなかつた。

何の唄だか分らないが、三味線の音はますます、冴えて來た。雪まじりの雨はしめやかな音を立てた。……「どうなつてもいゝわ」仙子は、臆する心を自ら勵ましなが、またも以前静夫が寄越した手紙の文句などを思ひ浮べてゐた。

白井静夫が此家へ女を連れて來るのは昨日今日のことではなかつた。賣女同様の女を幾人も弄そんでゐたのは云ふまでもなく、もつと性質の悪い所行も此家を根城として企まれたのであつた。

明にだけそれが氣づかれて、幾分の嫉妬と幾分の義憤とによつて、祕密を割がれたために、親戚知人に爪弾きされて、最も寵を得ようと努めてゐた英吉夫婦の信用をさへ失つて、流石の静夫も心細くなつてゐたのだが、まだ運に見棄てられないのか、持つて生まれた美貌の力によつてか、雑作なく自分の世が再び榮えだしたのを、彼れはひそかに喜んで得意になつてゐた。……仙子

子に宛て、真心を籠めたやうな手紙を頼りに出したのも、明に對する復讐のためと、最後の運を試みるための冒険の所行だつたので、一瞥しただけで淺い記憶しか残つてゐない仙子に、さしたる愛着を寄せてゐるやう筈はなかつた。

冒険と思つてゐたことも意外になだらかに運んで、英吉の信用を回復するし、再びおとよの寵愛をも得るし、仙子を明の手から奪ふことくらゐ何でもないことが分つて來たことが、静夫の心に満足を與へたので、單純に仙子に對する思ひがかなひさうなくなるまで有頂天になつてゐるのではなかつた。が、皆なしてチャホヤするほどの美しい女でも何でもないので、思ひながらも、まだ男の心を知らない女に、甘い言葉を囁いて、雪の降る大晦日の夜を過してゐるのは、静夫に取つても悪い氣持はしないで、ともすると、初戀のやうな邪氣ない氣持にもなつた。

「私、明日から叔父さんの家にゐられないやうな氣がしますわ」と、仙子は涙を浮べた。

「僕は人並に自活は出来るんだから、何時彼處を追出されたつて困ることはないんです。貴女と一緒に彼家を出て、別に一軒家を持つて生活を立て、行くくらゐは何でもないんですけど、決して急ぐ必要はありませんよ。時期を見て先生の許しを得て、誰れからも後指を差されないうやうにして結婚するに越したことはないんだから。……お互に同じ家にて、毎日同じ膳で御飯を食

べてるんだから、二人で家を持つてるも同様だと僕は思ってるんです。そして、二人して一生懸命先生や叔母さんの信用を得るやうに骨を折ることがお互ひの將來のためにこの上もない得策になるんです。叔母さんがヒステリーを起して今夜のやうな譯の分らないことを云つたつても、内心は僕等を手頼りにしてるんだから、僕等が急に彼家を出たりなんかしたら、先生夫婦はどれほど落膽するか知れないですよ。……たゞ貴女の心が迷ひさへしなければ、僕は甘んじて彼家の玄関番になつて、先生夫婦の慰め役になつて辛抱してゐるつもりなんですからね」

「私些とも迷つてやしないわ。……明さんのことなら、何とも思つてゐない證據をいくらでも見せて上げてよ。……先日も叔父さんの前で縁談を断つただけけれど、貴下の聞いていらつしやる前で、キツパリ断つたつていゝの。はじめから叔父さん達が勝手に云つてるだけなんですもの」

仙子は昂奮して、叔父の言葉や彼女に對する明の態度をもアケスケと話した。そして、明の手紙でも何でも洩れなく見せる約束さへした。静夫は明に打勝つた意地悪い喜びを感じることも、無邪氣らしいこの女の心の中に潜んでゐる惨酷の影を見たやうな氣がした。

「僕は貴女を疑つてやしないんですから、明君をあまり冷淡に扱つて怒らせないやうにしな

やいけませんよ」

「怒られたつて構はないわ」

さう云つて、仙子が強くなるのを、静夫は壓へながら、女の無思慮から詰らない破綻の起るのを氣遣ひだした。

静夫の方が却て時刻の移るのを氣にして、仙子を促して歸仕度を急いだ。

「私貴下に訊ねたいことが澤山あるんだけど」と、静夫の過去の所行などについて知りたいことが仙子の胸に満ちてゐた。

「これから汽車にでも乗つて遠方へ行つたらいゝと私思つてよ」と、仙子は自分の身を静夫にまかせたことを悔いながつた。ますます勢ひの増した雪まじりの雨や冷い風は却て燃立つた彼女の空想に力を添へて、樂い夢から夢を追はせようとした。

「慌てゝ田舎へ逃げたりなんかしなくつても、身を隠さうと思へば、東京の中でどうにでもなるんですよ。東京は廣いんだから……」静夫はさう云つて、この女なぞと目的もなく逃隠れする馬鹿らしさを思ひながら、「そんなことするよりも、飯倉の家を貴女と僕との隠れ場所にしとけばいゝんです。寒い目もひもじい目もしないで、大事にされてゐながら、二人の間の思ひは自由に

通はせることが出来るんだから、こんな結構なことはありませんよ。少し注意してれば、先生なんかの目を忍ぶくらは何でもありやしない。……逃さなければならぬ羽目になつたら、その時にはまた僕にいゝ分別があるから安心してゐらつしやいよ」

事もなげにさう云はれると、仙子は心丈夫になつたが、寒い目もじい目をするのは何でもないから、知人の目に觸れないところへ二人で行きたいやうな気がしてならなかつた。口へ出して云ふのは憚られたが、明に暗示を與へられてからをりく不快な心掛かりとなつてゐた静夫と叔母との事が、今はことに胸に浮んでならなかつた。

家の者の前に平氣を装つてゐるやうにと、静夫はそれ一つを氣遣つて、話の間に屢繰返した。そして、家の側まで歸ると、わざと活潑に下駄の音をさせて、賑かに聲を立てた。仙子を先へ入らせて戸締りをして家へ入つたが、おとよは玄關の障子を開けて出迎へてゐた。

果して夫婦の仲は和らいでゐるらしいので、静夫の下町の賑ひや電車の満員などを事々しく話しながら、火鉢の側へ寄つて、片隅でもちくちくしてゐる仙子をも招いたが、

「さつきまで明が來てゐましたよ」と、おとよに云はれると、思はず心を引締めて、つゞいて何を云はれるかと待設けた。

「今夜は變な夜さ」と、英吉は浮かぬ顔して云つて、「明も呆けた口を利いてゐたよ。鎌倉邊へ行つて元日を迎へて來ようかと云つてゐたが、どうしたか知らん。實は僕も宵からさう云ふ氣がしてゐたのだし、君たちもそんな氣になつて、悪くすると今夜は歸つて來ないんぢやないかと心配してゐたのだが、まあよかつた。兎に角これで無事に元日が迎へられさうだよ」

「だけど、私も一人で遊びに出たのぢやなし、まさかお仙さんを放つちらかして旅行に出掛けられないぢやありませんか。そんな無責任なことは思ひもつかないことですからね」と、静夫は眞顔で辯解した。

「無論さうだが」と英吉はおとよの方を見て、「お前も二人が出て行つた後で、お安をやつて呼び戻したいと云つたりして焦々してゐたやうだつたね。そこへ、明は明で滅入つた顔してやつて來るし、おれも變なことが考へられてならなかつたんだよ。一度あることは二度と云つて、この夏にはあんな不幸があつたんだから、今年のどん詰りの大晦日に、も一つ大きな災難がおれたちの上に落ちて來るんぢやないかと思つてビクビクしてゐたのさ。そして、君は笑ふかも知れないが、さつき此處で二人して神様の愛憐を祈つてゐたのだ。……お互ひに身を慎まなければならぬと、おれはつくづく感じてゐた。慎みが缺けると災難が起つて來るんだね」

眞心から出たらしい英吉の言葉は、彼れとしては調子を外れかけてゐるこの頃の所行の悔悟を示してゐるやうでもあり、あるひは静夫や仙子を暗に、戒めてゐるやうにも、静夫の耳には聞かれた。

「明日から慎んで清く日を送らなければならぬ」と、英吉は重ねて力強く云つた。

十一

常例によつて田舎風の蕎麥掻きを食べ、一しきり話してゐるうちに除夜の鐘が聞えた。それを意味ありげに聞いて、皆なめい／＼の部屋へ退いたが、寢床に就いて直ぐに快い睡眠を得たのは下女のお安と静夫とだけであつた。

おとよは尙更だが、英吉さへ屢悪夢に襲はれて元日の曉を迎へた。宵からひそかに恥ぢたり悔いたりしてゐたお花に對する年甲斐もない戀心が、夢の中ではさまざまな墮落の様を現はした。で、朝は早く目を醒まして、閑寂してゐる薄明るい寢室の空間を見詰めながら、僧侶のやうな清淨な生活を考へて、知らず／＼浮んで來る墮落の影を追拂つてゐるが、やがて目を開けたおとよに向つて、

「おれは今更學問の研究をしたつて望みのないことは分つて來たから、その方は斷念して教師の職もいゝ加減で切上げて、貧民や不遇な人間の爲めになるやうな慈善事業の手傳ひでもしてこの後を送らうと思ふが、お前はさういふ氣になれないか」

「市太の追善のためにもそれに越したことはありませんまいよ。貴下がさういふ氣におなりなされば、私だつて出来るだけのことはいたしますとも」と、おとよは快よく應じた。

早晩後繼者を定めて、自分達夫婦は神聖に殘生を送らうと、寢床の中で暫く話合つた。そして、雪晴れの麗かな初日が障子の隙間から差すのを見て元氣よく寢床を離れた。

若い者二人に改まつて新年を祝されて、しるしだけの屠蘇を酌み雜煮を食べてから、英吉は二階へ静夫を呼んで、年賀狀の宛名を書かせながら、昨夕から今朝へかけて考へてゐた年頭の覺悟などについて話した、さも尊い覺悟であるやうに興奮して云つてゐるのが静夫には可笑かつた。

「それは無論結構なことですが、専門の御研究について何故そんなに失望していらつしやるんです？。圖書館へもお出掛けにならないんですか」

かう生眞面目に訊かれると、今朝から聖者の心持になつてゐる英吉は、白ばくれてゐるのに堪へられなくなつて、

「君だから云ふが、僕は圖書館へは行つたのぢやなかつた。氣が沈んで仕方がないから何か面白い所はないかと思つて、ほつき廻つてゐたのだが、考へて見ると詰らんことだつたよ」

「どういふ面白いところを捜していらしたんですか」

「僕は世間を知らないし、決して怪しい所へ足を入れはしないよ」と、英吉はかたく身の潔白を示さうとして云つて、「些つと居心地のいゝ洋食屋で飯を食つて來たくらるなものさ」

静夫は先生の浮氣はそんなことだつたのかと、張合ひのない思ひをしながら、「この近所にそんないい洋食屋があるんですかね」

「なに京橋の方だよ」

英吉は、静夫などを連れて行つてもいゝと思つたが、お花のことがあるので思止まつて、その家の名前をも明さなかつた。

二三人客室へ通つて浮世話をして行く廻禮の客もあつたが、待設けてゐた明はつひに顔を見せなかつた。仙子は盛裝して化粧してゐるが、やゝもすると、自分の部屋に閉籠つた。そして明の贈物の日記帳を出して、書はじめに、暗號見たいな文字でSとのことについていろ／＼な感じを記したりしてゐた。

静夫は終日家にゐて玄關番を勤めたり、新たに來た年賀狀に對する返信を英吉にかはつて書いたりしてゐるが、ふと、英吉の机の側の丸い反故籠に、洋食屋の書付の入つてゐるのを見つけた。

「清樂軒か」と、彼れは何か役に立ちさうに思ひながら、その家の名前と町名とを深く記憶に留めた。

静夫は新年の祝ひに、芝居とか名ある食物屋とかへ家の者を誘ひ出さうとして、それとなく唆かしたが、聖者にならうと努めてゐる英吉は、さういふ世俗的の娛樂や贅澤には心を寄せないで、三箇日の間は聖書を讀んだり瞑想に耽つたりして、打解けた座談にも不淨な言葉は口にしないうやうにしてゐた。だけど、静夫には小使錢を與へて、遠慮なく自由に遊んで來るやうに勧めた。

静夫は仙子を連れ出すことの出來ないのを物足らなく思ひながら遊びに出たが、自分の馴染の遊び場所へ行くよりも、先づ清樂軒へ足を向けることにした。豊かな財産を有つてゐながら金で買へる快樂を求めやうとはしない先生の隠れ遊びの場所はどんな家かと、皮肉な好奇心を起してゐたのであつた。

捜當てゝ見ると、外見からしてあまりいゝ家ではなかつた。内部は廣くもなければ贅澤に飾られてもゐないで、特別に居心地のいゝ感じのするところはなかつた。旨い料理が出来さうにも思はれないので、靜夫は氣まぐれにこんな家へ入つて来たことを後悔して、西洋酒の一杯も飲んだら出て行くことにしやうと思ひながら、ストーブの側へ寄つてゐるが、他の客をあしらつて、階子段を上り下りしてゐる二三の給仕女を何氣なく見てゐる間に、ふとその中の一人に男好きのしさうな顔立を見つけて、一つの疑ひを頭の中にきらめかした。

「若しかすると、先生の祕密がこの女に關係があるのぢやあるまいか」と、急に面白くなつたやうな氣がした。他の客がこの女をお花さんと呼んでゐるのも耳に留まつた。

で、此處に腰を据ゑることにして、料理をも眺へて、ひそかにお花の様子を見てゐるが、やがて、お花の受持の客が歸つた後で機會を見て側へ呼んで、新たな洋酒を命じながら、

「かういふ人はこの頃この家へ來ないかね」と、容貌や年恰好や住所をも説明して訊ねると、お花は些つと考へてゐるが、「ぢや、山村さんでせう」と答へた。名前まで明かしてゐるとすると、いよくそれに違ひないと、靜夫は自分の疑ひを確めた。

「貴下、山村さんを御存じなのですか」

「あゝ、よく知つてるよ。あの方はえらい人なんだよ。あの方の身分や何かを僕が喋舌つちやいけないから、君に訊かれても云やあしないが、今度いらつしやつたら大事にしなければならんよ」

「えらい方と云つて……」と、お花は氣にして熱心に訊ねたが、明瞭な答へは得られなかつた。

「今後此家へは入らつしやらないかも知れないね。どうもさうらしい口吻だつたが、あの方のお氣に觸はるやうなことがあつたのぢやないかね」

「そんなことがあるものですか。……今度御一緒に入つしやいませ」

「それはお伴して來てもいいが、御機嫌に觸つたことがあるのなら、お花さんからお詫びの手紙を出した方がいゝね。だけど、僕に云はれたから出すと云つちや駄目だよ」

そこへ他の女中が料理を運んで來たので、靜夫は話を他へ轉じた。そして、來た甲斐があつたのを喜んで、ゆつくり食事をして其家を出たが、歸り際に、いかにも熱心にお花から傳言を頼まれたので、彼女が英吉をいゝ客としてゐることが察せられた。

次に夕方まで何處かで遊んで行かうと思つたが、この日はわれながら不思議なくらゐるに仙子

に心を惹かれて、一時の戀み物になるやうな他の女を相手に遊ぶ氣にはなれなかつた。で、早目に家へ歸つたが、英吉は瞑想ばかりでは倦んで、話相手を慾しがつてゐたのか、靜夫は茶の間へ入ると、直ぐに二階へ招かれた。いやに沈んでゐる仙子の顔を見て氣遣ひながら、彼れは階子段を上つて行つた。

英吉の机の上には、いろ／＼な慈善事業に關する書類が載せられてあつた。

「今本箱の中からこれを搜出して、非常に感動してゐたところなんだ」と、岡山孤兒院の報告書を取上げて「僕の舊友で日向の茶臼ヶ原の分院で働いてゐる男から、去年市太の亡くなつた時分に偶然送つて來たのだが、この書物で見ると、この孤兒院の成立は全く奇蹟なんだね。田舎で薄汚い孤兒の世話なんかして年を取つてゐる舊友の生涯は詰らないだらうと以前思つてゐたことがあつたが、よく考へて見るとさうぢやあるまい。満足してさういふ事業に身を入れて田舎に埋つてゐるあの男の氣持が今日は僕にも分つた氣がするよ。大發明や大著述は出來なくつても、不幸な同胞のために些しのいゝ事でもしたといふ感じは、どれほど自分の精神を安靜にするか知れないと思はれるよ。來世がどうであらうと、この世で人のためにいゝ事をした人間の魂が惠まれぬい筈はないだらうからね」

先つきから獨りで考へてゐたかういふ感じを、親しい者に向つて述べ立てるだけでも、英吉は自分の心の清くなるのを覺えてゐた。靜夫は例のやうに相槌を打ちながら謹聽して、相手の説教の終るのを待つてゐたが、うっかりすると、その舊友といふ男に手紙をやつて財産の幾分かの寄金をもしかねまじき英吉の口吻だつたので、他人事と思はれぬほどに危んだ。

「友人に問合はせて、事情によつたら日向へでも行つて、孤兒院の世話でもして見たいと思つてゐるよ。愚圖々々と中學の教師なんかして日に／＼墓場へ近づいてゐるのは、僕の探るべき賢明な道ぢやないと感じてゐるが、君は同感してくれないか」

「先生がさういふ決心をなさる場合には、私も日向へでも何處へでもお伴させて頂きたいと思ひます。……だけど専門の御研究のことを何故お棄てになるんでせう。先日も明君とも話して私どもは非常に期待してゐるんですが、市太さんの記念としても、かねてお企てになつてゐる著述に着手なすつちやいかゞでせう。不斷私どもにお話しになつてゐることを其まゝ書いて纏めたゞけでも、人生問題に深く觸れた立派な書物が出來上るだらうと思はれますよ。有名な若い學者の著した新刊書なんか、をり／＼讀んでは見えますが、左程感服したことはありません。どの方面の學者としても、眞正に光彩を放つ著述の出來るのは、先生くらゐな年齢に達してからぢやありません」

まいか。」

「しかし、僕は年齢より先に、精神が老朽してるから駄目だ。」

「それは御自分で御自分を侮辱なさるやうなものぢやありませんか。……先生と違つた、もつと凡庸な頭を持つた人間でも、生きてゐる限り自分を老朽扱ひすべきものぢやないと私は思ひます。そんな暗い考へを追拂つて生々した氣持になるためには、世の中にいろんな手段があるんぢやありませんまいか。」

「そればどんなことだ」

「私にもよく分つてゐませんが、暗い考へに沈んで、尊い傑れた精神を粗末にするよりは、少々世俗的のこゝろをしても、精神に力をつけて傑れた働きをさせる方が、遙に賢明な生活法ぢやないでせうか。徒らに酒を飲むのは悪いにしても、一杯か二杯の酒で憂鬱になつた頭腦を昂奮させるのは、決して罪惡とは云はれないだらうと思はれます」

「だから、僕は君たち若い者には以前のやうな窮屈なことを強ひやしないよ」

英吉は静夫に受答へをしてゐる中に、ふと自分の頭腦に對して多少の自信が萌しかけた。

「これは別の話ですが」と、静夫は微笑しながら、「今日不思議なことがありましたよ。」

京橋近くの裏通りの清樂軒へ何氣なく入つて行つたことを話して「彼家は料理も旨いし、何となく居心地のいゝ家ですね」と云ふと、英吉は顔を紅らめて、

「さうでもないぢやないか」

「先生のことを話してた給仕女がありましたよ。先生はたび／＼彼家へ入つしやつたんですか」

「なに、二三度飯を食ひに行つただけさ」英吉は静夫が其家でどんなことを聞いたのかと、後見たい思ひをしながら、強ひて笑ひを浮べて「僕にも君たちの知らない苦みがあつて、氣晴しにあんな家なんかへ行つて下らんことを云つたりしたのだが、決していゝこつちやないね」

「私は先生が若い氣持におんなすつたことを、彼家の女中に聞いて、獨りで先生のために祝盃を上げたのですがね。お宅へ置いて頂いてからまだ僅かな日數しか立ちませんが、先生のお心持は略推察して、御同情してゐることもあるんです。そして、孤兒院の事業のやうなことに興味をお持ちになるのは先生のために非常に喜ばしく思ひますが、その前に先生のお心にかゝつてる蜘蛛の巣を拂退けることを、私は望んでゐますのです。孤兒院の事業なんかも、明い晴々した氣持をもつた人がやらなければ効果がないんぢやありませんまいか。先日飯倉の會堂でお目に掛つ

た時に、驚いたんですが、無遠慮に申上げると、先生のお顔に死の影が差してるやうに思はれてならないんですよ。孤兒をお救ひになる前に、何故先生御自身の魂を憂鬱の手から救はうとお考へなさらないんでせう」

静夫の言葉は權威をもつて英吉の胸に響いた。「僕の顔はそんなに死相を帯びてるかい」と、英吉は老いさらばへる顔を鏡に映して見てるやうな気がして、云ひやうのない心細さを覺えた。

「尊い魂を蝕んでる憂鬱の影を追拂ふためになら、居心地のいゝ家で一杯や二杯の酒を飲むことくらゐは、罪悪でも何でもないぢやありませんか。先生の望んでいらつしやる奇蹟も、世間へ出てお求めになれば得られんことはないよ、私は僥倖ながら信じてるんです。そして、私がお役に立つやうなら、何時でも先生の犠牲になる覺悟をしてるますよ」

「若い者を犠牲にする気はないが、君が家にゐて呉れたので、非常に心丈夫に思つてるよ」英吉は媚びるやうに云つた。清樂軒を知つてる静夫に向つては、最早聖者じみた口は利けなくなつたやうに感じて、朝から考へてゐた尊い方針を語つて自ら樂しむことも出来なくなつた。そして、

「君、明は小田原へ行つてるんだね。先つき手紙が来たよ」と、話を轉じたが、すると静夫

は、他人事に身を入れてうっかり忘れてゐた自分の大切な事に心をつけた。

「田舎もいゝでせうが、明君のことだから寂しがつてやしないでせうか」

「彼奴も感情が強いから困るんだが、君は年上なんだから、此家にゐる間は成べく明と衝突しないやうに用心してゐてくれたまへ」

「御存じの通り、私の方から明君に逆らふことはありません」と云つて、静夫は危いところを一步踏出すつもりで、「先生はお仙さんを明君にお嫁はしになるお考へなんでせうか」と訊いた。

「いや、さう極めてる譯ぢやないよ」

「しかし、私も此家に置いて頂いてる上は、そのことはよく承はつて置かないといけなからうと思はれますが」

「お仙の縁談はまだ極つてやしないんだ。明が君に何か云つたのかい」

「いえ、明君からは何も聞きませんが、私が當推量にさう思つてゐたどけなんです。……へえ、まだ縁談は極つてゐなかつたんですか」と、静夫は念を押して置いた。

仙子を明に嫁はすことが確定してゐないといふのなら、萬一自分と彼女との關係が英吉夫婦に

知られたつて、十分に言譯の道はあると、静夫は一層裕たりした氣持になつた。まさかの場合に持出せる言質を英吉から取つた積でゐた。

世間の食客とは違つて、表面は兎に角、心の中では些とも萎けてゐるのではないから、この家で豊かな正月を送るのは、下宿屋にゐるよりも結句氣樂であつたが、やうやく手に入れたばかりの仙子を目の前に見ながら、戀人として自由に語ることの出来ないのが、静夫には抵悟しかつた。先日の夜彼女に向つて、暫くの忍耐を説聞かせた静夫自身が、心を落着けてゐられなかつた。仙子の顔の曇つてゐるのが氣になつたり、おとよが何時も茶の間に頑張つてゐるのが目障りになつたりした。

戸外へ一人で遊びに出るのも詰らなくなつて、書生部屋に火鉢をかゝへてぢつとしてゐると、自分の今度の戀の初心らしいのが我ながら可笑く思はれることがあつた。小田原なんかへ行つて何をしてゐるのだらうと、明のしよんほりしてゐる有様を想像して、ひそかに皮肉な薄笑ひを浮べることもあつた。「御勉強？」と聲を掛けて、おとよは退屈醒ましによく入つて來たが、以前のやうに仙子が後から隨いて來ることはなかつた。

三ケ日は無事に過ぎて、四日の朝、静夫は旨く仙子を連れ出して自由に遊んで來る工夫を凝ら

してゐるが、そこへ、郵便の聲がしたので、自分の役目として取りに行くと、幾枚かの賀状の一つに目が留まつた。差出人の名は明瞭に書かれてゐなかつたが、「明けましてお目出たう御座います。ちとこちらの方へもお出掛け下さいませんか」と、男の手か女の手か分らないやうな字で書いてあるので、お花からの呼出状といふことは直ぐに分つた。

静夫はその端書を一番上に置いて二階へ持つて行つて、例のやうに返信の宛名を代筆するつもりで、暫く畏まつて英吉の命を待つてゐた。が、英吉は何氣なく手にした端書を見ると當惑した様な顔をして仕方のない奴だ」と呟いて、端書の裏表を熱心に見ながら、「君が住所を云つたんぢやないか」と、責めるやうに静夫に云つた。

「何をです？」静夫は相手の手から端書を取つて、わざと不思議さうに見詰めた。

「僕がかう詳しく住所を明した覚えはないから、君が云つたのに違ひないよ」

「さうかも知れませんが、先方はよく知つてゐたやうでした」と、静夫は動じないで云つて、むしろ英吉の不平を壓するやうに、「彼家から年賀狀が來たつて差問へはないだらうと私は思ひますが」

「しかし、何でも無い者からこんなものを矢鱈に僕の家庭へ寄越されちや困るよ」

「ぢや近日、も一度私が彼家へ行つて、この端書を出した女によく注意して置きませう」と、
静夫は事もなげに云つて、「だけど、私なんか一寸見たところでは、あの女はあゝいふ家に入る女としては珍らしい、無邪氣な素直な女のやうに思はれますが、先生はさうお思ひにならないんでせうか」

「それはさうかも知れませんが、兎に角馴々しく端書を寄越されたりしちや困る」
さう云ひながらも英吉の顔の和らいだのを、静夫は見のがさなかつた。

「あゝいふ無邪氣な女から快活な話をお聞きになるのは、先生の御健康の爲にも祝すべきこと、私は思つてゐますのです。無智の女だと云つて一概に排斥するのはどんなものでせうか。少しでも先生の精神を慰める役に立つものがあつたら、成べく利用なすつたらよろしいんぢやありませんまいか」

英吉は黙つてゐた。

「先生がお嫌ひにならなければ、私は何時でもお伴してもよろしんです」

英吉は微笑を浮べて黙つてゐた。

静夫が階下へ下りると、英吉はさらに端書を取上げて穴のあくほど見詰めてゐたが、さうして

ゐると、愛嬌に富んだお花の顔が鮮かに目の前に浮んで来た。女性について目の肥えてゐる静夫が、「素直で無邪氣だ」と云つたのに間違ひはないやうに思はれて、若い者見たいに頻りに心が躍つた。元日以来一步も戸外へ踏出さなかつたのだから、温かさうな日影を見るにつけても、家中にちつとしてゐるのが俄に堪へがたくなりだした。が、静夫の思惑が氣になつて、直に家を出る譯には行かなかつた。

で、その日の午餐時の團樂に、何心なく單調な平和を樂しんでゐるのは、おとよ一人であつた。

静夫はありつたけの智慧を絞つてもいゝ工夫を思ひつかないでいらした揚句に、ある事を書きつけた紙片を書物に挿さんで仙子へ渡して、戸外へ出て行つた。三ヶ日の間夜も晝も絶えず、楽しい夢怖い夢に襲はれ通してあつた仙子は、書物を手にすると、俄に我れに返つたやうに、慌てて自分の部屋へ入つて、胸を轟かせながら紙片を読んだ。

「ゆつくりお話ししたいことがあるのですが、家にゐてはどうしても機会が得られないから、思切つて外へあなたを誘つて出ようと決心しました。僕は二時が打つころに飯倉の停留所で待つてゐますから、あなたも叔母さんの許可を得てその時刻に出ていらつしやい。口實はあなたの友人

のところへ年賀に行きたいと云へばいゝでせう。兎に角あなたが家を出て来さへすれば、後の言譯は僕が引受けて、あなたの迷惑にならないやうに旨く考へるつもりだから安心なさい」

仙子は急いで読み了つたが、改めて考へ直す暇もなく、相手の勧めに身をまかせるつもりで、直におとよのところへ行つて、外出の許可を乞ふた。

「へえ、貴方にそんなお友達があつたんですね。清子さんなんて聞いた事のない名前だけだ」と、おとよは不思議さうに云つたが、訪問を止めはしなかつた。

「叔父さんはよく知つてゐらつしやるんですの」と、仙子は思はず出鱈目を云つた。そして、二階へ上つて英吉の許可をも乞ふと、

「何時かお前が話してゐた故郷の女かい」と云つて、英吉は氣にも留めなかつた。

仙子は叔母に衣服の世話をされるのも心苦しかつた。新年だからと、縮緬の羽織だの繡珍の帯だのと、事々しく装はされるのも後目たかつた。指定の時刻にはまだ間があつたけれど、かう定つてから家にゐるのは居づらかつたし、故意に時をおくらすのは叔母に對して變だつたので、仕度が出来ると、直ぐに家を出た。そして、二時になるまでと、所かまはずに歩いてゐたが、生れてはじめて大膽にも、見え透いた偽言を云つたことを心が咎めてならなかつた。後が恐ろしかつた。

た。

「だけど、叔父さんはお人よしだからいゝわ」と、自ら慰めながら、周囲の光景には目も留めないで、時間潰しに歩いてゐたが、

「何處へ行くんです？」と、ふと聲を掛けられたので、驚いて立竦んだ。明は強ひてつくつた笑ひを浮べて前に立つてゐた。

「貴女一人？」

「えゝ」仙子は驚きと恐れとを隠すことが出来なかつた。

「何處へ行くんです？」と、明は今度は責めるやうに訊ねた。

「お友達のところへちよつと……」と云つて別れようとしたが、

「ぢや、僕も其處等まで一緒に行きませう。……小田原から今歸つて来たばかりなんです」

明はさう云つて肩を並べて歩きだした。仙子はどうすることも出来なかつた。時刻の迫つてゐるのに氣づきながらも、停留所の方へ向ふのを避けながら、無意味に歩いて、

「私、ちよつと顔出しだけしといたら、直に歸るんですの」

「僕は此處で貴女に會つてよかつたんです。家では思ふやうに話は出来ないんだから」

明は盛装して居る仙子と一緒に歩いてゐるといふことだけで、興奮してゐた神經も次第に鎮まつて小田原で日夜絶え間なき煩ひとなつてゐた疑惑や、失望の淋しさも自から和らいだ。

「小田原から僕の出した手紙は届いたんでせうね。……少し酷いことが書いてあつたかも知れないが、獨りで田舎にゐると、あんなことが考へられるものなんですよ。……貴女なんかはどんな風にして三ケ日を送つたんですか」

「平生の日と別に異つたことはありませんでしたの。私、今年になつて今はじめて戸外へ出たんですの」

仙子は平生の乗車場となつてゐる飯倉片町の停留所を避けて、裏道を辿つて六本木の方へ向ふことにしたが、明はそれを怪しみもしないで、人通りの少いのを幸ひに、手を執らぬばかりにして歩いた。そして、叔父のことや叔母のことを訊ねたが、静夫のことについて話を觸れるのは恐ろしい氣がしたので、訊かうとしながら躊躇してゐた。

「私六本木から電車に乗つて行きますから、貴下は家へ行つて叔父さんとお話していらつしやいな。叔父さんはこの二三日、孤兒院のお話なんかに凝つてゐなさんですよ」と、仙子はいらしてゐる心を壓へて云つたが、明は、

「叔父さんの聖人氣取りは詰らない道樂なんだ。正月早々長たらしいお説法を聞かされちや溜らない。……それよりも。叔父の家へ行く前に一時間ぐらゐでも貴女とゆつくり話をしたいと思つてゐるんですが、貴女は友人の訪問を明日にでも延ばしちやどうです」と云つて、容易に別れようとはしなかつた。

「だけど、今日訪ねて行く約束してゐるんですもの」

「貴女は訪問の約束さへそんなに堅く守るんですか」

いやに力を籠めて云つた明の言葉に、仙子は心を震はせた。首垂れて黙つてゐると、

「そんな些細なことでも違約するのが氣になるのなら、今日訪ねて行つた方がいゝでせうが、しかし、僕と約束したことも斷じて違へやしません。……何故返事をしないんです？」

「……どんな約束なんですの」と、仙子は、頻に返事を迫られたので、やがて硬くるしい顔をして訊返した。

「何の約束もないもんだ。……叔父さんも知つてゐるし叔母さんも知つてゐるし公然の約束だからね」と、明はふといきり立つた。

「何を怒つてらつしやるか知れないけれど、往來で私を責めつけないやうにして下さいな。見

つともないから」

「だから、何處かで落着いて話したいと云つてゐるんです」

六本木の停留場へ來ても、明は別れを告げなかつた。仙子はこのまゝ家へ引返さうかと迷つてゐるが、電車が來ると、自棄氣味でそれに乗つた。すると、明もつゞいて乗つて、「叔父さんの家へ今日行く必要もないんだから」と云つて、空いてゐる所へ腰を据ゑた。

「赤坂の溜池」と云つて、仙子は切符を切らせたが、やがて、「飯倉片町」と呼立てる車掌の聲に驚いて、怖い物を見るやうに、乗客と乗客との隙間からコツソリ外を覗くと、烏打帽を目深に被つてゐる靜夫の姿がチラと見えたので、慌てゝ顔を背けて身を縮めた。……寒さに震へながら待ちあぐんでゐる靜夫の姿が、見てゐるよりも一層強く痛ましげに想像に浮びだして、申譯のないやうな氣がした。幸ひに明は窓の外には目を留めなかつたらしかつた。

乗換へのために神谷町で下りると、明も下りて來たので、仙子は腹立たしくもあり、恐ろしくもなつたが、最早免れる途がないので、

「私、今日はお友達の家へ行かないことにしますわ」と、乗換切符を揉みくちやにして抛り棄てた。

「貴女は怒つたの」と、明は強ひて笑顔をつくつて、相手の顔を覗き込んだ。

「いゝえ、いゝの、今日は溜池へは行かないことに決心したのですから」

「ちや、僕に附合つてもいゝでせう。僕はまだ午餐を食べないんだから」

明が飽くまで離さないで、仙子はどうにでもなれと云ふ氣になつたが、飲食店なんぞへ一緒に入つて行つて、しつこくいろいろなことを云はれるのは堪へがたくつて、何も食べたくないと云つて斷つて、公園の方から遠廻りして家へ歸ることにした。

今日こそ一生の生死に關はることが起りさうな氣がして、明に對して様子をつくらつてなごらねなかつた。停留所の側に當てもなく突立つてゐる靜夫の顔は、一歩々々行先にまほろしとなつて現れてゐるやうで、しかも、その顔は怨めしげに此方を見詰めてゐるやうに思はれた。

「貴女は大晦日の夜、白井と一緒に何處へ遊びに行つてゐたのです？」と、公園の杉木立の中へ入ると、明は穏かな口調で訊ねた。

「あの晩は叔父さんが遊んで來いと仰つたから出掛たんです。何處をどう歩いたのか、私よく覚えてやしないわ」

「そして、白井は貴女に何も異つたこと云はなかつたんですか」

「ええ。……」

「僕に隠したつて駄目ですよ。直ぐ分ることなだから。……白井といふ男にいつちや、僕があれほど貴女に注意しといたのに、どうして僕の言葉を用ひないんです。……少くとも白井は僕等二人の仲に水を差すくらゐなことはしないぢや置かない男なんだ」明は知らずくゝ氣色ばんでさう云つたが、内心それ以上のことを疑ひ恐れてゐるので、「僕は小田原から叔父さんに宛て手紙を出して、白井を貴女と懇意にさせるのは危険だと正直に知らせといたんですよ」

「でも、叔父さんはそんなに私を束縛するやうなことは仰有りやしないの。私、叔父さんにも誰れにでも自由を束縛されるために東京へ来たのぢやないわ」

「だから、僕が不斷云つてる通り、貴女はあの家の女王としていくらでも氣儘をすればいいんだ。男の友人を拵らへて好きなこととして遊ばうとも勝手だけれど、白井だけは悪魔のやうな心を有つてる男なんだから、少くも僕とは兩立することの出来ない男なんだから、貴女もそのつもりで警戒してゐて呉れなければ困りますよ。……白井に僕を愚弄させて、まさかいかゝ氣味だとは貴女だつて思やしないでせうね」

「……」仙子は、停留所の側にしよんほりしてゐる靜夫が、明の口から悪様に罵られるが聞き

づらかつた。自分たちの幸福を妨けてゐる悪魔は、むしろ明その人である様に思はれた。そして、生まれながらに有つてゐる反抗心が、肌を打ちつけるやうな明の言葉を聞くにつけて次第に涌上つた。

「貴下御自身に人から愚弄されないやうに用心してゐなすつたらいいでせう」

「僕が用心してゐても、貴女が白井の愚弄に甘んじてゐるぢや何にもなりやしない」明は相手が自分の言葉を素直に受入ないのが齒痒くて、「何時か云つたやうに、白井は僕の叔母をさへ誘惑しようとしたんだから」と、二度と口にすまいと堅く思つてゐた不快なことを、また口に出した。この言葉は先日にも勝じた激しい力をもつて仙子の心を動かした。靜夫にそんな不徳な所行があるか知らんと、世の中が暗くなつたやうな氣持がして、

「そんな恐ろしいお話は聞かさないやうにして下さいな」と、聲を震はせた。

「貴女が本當に白井といふ人物を理解しなすれば、こんなことまで云ふ必要はないんさ」明はいやなことを口にしたゞけの効果はあつたのを喜んで、ふと話を轉じて、去年の夏二人で打解けて楽しんでゐた海岸の美しい景色の思出を語つた。穏かな青い海を感傷的に形容したり、夕燒の美しさを話したりした。

が、故郷戀しとは思つてゐない仙子は、そんな話に何の共鳴をも感じなかつた。左右に見える公園の景色は冬枯れで寂しかった。

仙子が明に引摺られて冬枯れの寂い公園をうろついでゐる間に、静夫は目を一方に注ぎながら、停留場のほとりに立つて、仙子の姿の現れるのを待ちあぐんでゐた。が、二時を三十分も過ぎてもそれらしい影の見えないので失望した。外出の許可が得られないのか知らんと、自分の計畫の至らなかつたことも悔いながら、據ろなく諦めて、一人で日暮れ頃まで何處かで遊んで來ることにして踵を轉じたが、また思直して、もう五分も十分と躊躇して、停留場の側を離れかねてゐた。

と、ふと、目を留めてゐた一方の道から出て來たのは英吉であつた。

「君はもう歸つて來たのかい。馬鹿に早かつたぢやないか」と、いやに機嫌のいゝ顔して近寄つた。

「先生は何方へお出掛けになるんです？」

「なに、久し振りに下町の方へ散歩に行かうと思つて」

「ぢや、私もお伴させて頂きませうか、ある友人を訪ねたら不在だつたので、詰らなく歸つ

て來たところなんですから」

静夫はせめて英吉に隨いて行くことによつて、先つきからのムシヤクシヤ腹を慰めようとしたが、電車に乗ってからそれとなく聞くと仙子は疾づくに家を出たと云ふ返事だつたので、不思議に堪へなくなつた。彼女の身の上の間違ひでも起りはしないかと氣遣はれもした。すると、「先生の幸福」のために、清樂軒へ誘はうとする悪戯半分の企みを興かつてなごらるれなくなつて、銀座で下りて一二丁歩いたゞけで、ふと思ひ出した用事に假託けて英吉に別れた。

別れてから直に飯倉へ引つ返したが、自分が長い間待呆けてゐた停留場のあたりは、埃風が立つてゐて人通りも稀で、いやに陰氣くさかつた。

仙子の行先に心當りはないので、とに角家へ歸つて待つてゐることにして、静夫は不審に惱みながら、ひつそりしてゐる家の鬮を跨いだが、一人で退屈してゐたおとよは、

「よく早く歸つて來ましたね」と、喜んで迎へた。そして「今日はどうしたのか、貴下方が一人づゝ皆な出掛けちやつて、私だけが置いてけ堀りにされたんですよ。皆な遊びに行くところがあつて結構ね。私だけはお墓参りでもする外には、何處と云つて遊びに行つて見たいところは一軒もないんだから、随分心細う御座んすよ」

「東京には面白いところがいくらでもあるぢやありませんか。私ども何時でも御案内しますよ」

「でも、私世間の人が面白がつて出掛けるやうな賑かな所へはさして行きたかあないんですから。……今も獨りで考へてみると、近しい者までも次第に私と關係が薄くなつて行くやうに思はれてならないんですよ」

「だけど、仙子さんにしても明君にしても、貴女を大切に思つて、實のお母さんのやうに懐いてるぢやありませんか」

「いゝえ、お仙ちゃんも、來た當座は叔母さん〜と、私を親身に思つてくれてゐたのですけど、この頃は私のことなんぞ構つちやらないらしいの。側（そば）にゐて呉れるだけでも、私の方では有難いとしなければならぬでせうけれど、よく考へて見ると、あの女も矢張私とは縁の無い人間なのね」

「さう考へ過ぎない方がいゝですよ」

静夫は心に蟻（あ）まりがあるので、ハキ／＼相手を慰めることは出来なくつて、ともすると口を喋（しゃべ）んで、空に仙子の行方を追つてゐるが、そこへ間もなく威勢のいゝ足音が近づいた。

「明ですよ」と、おとよが悦（よろこ）びさうに云つたので、静夫も氣構へしたが、仙子が明と一緒に入つて來たのには、二人とも驚いて目を見張つた。

「今日は變な日だよ。皆（みな）が何か面白いことがありさうにして、一人々々出て行つたのを變だと思つてゐたら」と、おとよは驚きを微笑に變へて、「今度は叔父さんが誰れかを連れて歸つて來るかも知れないよ」

「叔母さんの十八番（じゅうはちばん）がはじまつた。叔母さんには變な日や不思議な日でない日はないでせう」
明は静夫の面前（まへ）へ二人連れで入つて來たのを、さも大晦日の夜の復讐（ふくせう）をしたやうに、ひそかに得意に感じながら、途中で行合つたことを叔母に向つて話したが、傍（そば）で聞いてゐる静夫には、それが腑（はら）に落ちなかつた。そして、仙子が盛裝（せいさう）してゐるために、一層（いっしょう）彼れの神經（しんけい）は惱（なや）まされた。

おとよは親（おや）しい若い者（もの）三人（さんにん）が前に揃（そろ）つたのを見て自（おの）から生々（いきいき）として來て、明に向つて小田原のことを訊（き）いたかと思ふと、仙子に向つて訪問先（ほうもんせん）のことを訊ねた。

「清子（きよこ）さんは家にゐませんでした」と、仙子は簡單（かんたん）に答（こた）へたが、静夫に對して云ひたいこと云へない抵悟（たいご）しさに、座（ざ）に堪（た）へなくなつて、小田原（おだわら）の話（はなし）はすんでゐる間に茶（ちや）の間（ま）をすり脱（ぬ）けて、他所（よそこ）の衣服（いふく）を着（き）たまゝ自分の部屋（へや）に閉籠（とじこも）つた。明（あきら）の話聲（はなしこゑ）が一番元氣（いちばんげんき）よく賑（にぎ）かに響（ひび）いて來た

が、その腹の中がさうでないことは彼女にはよく分つてゐるので、自分の幸福の邪魔物として、その聲を耳に入れるのも忌々しかつた。これから毎日のやうに顔を見合はせたり、言葉や手紙でしつこく責められたりするのかわと思ふと、とても辛抱が出来さうでなかつた。……以前は凛として男らしいと思つてゐた明の顔も、今日は活動寫真に現れる悪漢のやうに見えだした。

で、仙子は机の前にちつとしてゐると、恐ろしいことばかりが胸を襲つて來るので、氣を紛らせるつもりで、そつと障子を開けて、そこにあつた男下駄を穿いて、足音を忍ばせながら、庭木戸から外へ出た。近所の松飾りなど見ながらフラ／＼歩いてゐると、このまゝ何處かへ身を隠したいやうな氣がしたが、廣い東京にも、叔父の家を外にしては、自分を置いて呉れさうなところが一軒も思當らなかつた。

町内を一廻りしてゐる中、風は寒いし、詰らなくもなつたので、家へ戻つて庭木戸から何の氣なしに入らうとしたが、すると、縁側に立つてゐた三人の目が一度に彼女の顔に注がれた。

「何處へ行つてゐたのです？」と、おとよは叱るやうに云つた。

「郵便を入れに行つたわけですの」

仙子は目を伏せて、皆なの後から茶の間へ入つて行つたが、皆な疑ひは容易に融けなかつ

た。

「私の思ひ過ぎしか知らないけど、お仙ちゃんも今日は變だよ。何か譯があつて私の家へゐるたなくなつたのか知らないけれど、叔父さんのお不在中に無斷で出て行つたりなんかしちや困りますよ。私が貴女を虐めでもしたやうに思はれるぢやありませんか」

「ちよつと其處等を歩いただけなんですけど、お断りしないで済みませんでした」仙子は首垂れて目を潤ませた。

「今日のことは叔父さんに祕密にして、これから氣をつけて下さいな」

座は白けたが、明は「お仙ちゃんも捕虜のやうにされちや窮屈だらう」と附元氣で云つて笑つて、「今日は叔母さんの云ふ通り變な日だから、氣分を變へに、皆な連れて寄席でも聴きに行かうぢやありませんか。白井君も賛成だらう」

「さうだね。……寄席もいゝが、今日は僕は留守番しよう」と、靜夫は例に似ず頑なに云つた。

「ぢや、寄席もお止めにするかな。正月だから歌留多を取つてもいゝが、この家にや歌留多の札さへないんだから」

「金言歌留多といふものなら何處かにある筈だよ」と、おとよは亡兒の遺物の中にそんな物のあつたことを思出した。

「正月、勿々金言攻めに會つちや溜らない」と、明は苦笑して「娛樂も趣味もない人間は、乾涸びた聖人になるか、肉慾の奴隷に墮落するか、何方かになるんだね」

「それは金言だね」と、靜夫は應じた。この金言の實例として、英吉夫婦のことを思ひ浮べた。

靜夫は今日の失敗の真相を一刻も早く仙子に訊訊さうと思ふにつけて、容易に歸つて行きさうでない明が目障りになつてならなかつたが、つひに自分の方から明を誘ひ出さうと決心した。

「寄席はこの次に延して、これから君と二人で愛宕下の××軒へでも行つて、新年を祝ふことにしようか」と唆かした。

「さうだね」と、明が躊躇すると、

「君には大事な話があるんだ。僕と一緒に一緒に行つたことを後悔する恐れはないよ」

「だけど叔父さんに會つて行きたいから」

「ぢや、歸りにまた寄りたまへな。泊つたつていゝぢやないか。僕の部屋へ寝かせて上げる

よ

玄關番のくせに自分の家のやうな口を利くのを操つたく思ひながら、明は同意したが、懐中が淋しいので、出掛けに叔母を小蔭へ呼んで、小使錢の助力を仰いだ。

「貴下方は好きなことが出来て仕合せね」と、おとよは羨ましさうに云つて見送つた。

電車道へ出るまでの坂道は薄暗かつた。二人はあまり口を利かないで、ツカノと歩いて電車に乗つたが、愛宕下で下りると、

「君は今日お仙さんに何處で會つたのだ」と、靜夫は突然に訊いた。沈黙の後のその言葉は明の耳には威壓的に響いた。

「飯倉の近所さ」と答へて、「大事な用事つてそのことなのかい」と、冷笑するやうに云つた。

「まさかさうでもないがね……しかし、君は意外にあの女に執着してゐるんだね。彼家の玄關番になつたお蔭でそれが分つたよ」

「そんな話は今夜は止さうぢやないか」

「ぢや止してもいゝが、あゝいふ女の心は分らないもんだからね」

靜夫はいやに生眞面目に云つて再び口を噤んでスタク／＼歩いて、××軒の扉を開けた。酒の香

や煙草の臭ひで汚れてゐる温かい空気に觸れると、二人は譯もなく心を咬られた。正月らしく客が立込んでゐるので、席を取るにも窮屈であつたが、酔拂ひが氣焔を上げたり、女中を相手に巫山戯てるのを見てゐると、英吉の説教じみた話を謹聴してゐるよりも面白かつた。

「そら、あの女がお玉に似てるだらう。眉毛の恰好や鼻の形がそっくりだよ」と、静夫は此方を見て會釋した微醉の女を指差したが、明はさして心を留めないで。

「さう云へばさうだね」と冷淡に答へた。

「お玉に似てゐるもろもないも、今の君には問題ぢやないかも知れないね」

さう云はれると、明は自分の心を相手に見徹されてゐるやうで面羞かつた。叔父夫婦に對しては露骨に、むしろ誇張までして、仙子を戀ひる心を訴へたのだが、静夫に向つては十分に打明けかねた。「何だあんな田舎娘をそれほどに思つてるのか」と侮られさうなのが氣遣はれてゐた。

「君の大事な用事つて何だい」一二杯酒杯を取かはしてから、明は訊ねた。

「君がお仙ちゃんに執着がないと云ふのなら問題ぢやないが、萬一あるのなら今の間に考へ直した方がいゝね。僕の僻目か知らないが、あの女は君に對してそれほどの愛情を有つてゐないやうだし、先生の考へだつて、お仙ちゃんを君に許すつもりだかどうだか、餘程怪しいと僕は思つ

てるよ」

「だが、君が僕のために當人の意思を索つて呉れた譯ぢやあるまいし」と、明は笑ひに紛らせて軽く云つた。

「それは僕の觀察は傍觀者の僻目としてもいゝが、君自身當人の心を掴んでるといふ確信があるのかい。君たちの戀は傍から動かされなほほどに完全に成立つてるのかい。今日もあの女に出會つて陸まじく話でもあつたのかね。僕を羨ませるつもりで、腹藏なく話して聞かせて呉れないか」

静夫は口では座興のやうに云ひながら、心は緊張して、相手を打つべく構へてゐた。

「君を羨ましがらせるやうなことを僕が有つてると思つてゐるのかい」明は一生の苦手である静夫を羨ましがらせることも、恐れ入らせることも出来ないのが、今も無念であつた。

「さう謙遜しないでもいゝよ。お互ひに道徳家面してゐたつてはじまらないから、腹の中の煤拂ひをする氣で、何でも云つちまはふぢやないか」

「君にこそ面白い種があるんだから話したまへ。僕には女一人を制馭した例もないんだから駄目だよ」

「だけど、お仙ちゃんとは何年も前から知合ひなんだから、いろんなことがあつたらう。少くも僕とは違つて、長い間の親みがあつたんだからね」

「それはお互ひに氣心はよく知つてるさ」

明は仙子のことを強ひて考へさせられるにつれて、今日の彼女の素振りといひ、何か不安で堪らなくなつて、「あの女は叔父がわざ／＼田舎から呼寄せて實のやうに大事にして老後の慰藉にしてゐるんだから、君もそのつもりで、あの女にだけは多少の敬意を有つて接することにして呉れたまへ」と、腑甲斐なくも憐憫を乞ふやうに云つた。

「それは云ふまでもないさ。……君は僕をすべての人間を踏みつけて喜んでる男のやうに思つてゐるらしいが、それなら誤解だよ。去年君に義憤を起されて面皮を剥がれた時だつて。僕は先方の男や女に對して、多少の人情は有つてゐた。枕の上に涙を落したこともあるんさ。女のために男が涙を落すなんか下らないことだと、その後大いに悟るところがあつて、世の中へ出直す氣になつたのだが、……君はどうだね、女のこととて涙を出した経験はないのかい。君との長い交際だが、まだこんなことを話したことはなかつたつけが」

「僕だつてそれはあるさ」明は相手の隔意なき口振りに惹かれて浮かと思つたが、どんな場合にいと訊返されると、率直には明しかねた。他の親友とは異つて、静夫といふ男の前だぞと思ふと、どうしても素直に胸が開かれなかつた。

「僕は量見を立變へて世の中へ出直す氣になつてゐるのだが、どうも不思議だ。この頃になつて初戀を感じるやうになつたよ。君が御存じの通り、僕は女については刑狀持ち見たいなもので、しかも、例の涙を落した経験も二度や三度はあるんだが、今までの二番煎じか三番煎じで、この頃になつて初戀らしいものを感じてるやうなんだ。最後の戀を先へやつて、それから後で初戀の氣分を経験するのは些つと變だがね。……しかし、どうも僕の初戀なのさ。さう云ふと君には可笑いだらうが」

明には可笑く思ふ餘裕はなかつた。

「そして相手は誰れだい」

「……それは有るやうな無いやうなボンヤリしたものが、兎に角僕のこの脈管には初戀の波が打つてるよ。……かういふ氣持が僕を不幸に導くかも知れないがね」静夫は英吉夫婦に喰入つて、自分の將來の計をなさうとする一方の慾望が、所謂初戀のために破れさうなのを危んでゐたのだつた。

二人ともあまり手を付けられない料理の皿がいくつも食卓に並んだ。騒々しかった一組の客が歸つて行つた後で、お玉に似てゐるといふ女中が二人の方へ寄つて来て、お愛想を云ひながら酌をしたが、明は小煩く感じて相手にしなかつた。静夫一人酒杯を重ねて戯談口を利いてゐるが、やがてふと思ひついて電話帳を持つて来させて、清樂軒の番號を書取つて、其家のお花といふ女を呼出すやうにと女中に命じた。英吉が其家へ行つたかどうかを知りたかつたのであつた。

女中が側を離れるのを待つてゐる明は、

「君は謎見たいなことを云つてゐるが、明瞭に話して呉れないか」と、氣色ばんで訊いた。

「初戀のことかい。夢を見てゐるやうなもので、相手の名前を君の前に持出すのはちよつと困難だよ。……今更こんな甘つたれた夢のために、おれの精神を傷つけるのは腑甲斐ないことなんだが」

「君が眞正の戀愛を感じだしたのなら、君のために祝すべきことだ。自分で戀の甘いも苦いも痛切に知つて来たなら、他人の戀に妨害を加へるやうな残酷な眞似は自然出来なくなるだらう」

「いやなことを云ふぢやないか……他の男が色女の一人くらの拵へたからつて、それを嫉かんで妨げるやうな意氣地のない眞似は僕はしないつもりだ。……そんなことを君の口から聞くのは

いかにも心外だよ」静夫はさう云ひながら、顔には微笑を湛へて、「初戀の夢こそ昨今になつて見てるにしても、戀の苦い味や酸っぱい味なら、何年も前から多少は知つてゐるんだからね。……他人の戀に妨害を加へるやうな残酷な眞似がどうか、今君は云つたが、さういふ言葉を君の口から聞くのは少し皮肉なやうだよ」

明は静夫の面皮を剝がうとした去年の夏の自分の手酷い所行に思ひ及んだが、それとこれとは違ふぞ、自分には疚いところはなかつたのだと、飽くまで是認してゐた。しかし、今の場合静夫に向つてさう強い口は利けなくつて、

「われれ〜同士の間だけなら兎に角、恩のある叔父さんを困らせるやうなことはお互ひに注意しやうぢやないか」

「長い間失つてゐた信用をこの頃やうやく回復したのに、直にまた不信用になつて溜るもんぢやない。君の忠告を受けるまでもないよ」

「君が山村家の信用をそれほどに重んじてゐるのなら……」

明は、廻り遠い口調を止めて、「山村家の平和を破らないためには、仙子に君の惡辣な手を觸れるな」と、直截に云はうとしながら、さう云へば却つて相手に乗せられはしないかと氣遣はれて、

暫く躊躇してゐた。

すると、そこへ、「白井さん、電話口へらよつと」と、女中が呼立てた。

「お花といふ女が出て来たかい」と、静夫は汚れた口を拭つて椅子を離れた。

「いゝえ、貴下の仰有つたところへまだ掛けない間に、何方からか掛つて来たのです」

「それは不思議だ」

静夫は自分が此家にゐることが誰れかに知られてゐるのを不思議に思ひながら、急いで電話口へ寄つて受話器を手にした。先方は女らしいかつたがその聲はよく聞取れなかつた。

耳を澄まして幾度も訊返してゐると、「仙です」といふ幽かな聲が辛うじて耳に入つた。意外なので、家に用事が出来たのかと訊ねたが、先方が電話に不馴なので要領を得なかつた。たゞ、飯倉の自働電話の側にあるから直に來て呉れといふことだけはやうやく分つた。

静夫は三分の喜悅と七分の不安に心を亂しながら、とに角承諾して電話を切つた。

「僕はちよつと其處まで行つて來るから、君一人で飲んでゐて呉れたまへ。直に歸つて來るよ」と座へ戻つてから何氣なく云ふと、

「僕一人であるたつて仕方がない。一緒に出ようか」と、明は袂から鞆口を取出した。

「まあもつと落着いてゐたまへ。料理もまだ碌に食べないぢやないか。ゆつくり話したいこともあるし、時刻がまだ早いよ。……これつきりで別れちや折角話しかけたことに收まりがつかないから、君だつて氣持が悪いだらう」

静夫にさう云はれると、明もその氣になつて腰を落着けた。そして先日からの疑惑や不安が今夜こそ心残りのないやうに拭去られさうに待設けられた。

十二

静夫は電車で飯倉へ着くまでに、あまりに早く密事の破れさうなのを幾度も口惜しがつた。自分の智慧と容貌とで、山村家のすべてを心のまゝに支配しやうと一生の大事業のやうにして企んでゐたのに、去年の夏は明のために妨げられ、今度は自分の用意の行届かなかつたためにまた破れさうなのを忌々しく思つた。

自働電話の側にしよんほり立つてゐる仙子の姿は直ぐに目についたので、静夫は目くばせして、人通りの少い方へ足を向けながら、「叔母さんに断つて來たんですか」と、眞先にそれを訊いた。

「いゝえ、叔父さんはまだ歸つていらつしやらないし、叔母さんの御機嫌が悪いから私黙つて出て来たんです。晝間行違ひになつたことを一刻も早く貴下にお詫びしなければならぬと思つて」と、仙子は口早にその譯を話した。

何だそんなことだつたのかと、晝間からの疑念は雜作なく氷解したので、「ぢや僕も安心したから、これから直に家へお歸んなさい。若し叔母さんに怪しまれでもしたら、貴女に取つても大變だし、僕も今夜から彼處にゐられなくなるんですよ」と、靜夫は女の手の温かさに初々しい懐かしみを覺えながらも、家にゐるおとよの顔と××軒に残して来た明の顔とを思出して、早る心を強ひて壓へた。

「でも、私もう叔母さんの側にゐたくないの。何だか怖いんですもの。叔母さんは私を虐めやしないんだけれど、それでも何だか怖いやうなの。明さんに毎日遊びに來られても私困るんですから、一日も早く彼家を出た方がよかないでせうか」

「そんなことして事を荒立てちやお互ひの破滅だ。取越し苦勞なんかしないで、僕を信じてこれまで通りに叔母さんのお相手になつてゐなければいけませんよ。……貴女ばかりが彼家にゐるのぢやない、僕も一緒にゐるんぢやありませんか」

「だけど。……私どんな貧乏な思ひしてもいゝから、外で誰れにも氣兼ねしないで暮らしたいと思つてよ。今も家を出る時に覺悟をしてお金や大事な物を持つて来たんです。貴方にお預けしてもいゝわ。お金を出せば私を置いて呉れる家がいくらもあるんでせう。貴下ならさういふ家をよく知つてゐらつしやるでせう」

「そんな無法な覺悟をされちや僕が迷惑しますよ。先日晩あれほど僕の云つたことをもう忘れたんですか」

「ぢや、私これから直ぐに家へ歸らなければ悪いですかね」と、仙子は涙ぐんだ。「貴下もひどいわ。私、故郷を出る時に叔父さんばかりを手頼りにしたのぢやありませんの。情愛の籠つた貴下の御手紙を讀んで、私の命を貴下におまかせする決心をして、獨りで東京へ來る氣になりましたの」

「僕の決心だつて同じ事さ。一時の浮薄な考へでないことは貴方にもよく分つてる筈ですがねえ。貴方に云はれるまでもない、僕も今夜からでも先生の家を出て、何處かへ一緒に身を隠したいと思はれてならないんだけれど、そこがお互の考へどころなんです。將來の長い幸福の爲を思ふと、少しの間の辛抱ぐらゐ、いくらつらくつても何でもないんですからね」

「これからの家へ歸らなければならぬと思ふと、將來の幸福なんかどちらでもいゝと思はれてよ」

「二人で楽しい生涯に入りかけたばかりで、そんな哀れつほいこと云ふもんぢやありませんよ。……無理でも今夜は僕の云ふことを用ひて下さい。……どうしても用ひないんですかね」

静夫に強く云はれると、仙子も不承々々に同意して、

「ぢや、私一人で先へ歸りますわ」と、手を離して行過ぎた。

「僕も直ぐに歸るから心配しないで待つてゐらつしやい」

静夫も物足らぬ思ひをして別れた。身を縮めて道を急いでゐる仙子の影を見送りながら、よくよくの思ひで出て来た彼女に温かい珈琲の一杯も振舞はないですけなく追返したことを憐れに感じたが、ふと、自分の感傷的な氣持が可笑くなつた。……「同じ屋根の下に住んで毎日顔を見てゐるんぢやないか」

静夫は××軒へ急いで引返したが、幸ひに明はまだ其處にちつとしてゐた。

「女の聲だつたと云ふぢやないか。何處まで行つて来たのだ」と、明は迂散くさい目を向けた。

「女から電話を掛けられたつて怪しいことゝ限りやしないさ。寒い風で酒が醒めちやつたか

ら、一杯注いでくれたまへ」

静夫の出した酒杯に明は酒を注ぎながら、「その女を此家へ呼べばよかつたのに」

「ふゝん」と、静夫はニヤ／＼笑ひながら、「今夜は君のお伴をして、もつと氣の利いたところへ行つてもいゝんだが、先生の家に御厄介になつてゐる間は不謹慎なことは出来ないからね」

「だけど、先つきのやうに誰れかゝら呼出されたりするんだから、君の謹慎も當てにやならないよ。」

明は口では抑揚ふやうに云つたが、静夫が他の女に深填りしてゐる仙子などをば冷淡に見過してゐてくれゝばと、ひそかに願つてゐた。

「何時まで立つても君の信用は得られないね。……先生のお宅ではじめて君に會つたのは、六年も前のことだが、あの時からして、君と僕とは前生に敵同士だつた者の生れ變りのやうな氣がしてならないよ。そのくせ、友人の少い僕は、一番君と懇意にしてゐたし、暫く會はなかつた間にでも、終始君の事が思ひ出されてゐたのだ。不思議ぢやないか」

「僕も悪かつた。……君に悪意を有つてゐたやうなことがあつたら詫まるから許してくれたまへ」明は自ら胸甲斐ないと知りつゝ詫びて、「先日叔父さんの前で握手したのは形式だつたかも知

れないが、今夜は心から握手しやうぢやないか。さうしたら叔父さんも喜ぶに違ひないよ」

「それは僕も望むことだが、お互ひに心の中のことには自分の自由にもならないんでね。子供くさい戀なんかと、自分で嘲つて見ても、戀に囚はれればどうすることも出来ないやうなものだからね」

「それだから、僕は頭を下けて君の友情に訴へるのだよ。君は晒ふか知れないが、僕が今一人の女を思つてるとしたら、しかも順當に行けば二人の縁が成立つものだとしたら、たとへ助けてくれないまでも、邪魔だけはしないやうに心掛けてくれたまへ。誠意をもつて君に頼むのだよ」

「いやに廻りくどく云ふが、それは仙子さんのことだね。……ぢや、矢張僕が最初云つた通りだつたのだね」静夫は間の悪さうな顔してゐる相手の顔を見詰めながら、「しかし、そんなことは僕に頼むも何もないぢやないか。當人の心さへ君が確實に捉へてさへるれば、傍の者がどうしようとして、てんで眼中に置く必要はないだらう。ことに君の實の叔母さんが仙子さんの側にあるんだしさ。僕が彼家の食客になつたことがそんなに神經に觸るのかね。少し可笑いよ」

「君に限らず他の者が聞いても、僕の思過ぎを可笑く思ふだらうが、僕はこの頃あの女のことを思ふたびに、君の目が此方を睨んでるやうに思はれてならないんだ。君に悪意はないんだらう

が、不思議な手段で僕等の間に故障を起させてゐるんぢやないかと考へられて仕方がないんだよ」
「だつて僕は魔法使ひぢやないよ。お仙さんの君に對する態度がこの頃になつて急に變つて來たから、罪を僕に着せようとしても云ふのかい」

「罪を着せるんぢやない。頼んでるのだ」明はますます強敵の前に卑下るやうな氣持になつて、「叔父さんなどは世間知らずだから、云つたつて眞面目に取合つちや呉れないけれど、仙子の心にこの頃になつて迷ひの出て來たことは事實なんだ。僕はよくそれに氣がついてゐながら、三日間も小田原で一人で暮して來たのだから、その間のいやな氣持は君だつて推察してくれるだらう」

静夫は相手があまりに脆く屈するのを見て、却つて張合ひのない氣がした。

「君がそれほどまでに仙子さんに執着してゐようとは思はなかつた。あの初心なところが君の氣に召したのかね。……しかし、僕が誰れかを君の戀競爭者だと假定して、あの娘をわれ／＼が命がけで奪ひ合つてるとしたら餘程變だよ。女の無い國にゐるんぢやなしさ。お仙ちゃんが無人に傑れた女だといふ譯でもあるまいしさ」

「今夜はさう冷かさないで眞面目に聞いてくれたまへ。……君は今度のことでもまさか僕の競争

者になるんぢやあるまいね」

「今云つたことは假定だよ。……だけど、さういふ假定が事實にならないとは断言出来やしないよ。自分の心も時として自分の自由にはならないものだからね」

「僕を苦めるのが面白いのかい。君は仙子などを戀して苦はないのに、僕に苦痛を與へるためにわざとそんな思はせ振りをしてるんぢやないか」

「ぢや僕がどうしたら君は安心するんだらう？。生きてゐる間は僕だつて何かするよ。戀もするし遊びもするし、いゝ事が悪い事か何をするか、自分でも豫定出来やしない。僕の云ふことやすることが一々君の障害になるのなら、一思ひに僕を殺してもしなければ、君の安心は得られやすまいよ。……君は仙子さんのためなら、目障りになる僕の息の根を止めるくらゐな決心は出来るだらう。それくらゐな覺悟をしてかゝらなければ本當の戀ぢやないかも知れないね」

静夫は穩かな口調でさう云ひながら、興味をもつてそんな場合を空想してゐた。明は知らず知らず思つてゐたことを言當てられやたうな氣がして、目を伏せて口を噤んでゐた。

「君は僕よりも腕力が強いんだから、さういふ決心をされた日にや溜らないね」と、静夫はやがて快活に酒杯を差した。明は夢から醒めたやうにふと顔を上げて、相手をまじく見入つたが、

色の生つ白い、力の弱さうな静夫の何處かに手向ひがたい力が潛んでゐるやうに思はれてなうなかつた。ぐつと冷たいやつを一杯飲み干すと、

「何時まで話してゐても仕方がないから、いゝ加減で切上げて此家を出ようよ」と腰を浮かせた。

「君は今夜は飯倉へ泊るのかい」

「どちらでもいい」

「僕の部屋で一緒に寝ようか。……四五年前僕の下宿で、君が宿命論なんかで氣焰を吐いて、夜明しをしたことが一度あつたぢやないか」

「さうだつたかね……」明は静夫と親しかつた時を思ひ出すのも厭であつた。

二人は××軒を出て、電車には乗らないで、飯倉の方へ足を向けた。愛宕神社の前から廣町の通りへかけて、人の往來は稀であつた。明は最早歎願じみた口など利かないし、静夫も別れた後の仙子のことが氣になりだしたので、話は途切れ勝ちになつた。

「おい、何を考へてる？」

静夫は黙々として歩いてゐるのが無氣味になつて、ふとさう云ふと、明も沈黙の間の自分の空

想にふと驚いた。

「なにも考へてゐるやしない」

「お許しが出るとは云ふものゝ、こんなに紅い顔して歸つちや極りが悪いよ。どうしよう？。少し酔を醒ましてから歸ることにしようか」

「下らない遠慮をするね。あの家も今は飲み過ぎぐらゐで我々を擯斥すりやしないよ。」

「先生夫婦も子供が亡くなつてから、暫く會はない間に餘程調子が變つて來たやうだが、僕は彼家の關を跨ぐと、以前のやうに何かに偽善を装はなくちや氣が濟まないのね」

「偽善は酷いね。しかしあの二人には善と偽善との區別も見分けられないんだから」

それだから靜夫なんかを近づけるのだと、明は自分の不幸の原因を新たに英吉夫婦の所爲に歸した。

二人が家へ歸つた時には、仙子も英吉も事もなげに茶の間で炬燵に當つてゐた。

明は先つき此家を出た時とは打つて變つて、口を利くのさへ懶さうに憂鬱に沈んで、おとよに怪しまれても言譯はしなかつた。そして、靜夫に誘はれて書生部屋で寝ることにしたが、目が冴えて神經が昂ぶつて容易に寝つかれさうではなかつた。

「君はまだ目が開いてるのかい」と枕に就くと直ぐに快い睡りに落ちた、靜夫は、暫くして強ひて目を醒まして訊いた。ふと何かで身體を突つかれてゐるやうで、安心して眠つてはならぬいやうな氣がしたのであつた。

「僕はもつと起きてゐたいのだが、電氣を點けちやいけないか」

「起きて何をするんだい」

「書物でも讀んでゐよう。どうせ眠れないのに寢床にぢつとしてゐるのは却つて苦いから」

「ぢや勝手にしたまへ。僕は君のおつき合ひはしないよ」

靜夫は煩く思ひながら、寢返りして再び目を閉ぢたが、明は妄念を振落さうとしてつと跳起き、電氣の栓を捻ぢた。そして、机に向つて、有合はせの婦人雜誌をところ／＼開けて讀んでゐたが、何等の興味も感ぜられなかつた。火鉢に火の氣がないので、寒くはなるし煙草をも吸へないので、火種を取りに茶の間へ行つた。すると、其處では下女の舂は云ふまでもなく、叔父の寢息さへ、彼れの冴えた神經には幽かに響いて來た。皆ながいゝ氣持で眠つてゐると思ふにつけて、仙子の寢様が心に掛りだして、その部屋の方へ心を凝らし耳を澄まして窺つたが間が隔たり過ぎてゐるために、何にも聞えて來なかつた。

と、ふと皆なが正體なく熟睡してゐるといふことが、明の心に異様な力を與へた。彼れは火種を入れて炭を繼いだ火鉢を下へ置いて茶の間の電氣を消した。そして、そつと障子を開けて縁側へ出たが、意外にも仙子の部屋には燈火が點いてゐた。まさか燈火をつけつ放して寝るのぢやあるまい。まだ起きてゐるのか知らんと、胸を轟かせながら二三歩足を進めたが、衣擦れの音が聞えるともにも、仙子の立姿が障子に映つた。

明は進みかねて雨戸に添つて立竦んだ。細目に開けられた障子の間から仙子の顔が此方へ向けられたが、幸ひに見えなかつたのか、あるひは見えたために驚いたのか障子は直ぐに締められた。すると、明は最早其方へ近寄つて行けなくなつた。夢のやうな決心も怯んで、再び索り足で茶の間へ戻つて、火鉢を持つて書生部屋へ入つた。静夫の寝様は前の通りで微塵動もしてゐなかつた。明は机の前に長まつたが、たとへ仙子に見られなかつたにしても、自分の所行がわれながら恥かしくつて、悠長に雜誌など讀んではゐられなかつた。冷汗を掻いてゐた。叔父にも叔母にも許されてゐて、將來自分の妻となるべき筈の女の處へ、ビク／＼しながら夜中に忍んで行く必要があらうか。」と、自分の愚さが情なくなつた。

「だが、仙子はこんな遅くまで何故起きてゐるのだらう。讀書に耽つてゐるのではあるまい

し、何か心配事でもあるのだらうか」と、明は自分の今の惱みによつて仙子の心の中を想像したが、すると、彼女の眠りかねてゐる目の前には、静夫と明自身との影がちらつてゐるのに相違ないと思はれてならなかつた。その影の爲に彼女は惱んでゐるのだと、可憫さうにもなり憎らしくもなつた。

やがて彼れは静夫の寝顔を顧みた。三人の中のこの一人が勝利に安んじてゐるやうに平氣で眠つてゐるのを、無念さうに見詰めてゐた。

「まだ起きてゐるのか」と、静夫は頭を上げて聲を掛けた。

「僕は先つきから人間はよく眠るものだと思つてゐたよ」と云つて、明は粘つこい唾液を吐いた。

「僕はいやな夢を見てゐた」と云つて、静夫は手を伸して煙草に火を點けながら、「君ももう寝たらいいぢやないか」

「さう思つてたところだ。婦人雜誌なんか讀んだつて話らないからね」

明は心を取直して、電氣を消して寢床の中へ藻線込んだが、闇の中で一點の煙草の火を見てゐると、先きからの妄念が再び頭の中に煌めいた。「ぢや、僕の生命を絶たなければ君の安心は得ら

れまいよ」と、××軒で静夫の云つたことが、ともすると彼れの心に暗黒な刺戟を與へるのであつた。

考へ事は明日に延して、今夜は何もかも忘れてよく眠ることにしようと思つながら、「皆なが眠つてるのに自分だけ目をさましてるのはいやなものだね。僕にはあまり経験のないことだが」と、明が云ふと、

「しかし自分が寝てる時に、傍で起きてる者があるのもいやなものだね。何だか氣味が悪いよ」と云つて、静夫は夜番の拆子木に耳を澄ましながら、「縁起の悪い夢を見たものだ。深い水の中へ落ちてアブ／＼やつて息が詰りさうになつた夢を見てるたのだがね。君見たいな男が来て助けようとして手を延しても僕のところまで届かなかつた。……しかし、助けに来て呉れた男が君なのだから不思議ぢやないか」

「不思議でもないさ。僕が傍にゐるのだから」

「それはさうだが、夢の中で君が助けに来てくれたのが不思議だよ」

「ぢや、僕が後から君を突落しでもしたら、夢も君の理窟に適ふのか。……何方にしても夢に理窟をつけたりするの君らしくないね。それよりも、起きてゐる僕の方が餘程不思議なことを

感じて居たよ。晝間には考へられんやうなことが夜中には考へられるんだね」

「だからいゝのさ。君もこれからは眞夜中の考へを大切にしているたまへ。晝間の考へだけぢや平凡で仕方がないよ。君は僕が枕に就いたら夜明けまで正體のない人間のやうに思つてるか知らないが、僕はをり／＼寂とした丑三つ時に、目を開けて楽しんでる人間なんだ。闇の中に一人ほつちで、寢床に仰向けになつてゐたつて些とも退屈なことはありやしない。晝間下らない俗務を勤める僕なんぞは、夜中に目を開けて考へ事の出来るお蔭で、生甲斐のあることも出来るんだよ。……君だつてたまに一晚眠れなかつた／＼めに、晝間考へられんことが考へられたと云ふぢやないか」

静夫は眞面目にさう云つて、吸殻を火鉢へ抛り込んで目を閉じたが、間もなく睡魔に襲はれて寢息を洩らした。明は静夫の言葉によつて、先つきからの眞夜中の考へがますます胸にこびりついて、安らかな眠りを妨げられた。……「自分の幸福の邪魔になる者を何故滅ぼさうとしないのであらう？。自分の幸福が神の賜物なら、その妨害物は自分に取つては悪魔の權化だ。悪魔を滅ぼすのに何故躊躇する必要があらう？。憎いと思ふ者の生命を斷つ手段を考へもしないで、人前は體裁をつくらつて、腹の中で惱んでゐるのが何故人間らしいのか？」と、寂としてゐる夜

の聲はかういふ疑問を彼れの心に問ひかけた。

で、明は仙子の心の中を押はかるよりも、自分よりも戀の優勝者たる資格を具へてゐる靜夫を除くことについて、いろ／＼と空想を逞しくしてゐた。靜夫が今のやうに安らかに息をしてゐる間は、自分の一生安らかさは得られないやうにさへ思はれてゐるのに、其奴に對して力一杯の手出しの出来ないのが低悟しかつた。

「世間の風習」。「世間の云ふ良心」……自分も有つてゐるさういふものを彼れはかき撈つて棄てたかつた。

十三

明け方近くなつてからやうやく眠りに落ちた。明がおとよに呼び起された時には、置かな日が差してゐて、何處からかピアノの音が聞えて来た。

「下宿屋ぢやなかつた」と、明は自分の夢を振拂つて寢床を出て、「白井はどうしました？」とおとよに訊ねた。

「今叔父さんやお仙ちゃんを連れて教會へ出掛けましたよ。私も誘はれたけれど、知つた人の大勢

ゐるところへたまに行つて、いろ／＼なことを訊かれるのはいやだからね」

「今日は日曜だつたのか」と、明は朝寢をしたために靜夫に出抜かれたやうな氣がした。夜具を片付けながら、「白井は此家へ来てからよく勉強してゐるんですかね」

「さうらしいよ。休暇の中だけでも勉強したいと云つて、叔父さんの書物をよく借りて來てるやうだよ」

「叔父さんの書物は専門違ひで白井なんかには解かりやしませんよ。第一此處の本箱にはろくな書物が入つてゐないぢやありませんか。叔母さんは白井と僕とを同等に見てゐるなざるけれど、私立出の白井の學問なんかなつちやるないんですよ。あれで腰辨以上に立身出來たら不思議なものだ」

明が憎さげに云ふのをおとよは、またはじまつたのかと聞流して、拂壓と箒を持つて來て掃除に取掛つた。

明は一人で淋しく朝餐の箸を執つてゐるが、皆なが教會堂から歸つて來るまで此處にほんやりして待つてゐるのが堪へられなくなつたので、食事を終へると直ぐに會堂へ出掛けることにした。

「さうなさいよ。明けてはじめての集りだから、私の分までもお祈りして来て下さいな」と、おとよは、快く退出した。信仰はすでに失つてゐる彼女も、幼い時分からの習慣として、何となく祈禱や説教の有難みを感じてゐたのであつた。

明は昨夕静夫が「偽善を装つてゐる」と云つたことを途中で思出した。そして、行きつけない會堂の園を跨ぐとも、其處に集まつてゐる老若男女のすべてが、偽善者ぞろひのやうに思はれた。説教がはじまつてゐたので、後の方の空席に腰を卸して會衆を見渡すと、仙子は婦人席に慎しやかに座を占めてゐて、他の二人は教壇に近いところに肩を並べてゐた。

慈愛の深い神を信じ復活を信する基督教徒でない人間には、眞の希望や眞の歡喜のある筈はないと説いてゐるK牧師のキビ／＼した音調も、嚴しい顔付も、明の耳目にはたゞ偽善の現れとして聞かれたり見えたりした。静夫が殊勝らしく聴いてゐるのが特に可笑かつた。

ふと後を顧みた仙子と目を見合せたが、すると、仙子が異様な驚きを顔に現して首垂れたので、明は侮辱を受けたやうな不快を感じた。説教半に仙子に目くばせして他の連れを出抜いて、二人だけで會堂を出て行かうと空想しながら屢々其方へ目をつけてゐたのに、今の仙子の素振は蛇でも見つけたやうな様だつた。

で、明は情けもし、憤りもした。ますます偽善に力を加へて説き立てゝゐる牧師の聲はますます彼の耳に煩く聞えた。そして、いくら見詰めてゐても、仙子は首垂れたまゝ化石したやうな態度を持して、二度と後を見なかつた。

長たらしい説教がやうやく結末を告げると、讚美歌の合唱がはじまつたが、手持無沙汰にしてゐる彼の目の前へ、隣席の青年が歌集本を片寄せて見せた、「主の恵みはいたらぬ隈なし……」などの詞句は兎に角として、オルガンの音や會衆の肉聲は、今朝寢醒め際に近所から聞えて来たピアノの音のやうに、彼の心をそゝつた。が、それはK牧師の説いたやうな晴やかな希望や歡喜を彼の胸に湧かせるのではなかつた。浮世を悲しませる音であつた。

英吉は明の來てゐたのを譯もなく喜んだ。連立つて會堂を出てから、
「君もたまにはかういふ所へも來る方がいよ……どうだ、Kさんの説教は面白かつたらう」と云ふと、

「え」と、明は懶さうに答へた。そして、説教の批評は英吉と静夫とにまかせて、自分は家へ歸るまで口を噤んでゐた。しかし、會堂で仙子が彼れの方を顧みた時の目付顔付は、いかなる熱烈な説教にも勝つた深刻な印象を彼れの心に與へてゐて、歸る途すがらも、屢々新しい力を以

て彼れに迫つて来た。

で、明は静夫に随いて書生部屋へ入るとともに、「Kさんの説教に最後の日の最後の審判だのといふ文句があつたが、僕にも最後の日が来たよ。あんまり早過ぎるけれど」と云ふと、

「先生さへ若返らうとしてゐるのに、君は心細いことを云ふぢやないか。お互ひに希望の多い最初の日を迎へてゐるつもりでゐたらどうだらう」

「悪戯口は止して呉れたまへ」明は聲を潜めながらも興奮して、「僕はこの後此家の闘は跨がないかも知れないが、最後にたゞ一言君に訊いて置きたいのだ。實際君は仙子に對して、昨夕××軒で君が云つたやうな初戀を感じてゐるのか。……そのことをハッキリ君の口から聞いたなら、僕は今後此家へは出入りしないつもりだ」

「だつて此家は君の實の叔母さんの家ぢやないか。食客の僕に遠慮して、この家へ來るの來ないのといふのは少し可笑いよ。ある意味では卑怯な考へだとも云へるだらう。……お仙ちゃんのことなら、疑ひの掛つてゐる僕が彼此云つたつて仕方がないから、先生にでも訴へて裁斷して貰つたらどうだね」と、静夫は豫定の外れて、どうせ秘密の長く保てさうでないのを覺悟して云つた。

「僕はもう叔父さんには縋らないよ」

明は静夫に卑怯呼はりされることが尤もに思はれだして、静夫に白狀を迫る力も衰へて、口を噤んで寝そべつてゐた。静夫は秘密の暴露した後を氣遣ふとともに興味を感じながら、讚美歌を口ずさんでゐた。

すると暫くして、おとよが襖を開けて、「仙ちゃんは此方へ來てゐなかつたんですねと怪訝な顔して云つた。

「ええ。どうしたんです」

静夫は直ぐに變事を豫想して胸を轟かせたが、明も起上つておとよの顔を見詰めた。

「先つきから姿を見せないから、此方へ來てゐるのだらうと思つてゐましたのに。……變です
ね」

おとよがさう云つて茶の間へ行つたので、二人も後から其方へ行つた。二階から下りて來た英吉も一緒になつて、部屋々々を捜したり庭へ出て見たりした。が、仙子の姿は何處にも見當らなかつた。

「買物にでも行つたのだらう。遠方へ行く筈はないから今に歸つて來るよ」と、英吉は氣休め

を云つたが、この頃の彼女の舉動が思ひ合されて腑に落ちなかつた。

「私が注意しても貴下が眞面目にお聞きなさらないからこんなことになるんですよ。あの女も以前私の家に来た時とは人間が違つてるやうですもの。油断はなりませんよ」

おとよは獨りで騒いで、仙子の部屋へ入つて、押入を開けたり机の引出しを開けたりした。「まさか家を出出したのぢやあるまい」と、狼狽してゐる妻を制しながら英吉も、仙子の所有物を改めた。衣服や手廻りの細い物も揃つてゐて、何も持出したらしい様子は見えなかつた。置手紙のやうな氣味の悪い物は無論見當らなかつた。

「無断で家を出出すやうなそんな大膽なことの出来る女ぢやないよ」

英吉は仙子が歸つて來ても叱つたりなぞしないで、穩かに今後を戒めることにしようとおとよに云つて、午餐の用意の出來てゐる茶の間に腰をおろした。他の者も其處へ寄つて來たが、誰れの顔にも不安の色が浮んでゐた。

靜夫は女の淺墓さを口惜く思ひながら、今にも自分の頭上に落ちて來さうな惡運の槌を待つてゐた。

暫くは他の話などで紛らされてゐたが、一時間経つても二時間経つても、仙子が歸つて來ない

ので、今まで妻をなだめてゐた英吉でさへ慌てだした。そして、少し訊きたいことがあると云つて、明を二階へ連れて行つて、「君は氣がついたことがあるだらう。決して咎めやしないから、僕にだけ打明けて呉れないか」と、ひそかに訊ねた。

「いや私は知りません。……お仙ちゃんの家出を私の責任にされちや迷惑いたします」と、明は氣色ばんで答へた。しかし、仙子が自分を嫌つて靜夫に心を寄せてゐることを英吉に向つて明言するのは、いかにも自分の腑甲斐なさを現すやうなので躊躇された。

「君に責任を負はせるのぢやないが、お仙の所行について君の方で何か心當りはないだらうか。僕は先つきから思案に餘つてゐるのだ。萬一お仙の身に間違ひでも起れば、つまりは僕の責任になるんだからね」

「私が何のためにあの女をそゝのかして家出なんかをさせる必要があるか、叔父さんには直ぐお分りになるぢやありませんか」

「それはさうだ」

英吉は明に對する疑ひが融けるとともに絶望した。日暮れまでに仙子が姿を見せぬやうだつたら、おとよの云つてゐるやうに警察へ搜索願ひでも出さなければなるまいが、さうして表沙汰に